
イヴから始まる物語

山吹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イヴから始まる物語

【Nコード】

N9528P

【作者名】

山吹

【あらすじ】

自分の死期を悟った美雪の必死の願いは叶えられた。その代わり、今度は美雪が願いを叶えることに。叶えられた願いは小さく、叶える願いは大きかった。幸福にする力を託され、異世界に旅立つ美雪は・・・。

1・願い事（前書き）

最初に謝っておきます。
ホント、駄文ですいません。

1・願い事

・・・聞こえる

泥のように淀んだ闇に、深く沈んでいた意識がその音に導かれるように

ゆっくりと覚醒してゆく

・・・これは・・・ジングル・ベル

ああ、約束の時が来たと、久方ぶりにはつきりと思考できる意識に
思わず

「彼」に感謝する

鉛のように重く感じる瞼を、差込む光に慣らしながらゆっくりと開いていく

視線だけを動かし、「家族」がすぐ側にいることを感じホッとす

・・・あさん

・・・おかあさん

小さな、^{かす}擦れる声しか出ないことに悲しくなりながらも、それでも
精一杯

呼びかけた

・・・おかあさん

「・・・美雪？」

小さな小さな私の呼びかけに、それでもおかあさんは気づいてくれた

「美雪！・・・ああ、美雪」

私の枕元に駆け寄り、私と視線が合わさるとおかあさんの目からは
涙が溢れ出す

それに気づいた、おとうさんとおねえちゃんも私の所に来て優しく
頭や頬を

撫でてくれる

瞼を開けるだけでも大変だったのに、それでも自然と私の顔に笑み
が浮かんでいた

・・・おかあさん

私を産んでくれて　ありがとう

・・・おとうさん 大切にしてくれて ありがとう

・・・おねえちゃん 可愛がってくれて ありがとう

ゆっくり ゆっくりと、^{おも}想いが少しでも伝わるように心を籠めて

言葉にしてゆく

「美雪!？」

「嫌だ、そんなこと言わないで!」

「美雪」

私の言葉に何かを感じ取ったのか、みんなの顔に悲しみが浮かぶ

悲しませたかったわけじゃないの、でも、どうしても伝えて行きたかった

想いを言葉にするほど、意識は段々と白い光のなかに溶けてゆく

闇ではなく、光に溶けてゆくことに安堵するも、ああ これでお別れかと

悲しくもなつてゆく

・・・わたし 幸せだったよ だから 泣かないで

ずっと言いたかった言葉

でもずっと伝えられなかった想い

「彼」に願ひ

「彼」に叶えられた想い

だから私は笑顔のまま旅立てる

そして、私の意識は光に溶けていった。

1・願い事（後書き）

題名通り、12月24日から始めようと思いました。
が！構想が暴走してこんな日にちに・・・。

そんな感じの更新になると・・・テヘヘ

2・私の番

家族へ想いを伝え、笑顔で旅立てた私は光に溶けて消えた・・・
はず、だったのですが、気がつけば白い空間にフワフワと浮かんでいました。

「あれえ？」

と疑問符を浮かべ小首を傾げるも、返る答えもなくだたフワフワと漂うばかり。

しかし、そこで自身の身に起きている大きな変化に気づいた。

「体が軽い！ 自由に動く！」

両手を顔の前にまで上げニギニギしてみたり、上半身を捻って背中を見ようと奮闘したり、両足をパタパタと振ってみたりと、一頻り自由を堪能してみた。

おお・・・と思わず感嘆の声を上げ、両手のひらを見つめた。
私の体には所謂障害があり、それは先天的なもので物心つく頃には自身の体のことはある程度理解していた。

それでも、優しい家族との分け隔てない生活や時には厳しい躰、気さくでさり気無くフォローしてくれる優しい友達に囲まれ、不自由な体ながらも幸せに暮らしていた。

でも、高校3年生の冬の日、もう少しで卒業シーズンというとき私は事故にあった。

歩道を車椅子で移動していた私に、脇見運転の車が接触したようだ。

ようだ、というのは一命こそとり止めたものの、私はほぼ全ての感覚を失っていたので、唯一聞こえる音以外の情報は完全に外界からシャットアウトされ、私の意識が有る事も示せず、脳死の状態のうちに病室のベットで寝ているときに漏れ伝えて聞こえたただけなので、詳しい状況は分からず、その後も教えてくれることは無かった。

その後の検査で唯一、音にだけ脳波が反応を示したことで、脳死ではないことと、音だけは聞こえていることがわかり、それ以降は私の周りには音が溢れていた。

それは音楽であつたり、おかあさんの読んでくれる小説であつたり、おとあさんの話す色々な雑学であつたり、おねえちゃんの大学やバイト先の話題だったり。

毎日のように病院に通い世話をしてくれるおかあさん、仕事の帰りに疲れていても病室にきて色々と話してくれるおとあさん、付きっ切りのおかあさんに替って家事をし学校とバイトにと忙しいのに足しげく御見舞いに来てくれるおねえちゃん。

家族の愛に囲まれながらも、まるでその存在自体が感じられない自分の体と、音以外の無い暗黒の世界が少しずつ私の精神を壊していき、精神の崩壊に比例するようにゆっくりと体も弱っていった。

そして今年のクリスマスも近づいた日に、私は壊れていく精神と、薄れていく意識に死期を悟り、必死になってサンタクロースに願い事をしていた。

そして、私は思い出した。

私の願い事は叶えられた。

今度は私が、彼の願いを叶える番。

そういう約束。

見つめていた両の手のひらから、ゆっくりと視線を上げていくと、そこにはぶつくりとしたお腹をしたサンタクロースが優しい微笑みを浮かべて私を見つめていた。

3・旅立ち（前書き）

やっと旅立ちます。

文章を書くって難しいんですね・・・。

3・旅立ち

願い事を伝えるときに声だけは聴いていたものの、実際にサンタクロースを見るのは当然はじめてで……。

「ふわぁ……サンタクロースだぁ……」

と、マヌケにも呟いた私を責める人は居ないと信じたい。

目の前のサンタクロースは暖かそうな生地 of 赤い服に、襟や袖口に白いファーを付けズボンも赤く黒いブーツ、赤い三角帽にも白いファーが付き、帽子の先と胸のボタンには白いボンボンがチョンと可愛らしく付いている。

背には白い大きな袋を担ぎ、帽子からあふれる白い髪はフワフワと緩くカーブして、1番の特徴かもしれない白くて長いお髭と合わさってとても優しい空気を与えてくれる。

まじまじとサンタクロースを見やっていると、ふと、その優しい双眸と視線が合い自分が失礼にもジロジロと見つめていたことに気づき、軽く脳内で雄叫びを上げ悶絶しつつも慌てて頭を下げた。

「あああああの、この度は私の願い事を叶えてくださりありがとうございます。ごさいました、お陰様でちゃんと家族にお礼とお別れを伝えることができました。今は悲しんでいるかもしれませんが、きっと家族もわかってくれると思います。でも、みんなはこのことを知らないの。で私が代わりにお礼を言わせていただきます。本当にありがとうございます。」

息継ぎも忘れそこまでを一気に話し軽く肩で息をしていると、

「ホッホッホ、いいんですよ、お礼は必要ありませんよ」

と、優しく微笑まれる。

いやいやしかし、そうは言われてもほとんどの日本人は「あ、そうですか？　じゃあ気にしませんね」と言える民族性は持ち合わせておらず、両親も礼儀作法には厳しいほうだったので恐縮した私は再度さらに深々と頭を下げ、多々テンパリながら

「いえ、本当に心より感謝しております。」

と多少時代を遡ったお礼を返した。

「いやはや、困りましたね、そんなに畏^{かしこ}まれたのでは私の頼みごとが言いづらくなってしまいますね」

その言葉に、思わず「うつ・・」と肩をすくめ恐る恐る顔を窺うと笑顔は変わっていないはずなのにニンマリとしか形容できない雰囲気^{きふい}でこちらを見つめるサンタクロースと目が合う、すると、その笑顔に背筋がゾクリと泡立つ。

「では美雪さん、貴方には私の存在しない世界に行ってもらい私の代わりにサンタクロースになっていただきます。」

「・・・・・・は？」

と、呆気にとられる私を意にも介さず淡々とサンタクロースは説明を続けていく。

「サンタクロースの力として『幸福にする力』を授けますが、この

力は単体としては効果を発揮しません。これは人々が生まれながらに持つ『幸福になろうとする意思』と合わさり始めて『幸福』という形を取ります。」

は？幸福にする力？なろうとする意思？頭の中に目まぐるしく飛び交う？マークを整理する間も無く、尚も説明は続いていく。

「そして『幸福にする力』の作用は力の強さと効果範囲が反比例する関係にあります。私のように世界中の人々に幸福を与えようとすると、範囲は世界中に広がりますが力は弱くクリスマスという限られた日に皆が強く『幸福になろうとする意思』を示した時だけに限られます。が、対象者の範囲を狭め力の範囲を限定すれば巨万の富をも与えることが出来る様になるでしょう。」

矢継ぎ早の説明に頭がついていかずアワアワしているといつの間に近づいていたのか、サンタクロースがすぐ目の前に立っており笑顔を浮かべつつも少し困ったような申し訳なさそうな微妙な表情を浮かべ、そつと私の頭を撫でた。

「一度この力の方向性を決めると変えることができません。よく考え、貴方は貴方の物語を作りなさい。

そしてこれは貴方のパートナーとなる者です、大事に持っておきなさい。」

「パー・・・トナー・・・？」

と、そつと渡され今は自分の手のひらにある物に視線を落とすと淡く赤く色づいた2センチ程の丸い水晶の様な物に気づいた。

「あの、これは・・・」

しかし、視線を上げるとそこにはサンタクロースの姿は既に無く、それに気づくとフツと落下する感覚に襲われた。

反射的に何かを掴もうとするが元々フワフワと浮かんでいたので、都合よく藁わらが有る筈も無く私はドンドンと加速して落ちていった。加速し光に飲み込まれ薄れていく意識に遠くから声が届く

・・・応援していますよ　新しい紡ぎ手

・・・新たな　サンタクロースよ

「ふえええ　でもでも　お髭はイヤですー……」

と、的外れな返事を返しながら美雪は異世界に旅立って行った。

3・旅立ち（後書き）

サント「・・・髭・・・そんなにイヤかのお・・・」

4 ・なんで私がこんな目に・・・。（前書き）

思っているがあり、サブタイトルだけ変更しました。
本文には修正入っていません。

4・なんで私がこんな目に・・・

とある城下町。

不揃いな石畳がお世辞にも快適とはいえない道を作り、その上をガタゴトと馬車が通ってゆく。

しかし案外と道は広く2台の馬車がすれ違っても、端にさえ寄っていれば通行人も安全に行き交える程には整備されている。

道の両側に立ち並ぶ家々も石で組まれており、少し肌寒いような印象を受けるが所々にある街路樹や家の軒先に植えてある花々が優しい印象を付け足している。

窓に干してある洗いざらしの洗濯物の香りや、子供の喧騒^{けんそう}、それを叱る母親の声などを受けて道を進んで行けば、やがて大きな目の広場に出る。

広場はかなり広く、小さいながらも中心には噴水がありその回りには荷物を背負い行き交う人や、数人ではしゃぐ子供たちが遊んでいる。

広場の外周付近には馬車を利用した移動式の露店も出ており、雪の時期も近くなり晴れていても肌寒く感じるこの季節でも行商人や買い物客で賑わっている。

そんな露店群の一角で、自身の馬車の周りに所狭しと商品を並べ半ば商品に埋もれながら一人の女性が景気のいい声を張り上げていた。

「はい、そのねえさんウチの野菜は新鮮だよ。コレなんか今朝採ってきたばかりさ、いい色に熟してて美味そうだろう。」

そう言いながらトマトに似た真っ赤な野菜を指差した。

露天商の女性は張り上げる声に良く合う活発そうな明るい笑顔を振りまいていた。

レンガ色の髪は肩辺りでぞんざいに切りそろえてあり、肌は日に焼けた健康そうな褐色、彫りの深い顔立ちをしており、髪より一段と濃い赤めの瞳をしていた。

周りを見れば茶色や金に近い色と若干の色味の違いはあれ、街行く人々は概ね同じような外見をしていた。

身なりも似たようなもので麻でできた荒めの生地になめし皮でできた防寒着を着込み、皮でできたブーツのようなものを皆が身につけていた。

「あんとこの野菜は美味しいからね、それ5個もらっていくよ。」

「はい、250リブになります。」

「ああ、それと小麦粉も欲しいんだけど引いたやつはあるかい？」

「ええ、ありますよ、どんくらい包みましょう？」

と、客との軽快なやり取りをしつつ慣れた手つきで小麦粉の入った大袋に手をかける。

すると、ヒュルルルル……と、どこか気の抜けた音が聞こえてきた。

何だ？と思いつつ音のする上を見上げたたん、バリ！ドバサー！と天幕を突き破り小麦粉の袋の上に何かが落ちてきた。

驚きつつも視線を下に向けるが、その時には既に舞い散った小麦粉が濛々と視界を塞いでいた。

舞い散る小麦粉に売り物が台無しになり、キヤーと悲鳴をあげて離れていく声に折角食いついた客も逃したことに気づく。

あたり一面真っ白になっていくその場に、

「な！ なんじゃこりやあああ————！」

と、空しい彼女の雄叫びが轟いた。

その後、近くの露天商や気のいい客を巻き込みワアワアと慌^{あわただ}しく周囲を片付けどうにか体裁を整え、何故か彼女が周囲の人に謝り倒し、休む間も無く自身の馬車の大惨事を片付け終わった頃にはまだ高かった日もどつぷりと暮れて客足も途絶え、皆、家路に付く頃になっていた。

沸々《ふつふつ》とマグマのように煮えたぎっていた怒りも、時間の経過とヘトヘトになった体で維持し続けることは難しく、馬車の横に引いた枯れ草を編みこんだ御座^{ごしや}の上に寝かせた元凶の横に座り込み呆けたように見つめていた。

御座の上では一人の少女がスースーと寝息をたてていた。

全身余す事無く粉まみれでお世辞にも綺麗とはいえないが、とても整った顔立ちをしているのが窺^{うかが}えた。

彫りは浅めだがスツと通った鼻梁は形良く、うっすらと開いた唇も整っておりなんとなく高貴な印象すら受けてしまう。

同じ女同士でちよつとドキつとかしてしまった自分に軽く咳き込みつつ、馬車を掃除するときに使った所謂雑巾^{いわゆる}でチヨイチヨイと少女の頬を拭いてみた。

しかし小麦粉がこびり付いているのか少し拭いたくらいでは肌は見えず白いままだった。

スツと指を伸ばしその頬に触れてその違和感に思わず指を離れた、その頬の粉は拭き取れていたにもかかわらず、その肌の白さの為にまるで粉が落ちていないかのように見えていたのだ。

その白さに驚きつつも、改めて恐る恐る触ってみてると更にその肌

触りに驚いた、それはまるで絹のような肌触りだった。

絹なんて行商人が広げている物を冷やかしかで触ったことしかないが、それでもそれ以外に例えられるような物が他に浮かんでこなかった。

呆然としながらもその感触を楽しんでいると、少女の体がブルッと震えだした。

その事に辺りがスツカリ薄暗くなり始めており外気もかなり下がってきていることにハッとすると、この時期、日が落ちると一気に気温が下がっていく。

そして目の前の少女は薄い布地の服を着ているだけだ、このままでは凍死はさせないまでも風邪くらいは引かせてしまいかもしれない。チツと小さく舌打ちし、女は片手で少女を抱え込み御座を馬車に投げ入れ御者台の後ろのスペースに毛布で包んだ少女をそつと寝かせ、あわただ慌しく馬車を走らせ家路についたのだった。

5・目覚め

ヒューーンという微かな空調のような音にフツと美雪は目を開ける。

目の前には見慣れたはずの私の部屋が広がっている。

あの事故から3回の誕生日を祝ってもらっているから、少なくとも3年以上ぶりに見るはずの部屋に懐かしさを覚えつつそつと歩き出す。

車椅子で移動できるように家具やベットの間隔は広めに取ってある、元々広い部屋でもないので自然と置かれる家具は少なくなっている。ベットと空気清浄機、備え付けのクローゼットと化粧台、TV兼用のPCが置かれたデスク、必要最低限と私が判断したそれらを置いただけで車椅子で移動するにはギリギリだった。

セットとなる椅子のないデスクを指でなぞりながら部屋を見回す、と、いままで視界に入らなかった入り口側の壁にドアは無く変わりに大きな姿見が置かれていることに気づく。

あんな所に鏡は無かったはずだ、そもそもドアはどこへいった？私はどこから入ってきた？

幾つもの疑問が浮かんできたが、なぜか足が勝手に鏡に写りこむ場所に進んでいく。

ダメだ鏡を見てはいけないと恐怖にも似た感情が生まれ止ろうとするが足は止まることは無く、自身が鏡に写る寸前に硬く目を閉じた。強い恐怖感に顔を背け見ないようにするも、しかし逆に見ないことでその恐怖感が倍増され恐る恐る目を開け鏡を見つめる。

鏡に写る自分はサンタクロースだった。

暖かそうな赤い服には白いファー、赤い三角帽と黒いブーツ胸元のボタンには白いボンボンがチョンと付き、スカートは何故か膝上のミニスカート、そして驚きに開かれる瞳の下には白くて長いそれはそれは立派なお髭がデデーンと、

「だからお髭はいやあああああ……」

ああああ………

………あ？」

目の前には自分の部屋ではない、見慣れない光景が広がっていた。大きく開かれた窓からは眩しいばかりの光が差込み部屋全体を明るく照らし出し、窓の外から聞こえるチュンチュンという鳥のさえずりと相まって素晴らしいばかりの牧歌的な雰囲気をかもし出している。

寝かされていたであろうベッドで半身を起こし、何を掴もうというのか右手は力いっぱい前に突き出されている、状況からさっきのは夢だと直ぐに思い当たり、寝ぼけて過剰な反応をしてる自分が酷く恥ずかしくなる。

チュンチュンと聞こえるさえずりが良いアクセントになりマヌケっぷりに真っ赤になりながら、逆にそれで冷静になりゆっくりとあたりを見回した。

「やっぱり、知らない部屋だな……。」

ベツトは部屋の角に置かれており部屋全体が見渡せる。

壁はログハウスのように丸太がそのまま組まれている、触ってみるとツルツルしておりそのくすんだ色合いから長い年月使われていることがうかがえる。

部屋は広く6畳間程だった私の部屋がすっぱり3つは入るくらいの広さがある、天井も高く平均的な高さであろう私の部屋の1.5倍くらい、屋根の骨組みが剥き出しの構造の所為か実際にはもっと高く感じる。

置かれている家具もベツトに小さいテーブル、ちょっとした小物を置く棚に扉の無い衣装ケース、部屋の隅に置かれた布が被されたよくわからないものくらいで、洒落っ気の無いその部屋に妙な親近感を覚えたりする。

「ん……。」

と、遠い目で虚空を見つめ何事かをしばし考える。

「よし！」

と一声発し、荒い織り目のシートから抜け出しベツトに腰掛けるようにして床に足を下ろす。

床には動物の皮だろうか、いくつかの色合いの異なる皮がパッチワークよろしく太目の糸でぞんざいに縫い合わされて敷かれている。これはこれでセンスいいなあと思いつつ、床についた足裏の冷や

りとした感触とシーツから出たことでさらされた冷気に、

「うひひ、冷たい冷たい」

手を目の前に持つてきてニギニギ、

「おおう、動く動く」

立ち上がって、

「わーい、立てる立てる」

それからはもう目をキラキラさせて、歩ける歩ける、走れる走れる、ジャンプジャンプ、腕立て腕立てー、と子犬のように動き回る。

きやつきゃつと騒ぐ美雪に、ふいに呆れたような声がかかった。

「心配してたけどそれだけ動き回れるなら平気そうだね」

突然聞こえてきた声に、ビクーンと数センチ飛び上がって驚いた美雪はその勢いのまま後ろを振り返る、と、そこには一人の女性が立っていた。

開け放たれた扉に右手でもたれ掛かり楽な姿勢で美雪を見つめる女性性は、肩のあたりで切りそろえられたレンガ色の髪に健康そうな褐色の肌、優しいげに微笑む目には見たことも無いような赤味がかつた色の双眸がキラキラと輝いていた。

大きめな規格の部屋に合うかのようにスラリと背は高く、手や足には適度に肉が付きそれ以上にデデンと大きな胸が主張しているが、全体のバランス的には豹のようにしなやかな躍動感すら覚える。

同じ女性でありながら彼女から漂う色香についついボォ〜と見入っている、自然な動作で扉からスツと離れスタスタと目の前まで歩み寄ってくる。

近くで並び立つてみると思った以上の身長差に呆然としてしまう、事故後変わっていないければ美雪の身長は160センチ丁度、彼女はそんな美雪から頭1つ分以上、優に180センチの後半くらいに感じられた。

あんぐりと口を開けて彼女の顔を見上げていると、自身の顔にスツと伸びてくる彼女の指に気づき反射的にビクリと強張る、と、伸ばされていた指がピクリと動きを止め一瞬所在無げに彷徨った後スツと戻されポリポリと自身の頬を搔く。

まあ、と一息つき、

「元気そうでよかったよ、2日も寝っぱなしだったんだよ」

「え！あ、はい、それは心配おかけしてしまい申し訳ありませんでした」

と勢い良く頭を下げる。

「ちよつ、そんな畏^{かしこ}まらないでくれよ、こっちが困^{かしこ}っちゃうよ・・・あゝ・・・

ん、アタシはルビス、ルビス・フィールランド、あんたは？」

「わ、わたしは斉藤 美雪です」

「サイト？サイトって名前かい？」

「い、いえ、美雪 斉藤・・・美雪が名前です」

「ふっ、ん、ミユキ・サイトね・・・あまり聞かない響きの名前だねえ・・・」

微妙に違う気もするがまあいいかと思いつつ、

「あの、状況がイマイチ良くわかっていませんがご迷惑をおかけしたことで親切にいただいたことはなんとなくわかります。どうもありがとうございます！」

と、また勢いよく頭を下げてお礼を言う。

その後頭部を目を見開き見つめるルビスの視線に気づかず頭を下げ続けるミユキに、やれやれといった感じになったルビスは、

「文句の一つも言ってやろうかとも思ってたけど、そんな気も無くなっちまうねえ」

と独り言ちると

「え！ホントにわたし何かやらしかったです？」

と、勢いよく顔を上げるミユキと目が合った。

しばらく無言で見つめあう二人だが、先にルビスの方が嘖き出し、

「ぶっ！あつはははは、いいね、そういうノリは嫌いじゃないよ。

おいで、下のほうが暖かいし父さん達にも目が覚めたことを言いたい、いろいろ聞きたいこともあるしね」

ニヤリと笑みを残してスタスタとルビスは扉に向かって行ってしま
う、慌ててミユキも後を追う部屋を出てゆくのだった。

5・目覚め（後書き）

部屋を出るだけで1話使いました・・・。

6・カワイイじゃないか・・・

ギシッ、ギシッと微かに軋ませながら馴れた階段を降りていく。

その後ろをペタペタと足音をさせながらミュキと名のつた少女がついてくる。

今更ながらに少女が素足であることに思い至り室内とはいえ冬の寒さにさぞや寒かろうと、チクリと心に棘が刺さるが部屋に戻るよりも降りたほうが早いし暖かいと判断し罪悪感を抱えつつも歩を進めた。

歩きつつも先ほどのミュキの言動を振り返る。

ルビスが朝の収穫をし馬車に積み終え、街に行く前に自室に寝かしている少女の様子を見ようと部屋に戻ると、件の少女はベットの^{くだん}上で上体を起こし虚空を見つめていた。

少女、ミュキの姿を見た瞬間なぜかルビスは扉の影に隠れてしまった。

なんで隠れてるんだアタシ！？と狼狽しつつも視線はミュキから離せなかった。

意識が戻り動いた為か寝ているときより薄っすらと頬にも^{けっしょく}血色が戻り唇も紅を引いたように色づいている。

その唇の色が一層肌の白さを際立たせ覗き見している後ろめたさもありルビスの鼓動はドキドキと早くなっていた。

「よし！」

と掛け声と共に大きく^{うたかた}頷き両手で握りこぶしを作るミュキの髪がサ

ラリと揺れる。

それは光を吸い込むかの様な深い深い夜の色。

ミユキを連れ帰り母と二人で小麦粉の汚れを洗い落としてその漆黒の髪を見たとき思わず息を呑んだ。

今まで生きてきた中で黒い髪など見たことも聞いたことも無い、それは母も同じだったらしく二人で顔を見合わせたものの、汚れを落とし終えたミユキは夜が抱かせる負のイメージとは真逆の神秘的なものすら感じさせるものだった。

背の中ほどまであるその髪は重さを感じさせない細さでサラサラと流れる。

白い肌と黒い髪、少女になったばかりの体に細い手足、微妙なバランスで成り立つその姿は絹糸でできた人形のようにも思え、思わずその胸を見て規則正しく上下するのを確認してホッとしたりした。

「うひひ、冷たい冷たい」

聞こえてきた声にハツとなり意識を戻す。

それからの光景は奇妙としか言えなかった。

冷たいと言っては喜び、立ったり歩いたりで感動し、走ったり飛び上がったたり、寝転がって腕で体を上下に動かしたり、キヤーキヤーと転げまわってはしゃぎ回っている。

何をやっているんだ？

何の意味があるんだ？

何であんなにカワイイんだ！？

「心配してたけどそれだけ動き回れるなら平気そうだね」

気づくとルビスは扉の影から出て斜に構えながら声をかけていた。

ビクリと体を震わせ怯えたようにこちらを振り向く姿に、もつと近くで見たいと自然と歩み寄っていた。
目の前に立つと改めてその小ささに驚くが、私を見つめるその顔にドキリとする。

小さな顔に大きな瞳、夜空のような漆黒の瞳には無数の星のようにキラキラと光が宿り薄く開かれた唇に誘われるように無意識に手を伸ばすが、ビクリと強張る動きに我に返り自重気味に頬を搔いた。

不用意な行動を隠すように振った会話に、まるで貴族のような返答を返され困惑し、まさかどこぞの貴族のご令嬢かと内心冷や冷やしながらも名のりあい、その後更に深々と頭を下げられ貴族が私等庶民に頭を下げるわけがないと……そうさ……あいつらがそんな殊勝な態度を取るもんか！

「あの……？」

思い出された怒りにギリツと奥歯を噛み締めていると、不意に後ろから声をかけられ我に返ると目の前には扉があった。

「どうかしましたか？」

心配げに見つめられ自分が扉の前で突っ立っていたことに気づき慌てて扉を開けながら、

「あ……ああ、すまないね、ちょっと考え事をしてただけさ。
寒かっただろう？ 早く中で暖まりな。」

「かあさん、ミユキが……例の娘が起きたからスープ温めておくれよ」

誤魔化すように一気に話しミユキが室内に入ると、それまで交わされていた会話は止まりシン・・・と室内は静まりかえった。

テーブルには父と兄が糞り取ったパンを口に入れる途中のまったく同じ姿勢でミユキを見つめて固まり、母は千切った野菜をのせた皿を持ったままミユキを見つめていたが数瞬の後にはタンツと勢い良く皿をテーブルに置くと、まあまあと言いながらそそくさとミユキに近寄っていった。

「いきなり起き上がってだいじょぶなのかい？ 顔色は悪くなさそうだけど、どつか痛いとかないかい？

・・・って、こんなに冷たくなつて！ 足も素足じゃないか！

ルビス！ あんたなにやってんのさ！」

いきなり向けられた怒りに困惑しながらも、さつき刺さった棘もあり言い返せないでいるといつの間にか当然のようにミユキをハグしている母に半ば呆れるも、当のミユキが嬉しそうに微笑んでいるのでちよつとムツとしつつもやはり言い返せない。

チラツと視線を移し父を見れば、その顔は近所の爺さまが孫を見る顔に良く似たデレつとしたもので、隣の兄は耳まで真っ赤にしている。

いい加減その格好疲れないか？二人とも・・・と思いつつ、更に頬グリグリも加わった母と変わらず嬉しそうなミユキを見て一人思う。

なんというか、恐るべしミユキ・・・。

7・家族（前書き）

表現力が乏しくミユキとルビスの2視点で場面を被らせて進めているため進展が遅くなっております。

少しずつ改善していきたいと思っております、すいません・・・。

7・家族

促され、そう長くない階段を降りていくとすぐに扉に行き当たった。

目的地であろう扉の左右にもいくつか扉があり、平均的な日本の家屋に比べるとやはり広い間取りになっているようだ。

階段を降りて右側に廊下を進めば玄関らしきものが有る・・・と、さり気無くチェックしておく。

目の前のルビスは面倒見のいい姉御肌という印象だが出会って間もないし、これから会うであろう彼女の家族からどのような対応を受けるかわからない。

ルビスはどう見ても日本人には見えない、話す言語も知らない言語だ。

しかし意味はわかる、会話が成り立っている。

身の回りの物から受ける印象も日本とはかけ離れている。

間違いなくココは「彼」の言葉通り 異世界 なのだろう。

なにが起きるかわからない、ココでは私の常識は通用しないかもしれない、最悪ここから逃げ出さなければならぬ状況も想定しなくてはならない・・・などと若干警戒していると、目の前のルビスからユラリと怒気のようなものが立ち込める。内心を気取られたかと警戒を強めつつも、

「あの・・・」

どうかしましたか？」

と、さり気無く声をかけるとフツと怒気は消えうせ気遣うように部屋に促された。

さっきのなんだったんだろう？と思いつつも促されるまま部屋に入ると、何事か話していた会話は途切れ一斉に皆の視線が集まった。

ピタリと動きを止めた3人分の視線にジッと見つめられる迫力はかなりのものだ。

その中でルビスとよく似た女性が、器用にもこちらを見つめたまま手に持ったサラダの盛られた皿をタンツとテーブルに置くと、まあまあと言いながら近づいてきて私の前で小さな子にするように視線を合わせると、

「いきなり起き上がってだいじょぶなのかい？ 顔色は悪くなさそうだけど、どこか痛いとかないかい？」

と、気遣わしげに頭を撫で頬に触れてくる。

向けられる優しい笑顔に、今はもう会えなくなった家族が重なり自然と笑顔が浮かんできていた。

私の体が冷え切っていたことでルビスがなぜか怒られていたが、

「今すぐ温かいスープ用意するからね……ん〜でもホントかわいいわぁ」

などと頬をスリスリとされ、耳元で優しい言葉をかけられると思わずトロンと甘えてしまう。

私の所為で怒られたルビスも、やれやれといった風で特に怒った様子も無くテーブルの向こうから向けられる視線も優しいものにホツとする、若干二人が固まったままなのが気になるが……。

その後テーブルにつき、カップに入れてもらったスープをコクリコクリとゆっくり飲む。

野菜と塩だけの質素なスープだったが、煮込まれた野菜はトロリと溶け絶食状態だった体に優しく染み渡っていった。

冷えた体が温まり頭がポワポワとして若干眠くなるも、おちおち寝てもいられない。

「じゃあ、ミユキはあの時の事は覚えてないって言うんだね？」

「はい………すみません」

軽い自己紹介の後、いよいよ本題とばかりにルビスが話しはじめた。ルビスの説明では私は彼女の馬車の天幕の布を突き破って売り物の小麦粉の袋にダイブしたらしい。

確かに「彼」と居たあの空間からは落下するような感覚と共に意識を失ったけど、まさか本当にこの世界に『落とされる』とは………。

売り物を台無しにされたルビスには悪いが袋の上で良かったとホツとしつつ、もつと他に方法あっただろう！ウガアアア！と心で「彼」に罵声の制裁を与えた。

「それ以外のこと………自分の事とかは覚えてるんだよね？」

「………はい」

しまった！と思いつつも既に名のつている以上、記憶喪失という手は使えない。

「家族の人は？随分と心配しているでしょう、早く連絡を取った方がいいとおもうわ？」

ルビスの母、セリスが氣遣わしげに言ってくる。

「家族は……父と母と姉が居ましたが……死に別れました」

実際には死んだのは私だが、まあ嘘ではない。

内心で家族に謝りつつ神妙に俯くと場に重い空氣が立ち込める。

しばらく全員無言でいると、それまで腕を組んで瞑目して話を聞いていたルビスの父、トルビスがはじめて口を開いた。

「君は……帰るところがあるのかい？」

その言葉にピクリと肩を震わした私だが、なぜか顔を上げることができず俯いたままプルプルと頭を左右に振った。

そうか、と言ったまましばらく黙ったトルビスだったが思わず私が「え？」と聞き返す発言をした。

「なら、この家に住むといい……身寄りの無い子を放り出すわけにもいかんだろうしな。

なあ？ かあさん」

「そうねえ、その方がいいでしょう……でもひとつだけ条件があるわ」

予想外の話しの流れにポカンとしながらも、その条件が氣になりセリスを見るとニッコリと笑って、

「私のことは『おかあさん』って呼ぶこと」

「「はあ？」」

と、その言葉に私とルビスの返事が重なり、

「ず、ずるいぞ かあさん！ もちろん俺のこともちやんと」おとうさん』と呼ぶんだぞ！」

もう展開に付いていけず頭が真っ白になっていると

「ちよつと二人とも何言つてんのよ！」

とルビスが詰め寄る、まあ、当然の行動であろう。

「だって、ずっとこんなカワイイ娘が欲しかったんだもの」
ムスメ

「娘ならここにいないか！」

「お前は娘というより、どっちかという息子に近くてなあ」

「そうなのよ、不器用だから一緒に料理を作ることできないし、そんなにでっかくなっちゃってお洒落させることもできない・・・」

「うぐぐぐ・・・」

「なんだ？お前はミユキを引き取るのに反対なのか？」

「まあ！！」

と二人に非難めいた視線を向けられると、

「そ、そんなことは言っていないじゃないか！アタシだってその事には賛成だよ」

「じゃあ決まりね！」

「そうだな」

結果、当事者である私の意見は聞かれぬまま私はこの家族の一員として迎えられた。

失くしてしまった家族にまた会えたような不思議な感覚に、私の目からは涙がボロボロと零れ落ち、それを見た『新しい家族』に囲まれ安心させようと笑顔を浮かべるも、流れる涙は止まる事無く流れ続けた。

こうして私はこの世界でも優しい居場所を見つけることができた。

パンを口に運ぶ途中の姿勢で固まったままのルビス兄がちょっと気になったが、気にしないことにしておこう……。

7・家族（後書き）

名前が出てないぞ兄・・・

8・新生活

「ん！ん~~~~・・・・」

青く澄み渡る空に大きく両手を突き上げ、長時間同じ姿勢で凝り固まった背を伸ばしコキコキと音をさせながら大きく伸びをする。

「ふはっ」

と息を吐き出しながらダランと両手を垂れ下げるミユキの目の前で、ハタハタと風になびく洗濯物が揺れている。

洗いたての洗濯物が登りかけた太陽の光を反射する眩しさに、額に浮かんだ汗を袖で拭いながら目を細めつつ、大分この作業にも馴れてきたなあうんうん、と密かに自分を褒めた。

この世界で目覚めてから2週間。

ずっと寝たきり、その前は車椅子という生活だった為ここへきて健康な体を手に入れたとはいえその動作はたどたどしいもので、みんなの手伝いをする以前にまずリハビリ状態で、1週間を過ぎる頃にやっと少し手伝える位になれていた。

最近のミユキはどうか洗濯物を任されるようになり張り切っていたが、ここで文化の違いに大いにへこまされていた。

何しろこの世界には電気もガスも水道も無かった。

薪で火を熾おこし井戸や川から水を汲み電気も無いので電化製品もあるはずもなく・・・。

当然洗濯機があるはずも無く本でしか見たことが無い洗濯板で1枚ずつゴシゴシと洗っていた。

幸い井戸はすぐ裏に湧いていて遠くまで汲みに行くことはなかったが、何度もバケツで汲み上げなくてはならず終わる頃にはヘトヘトになっているのが常だった。

「あゝでもホントは洗濯だけじゃなくて料理や掃除も家事全般しなきゃなんだよなあ・・・

それに野菜畑の管理もか・・・そう考えると凄いなあセリスさん」

「こら！セリスさんじゃないだろう」

「ひうつー！」

独り言に思いもしない返事が返ってきたことに驚き、変な返事をしつつ飛び上がり慌てて振り向くとジロリと此方こちらを睨むセリスさんと目が合う。

なおもジーーーーと見つめる目に気圧されるも、意図することには思ひ至り、

「お・・・おかあさん」

と言いなおすと、よろしい！と満足そうに頷いてカッパと笑いながら家に入っていた。

敵わないなと苦笑しつつ、タライと洗濯板を濯すすぎ陰干してからミユキも家に入り冷えた体を暖めることにした。

今現在、家にいるのはミユキとセリスだけだった。

ルビスは3日の周期で街に露店を出しに行っていて今日は街に行っており、男二人は近くの畑で作業をしている。フィールランド家では主に穀物を作り精製作業を経て街に売りに出していた。

野菜畑は主にルビスが、街に行ってる間はセリスが管理をしていた。

いずれは野菜畑も手伝えたいと思っているが今は洗濯だけで手一杯で先は長いと日々気合を入れていたが、当面それよりも先に解決したい問題があった。

「おかあさん、お昼のパンは私が焼きたいんだけどいいかな？」

「あら、この前から何か作ってたようだけどできたのかい？」

「うん、やっとどうにか使える段階まで出来たと思うんだ、だから1回やらせて欲しいんだ」

「まあ、いいでしょうミユキのお手並み拝見させてもらっわね」

ありがとうと言いつつ急いで自分のベットに向かう。

ルビスと同室で生活するにあたって小さくなって使わなくなったベットの納屋から出してもらったとき、そこにある他の物の使用許可も取り付けていた。

そこで私は使われなくなった陶器を使い、街でルビスに買ってきてもらった数種類の果物を入れて天然酵母を育てることにチャレンジしていた。

この世界のパンは小麦粉に水と塩を入れて練り焼いただけの固いパンで、他の料理も味付けは質素ですぐに元の世界の味が恋しくなり、無いなら作るうと早々に食文化の改革に乗り出していたのだ。

その第1弾としてまずはパンである。

そもそも酵母で発酵という概念が無くまずは酵母から育てる必要があったのだ。

煮沸消毒した陶器の瓶にろ過した水を入れ4種類買ってきてもらった果物を1種類ずつ入れ、発酵させてみたのだ。

5日後3種類は失敗したがどうにかキウイに似た果物が巧く発酵してくれ酵母菌の液種はできた。

温度管理で挫折しかかったものの他の陶器にお湯を入れ湯たんぽにすることでクリアできた。

そのできた液種と小麦粉の地粉を1：1で混ぜ塩を一つまみ入れ更に4日後にやっと元種ができあがったのだ。

早朝に生地を作りベットに入れ湯たんぽで暖めておいたので1次発酵はOK、暖炉のある部屋に持って行き4等分に切り分け濡れ布巾を被せ2次発酵。

いつの間にか横で興味深げにセリスが見ていたが、説明してる余裕もないのでチャッチャと進める。

最初なのでシンプルに丸めただけの生地をオーブンに入れて20分ほど焼く。

オーブンがキッチンに完備されているのは助かった。

しばらくするとバターの匂いが立ち込め、その香ばしい匂いにセリスは驚き私は懐かしさに二人でキャーキャー騒いでいた。

ちなみにバターも自作で瓶に入れた牛乳をヒイヒイ言いながら振っている、見かねたトルビスが代わりにヒイヒイ言って作成したものだ。

できあがったパンは素晴らしく我ながら驚くほどの出来栄だった。

「このパンはミユキが作ったんだよ、聞いたこともない不思議な作り方で出来上がったパンも不思議なパンだけど、柔らかくっていい匂いがしてとっても美味しいよ」

と、畑から戻ってきた男二人にセリスが興奮気味に言うと、二人は顔を見合わせどれどれ？とキッチンに顔を出す。

それからは三人は初めての味に、私は懐かしい味に半ば取り合うよ

うに美味しい美味しいと食べ進めた。

もっと食べたいまた作ってくれと言われ、自分の故郷の文化が受け入れられたことに大いに張り切り今度は他の種類のパンも作ってみようと湧き上がる創作意欲にワクワクしてきた。

「・・・・・・で？私の分のパンは？」

「「「「「あ・・・・・・・・」「」「」」」」

ルビスの分を取っておくのをすっかり忘れており、パンのことを聞いたルビスは次の日の朝食でパンを食べるまでネチネチと文句を言い続けていた。

教訓、この世界でも食べ物への恨みは怖いようです。

8・新生活（後書き）

気づけばお気に入り登録がされている！
してくださったお二方ありがとうございます。

9・第2計画

さてさて、その後一週間ほど試行錯誤を繰り返しどうにか安定してパンを作れるレシピを確立し、天然酵母の育成と保存もトルビスが作ってくれた暖炉の余熱を利用する保存箱で解決した。

「新しくバターロールとクロワッサンっていうパンも作ってみたの」

「いつのパンよりいい香りがするな」

「小さくてカワイイ形ね？」

「こっちはフワフワで甘いのね」

「クロワッサンっていうのはサクサクしてて不思議な感じだなあ」

新作のパンも好評でこれなら新たな計画も実行できると確信し、そそくさと行動に移った。

「ルビス、ちょろとこっちに来てくれるかなあ」

「な、なんだいミユキ・・・」

微妙に身構えるルビスをいいからいいからと、キッチンに連れ込む。そこにはセリスが待ち構えており問答無用でパン作りにルビスを強制参加させる。

複雑な工程のパンのレシピを聞いて辟易していたルビスだが、実際にパン生地をこねる作業になると水を得た魚のように嬉々として張り切りだした。

「うははーおりゃー！うりゃー！」

と、ドシンドシンと生地を叩きつけている。

見る間に生地はできあがり、スツキリとした顔のルビスが誇らしげに額の汗を拭っている。

多少セリスがこめかみを押さえ、これでいいのだろうか・・・と悩んでいるが、私としてはホームベーカリー機ルビス号を得たことでニマニマと笑いが漏れ出していた。

私の計画とはパンの販売である。

小麦粉として売るよりこの世界には無い天然酵母パンという付加価値を付けた方が目新しさもあり効率がいいのではないかと考えたのだ。

もちろん養ってもらっている家族への恩返しもあるが、個人的にも使える軍資金を確保したいのだ。

その軍資金の使い道とはもちろん食文化改革第2弾、新しい調味料&スパイスの確保である。

パンから推察するに発酵食品自体が乏しいと思われ、味噌及びその過程で得られる醤油などはほぼ絶望的で、ならばせめてダシを取れる海産物として鰹節の類産物、昆布あたりがないかと目論んでいる。なぜ海産物かというと塩が比較的安価で取引されているからである。直接海に接してるわけではないがそう陰しくない山を越えたところに港町があり、豊富な穀物とで安定した物々交換がなりたってるらしい。

スパイスに関してはそれほど大きな期待はしていない、あつたら儲けもの程度に考えているが理想は胡椒の確保になるだろう。

そんなことを考えながらも、こねあがった生地はどんどん成形されていき2次発酵を経て香ばしく焼きあがっていく、その大量のパンを眺めながらポツリと二人が呟く、

「さすがにちょっと作りすぎじゃないかい？」

「そうだねえ、この量は食べきれないねえ」

「いいのいいの、これは私たちが食べる分のパンじゃないから」

と、私が作業の手を休めず答えるとしばし考えたあとルビスが不思議そうに

「じゃあこのパンどうするの？」

「明日は街に行く日でしょう？その時に売ろうと思って、あ、もちろん私も街に連れて行ってもらって一緒に売るからね」

と答えると慌ててルビスとセリスが反対してくるので街でパンを売るのに何か許可がいるのだろうかと思い聞いてみるも、どうやら反対されているのは私が街に出ることのようだった。

何でダメなんだろうと聞いてみるも、どうも理由がはっきりしない。私とルビスで何で？どうしてもと！と押し問答が続くも理由が分からないので納得もできずにいると、しばし考えこんでいたセリスがちょっと待ってなさいと言い奥のほうへ何かを取りに行った。

多少ムキになり言い争ったことで気まずい空気になり黙々と作業を続けていると、戻ってきたセリスから1枚の服を渡され着てみなさいと促される。

それは深いフードの付いたローブのような服で、フードを被るとス

ツポリと顔の中ほどまで隠れるほどだった。

「ミユキ、あんたの容姿はこころじゃ目立つんだよ。街に出ると何
が起きるか分からないからね、それを着てお行き。あと絶対に一人
にならないこと！必ずルビスと一緒に行動すること！いいね？」

「まあ、いつまでも家に閉じこもってるのも可哀想だしね……。
いい子にしてるなら連れて行ってあげるよ」

そこまで言われてやっとここでは特異な容姿に映る自分に気づき、
ムキになっていた自分が恥ずかしくなり思わず俯いてしまう。

「ごめんなさい、ありがとう。いい子にしてるから連れて行って」

気恥ずかしさにボソボソと小さな声で謝罪とお礼を言うと、セリス
に抱きつかれ頬をスリスリとされルビスには頭をグリグリと撫でら
れた。

その後慌ててオープンを開けるも、焦げすぎたパンは翌朝の馬と鳥
達のエサになった……。

10・実は遅い・・・。

バサバサと鳥が羽ばたく音に眠りから呼び覚まされる。

そろそろ起きる頃合だから丁度いいと思いつつ背筋を伸ばして体をほぐすと、いつもより若干スッキリした目覚めに思い当たる。

いつもより体が軽い感じがする、それに気分もサッパリとしたものになっている。

いつもと違う感じにルビスは昨日なにかやったか？と考えてみるとふとパン作りのことが思い浮かんだ。

子供の頃から兄と一緒に転げまわって遊んでいたので女の子らしい遊びとは無縁だった、よく悪戯して騒いでは母に怒られたものだ。

歳を重ね落ち着いてきたものの基本体を動かすのが性に合っており、料理や洗濯より畑仕事のほうがよほど自分に合っていた。

それが昨日のパン作りはどうだ！

力任せにパン生地を叩きつけるのはおもしろく、体の中の余分なモヤモヤも一緒に叩きだせるような爽快な気分になれた、しかも！しかもである！

あの行為は料理であり母の前でやっても怒られない！そればかりかいつも口うるさく言われては逃げ回っている『女らしく料理をしている』状態なのである。

ニヤニヤと思わず笑みが出てこれもミユキのお陰だなと隣のベットをみると、そこには既にミユキの姿は無かった。

「おはよ〜」

「おはよう。あら、今日はいつもよりはやいんじゃない？」

うん〜と気のない返事を母セリスに返しながらも視線はミュキを探す。

キッチンにもミュキの姿は無く、どこにいったんだろうと思っていると外からまだ羽音がしているのに気づき、裏口の扉を開け外に出る。

そこには多くの鳥たちに囲まれ嬉しそうに笑うミュキの姿があった。

登り始めた朝日に照らされ多くの鳥たちに祝福^{エサ}を与えてるようなその姿は美しく、私に気づきおはようと笑うその笑顔にこの子が自分の妹かと誇らしげにウンウンと頷く姉馬鹿がいた。

収穫した野菜とパンを積み込み、前日に積み込まれた荷物を確認し軽い朝食を済ませた後、

「「じゃあいつてきます」「」

「気を付けて行ってくるんだよ」

はいと返事を返しぶんぶんと手を振る嬉しそうなミュキに微笑ましくなりながら、馬車を進めた。

家から街までは1時間程でなだらかな丘を越えればあとは一本道なので、その時間を使ってミユキの質問に答えることにした。

これから行く街の名前はフィリスといい、レバント伯が収める領地に4つある街で2番目に大きな街であること、街の規模自体はレバント伯がいるザッカスの街には劣るが山一つ向こうには港町コロギがあり反対側の平野の先には隣の領地が広がっている。立地的に恵まれておりこの国でも有数の交易都市として知られていることなどを説明していった。

「なるほど、あと、物価ってどうなってるの？」

「物価？」

「うん、私この辺の物価というか・・・ぶっちゃけちゃうと通貨のこと知らないのよ」

この国の通貨を知らないことに驚くも、ミユキの容姿からここではない遠くの国から来たのかとも思い1から説明していった。

「最小単位はリーブだよ大体500リーブもあればそこそこの食事ができる、これがそうさ」

と袋から硬貨を出して手渡す。

5リーブ、10リーブ、100リーブ、500リーブ硬貨があり色は青緑をしている、1000リーブからは銅貨になり、銅貨10枚で銀貨1枚になる。更に銀貨10枚が金貨1枚、金貨10枚で白金貨1枚になるが庶民が暮らすには一ヶ月で金貨数枚あれば足りるだろう。

「なるほど・・・じゃあこの小麦粉の袋はいくらで売んの？」

「それは一番小さい袋だからねえ、今の時期だと250リーブってところかな。」

収穫時期になると200リーブくらいに下がっちまうけどねえ」

ふむふむと頷いたと思ったらブツブツと呟きながら何事か思案しました。

あーでもない、こーでもないと思っただけでブツブツと呟きながら何事か思案していた。先に街の門をくぐり、先に大口の客に商品を届けた後にいつも露店を広げる場所に馬車を着けると午前8時頃になっていた。

馬車から馬を離し近くの厩舎代わりけいしやに使っている木に繋ぐと先に繋がれていた馴染みの馬達に挨拶するように小さく嘶いてから桶の水を飲みだした。

10分ほどで露店の準備も終わり、馬車の横に御座を引きニコニコとそこに籠に入れたパンを並べるミユキを見て、ここでミユキに会ってからまだ一月くらいしか経っていないのか・・・と、あつという間に私たち家族の中でその存在が大きくなっていった妹に万感の思いを抱いていると、

「よっしゃあ売るぞー！」

という気合の声に、アハハハ・・・と乾いた笑いが漏れた。

11・初仕事

露店を広げた広場は広く、中央には噴水もあった。

冬の時期噴水の飛沫が冷たいと苦情が多かったらしく水は控えめだが、夏場には逆に盛大に噴出して多くの人が涼を求めて広場に集まり、色とりどりの夏野菜や狩猟の最盛時期もかさなり品物も充実し大層賑わうそうだ。

まわりには私たちのように馬車で露店をしてる人や器用に大荷物を担いできて御座をひいて店を広げてる人もいる。

金物や刃物の砥ぎをやってる人、アクセサリーや雑貨を売ってる人、色とりどりの生地を売ってる人など様々で想像より多くの露店が出ていた。

一人気合を入れていると初日なんだから気楽にやりなと、ルビスに頭をポンポンと叩かれるいい意味で自然と肩の力が抜けた。

「それで、パンの値段は決まったのかい？」

「うん、丸いパンとクロワッサンは100リーブ、バターロールは50リーブで売るつもり」

「うーん、普通パンなんかは自分の家で作る物で食堂にでも行かない限り買うつて発想はないんだけど、

このパンは私たちが知ってるパンとはまったく違うし案外売れるのかも知れないねえ」

「売れなかったらゴメンね、がんばってみんなで食べようね」

「ハハハ・・・」

と、微笑ましい会話を交わした後それぞれ持ち場につく。

さて、まずは下準備と、家から持ってきたまな板と包丁を出し試食用に数個ずつパンを一口サイズに切っていく、専用のパン切り包丁が欲しいが当然この世界にはない。

パンを潰さないように一生懸命に切っていると、ふと視線を感じ顔を上げてみると目の前に小さな男の子が立ってこちらをジーと見ていた。

「ボク、どうしたの？」

「おねえちゃんそれなあに？」

男の子が指差すのは売り物のパン。

「これはおねえちゃんが作ったパンだよ」

「これがパンなの？」

こちらの世界のパンはナンのように平べったく、そのままでは硬すぎるので大概スープに浸して食べている。酵母を使いぶっくりと膨らんだパンを見るのは初めてだろうその子は、先ほどより食い入るようにパンを見つめている。

すると母親らしき女性が寄ってきて、

「ごめんなさい、商売の邪魔しちゃって、ほらいくわよ」

「えー、このパン食べてみたいー」

「パンなんて家で食べられるでしょ」

「あの！試食できるので食べてみませんか？普通の製法とは違う作り方をしているのでいつも食べているパンとはまた違った味がすると思いますよ」

と、多少強引に会話に入り込むと子供はすぐに飛びつき、ただで食べられるなら・・・と母親もパンを手につった。ちなみに、試食という概念も無いらしく無料で味見が出来るの説明してやっと納得してもらえた。

「あら・・・おいし・・・」

「このパンあまーい」

「3種類あるのでよかったら食べ比べてみてください、好みのパンがあるかもしれませんよ」

それぞれ味と触感の違うパンに男の子はキャーキャーと騒ぎ、母親も注意も忘れて驚いている。

客は客を呼ぶもので、ルビスの露店に来ていた客も騒ぐ子供に何事かと寄ってきて試食をしては、こんなパンははじめてだと騒ぎ出しそれを聞いた通行人も集まりだした。

ついには購入するという客も出て値段を聞かれたので、

「はい、こちらのパンと丸いパンは『200リーブ』でこちらのバタロールというパンは『100リーブ』です」

と笑顔で答えると、横で見ていたルビスがズルっとこけた。

すると当然高いなという声上がり、購入する気だった客も考え出した。

「今までに無い画期的な製法で作っていてとても時間と手間がかかっており、ご自宅で作ろうとするのは難しいパンなんです」

と説明するも客は渋ったまま・・・まあ当然である、実際高いと思う。

それでもすぐに立ち去らないのはこのパンの味に食いついた証拠でもある、それを確認し内心ではほくそ笑んでいるがそれを隠し、さも苦渋の決断のように、

「わかりました・・・丹精こめて（ルビスが）作ったパンをこんなに美味しいと評価していただいたのですから2000リーブのパンを150、いや100リーブでこちらのパンは50リーブでお売りしましょう！」

そう宣言すると購入を考えていた客はもちろん食いつき、他の客もこぞって買い漁った。

とても一人では処理仕切れず見かねたルビスが手伝ってくれ、ピークを過ぎても客足は続きそう時間もかからず見事に完売した。

初日にしては上々すぎる結果に自分でも驚いていると、

「はあゝ凄かったねえ、まさかあんなに一気に売れるとは思いませんでしたよ」

「うん私もびっくりしてる、何回か売りに出して口伝くちでんで評判が広が

っていけばいいなと思ってたから・・・」

「しかし何だって最初に倍の値段を言ったんだい、元々100リーブと50リーブって言ってたじゃないか？」

「だって最初から100リーブだって言ったら少し高いかなって思うけど、200リーブですって言った後に下げれば安いと思うじゃない？お客さんは得した気分になれるし私はパンが売れて儲かる、ほらどっちも幸せ」

そう言うところビスは口をポカンと開けて驚いていた。

ちなみに小麦粉の小袋が約1キロくらいで現在の市場で250リーブ、1キロの小麦粉で丸いパンだとおよそ20個出来て200リーブ、バターロールも40個出来て200リーブ、クロワッサンだと80個近くできるけどバターが多く必要だし数量が多いとかかる手間が凄いので数が多く作れずかかる諸費用はどれも同じくらい牛乳や砂糖、塩とバターの材料費を入れても平均すると500リーブかからず作ったパンで2000リーブになる計算になる、光熱費は薪なのでタダである。

ルビスにそれを説明すると、うーんと唸りいつそパン屋でもはじめてみるかい？と言われたが丁重にお断りしておいた。

食文化改革でパンの改革に乗り出した当初からパンの製法を伝える団体は考えてあり、今日実際に売ってみて十分採算が取れると確信できたのでそろそろ本来の目的である『幸福にする』計画を実践することにした。

しかしサンタクロースさん、私に託されたという『幸福にする力』
・
・
・

いつまで経っても発動されませんか？

お陰で知恵を絞ってがんばっちゃってますよ。

12 街の住人（前編）

早々にパンを売り切り御座と籠を片付けルビスの露店を手伝っていると、ふいに知らない男性が現れ親しげに声をかけてきた。

「おう、ルビス今日はエライ繁盛してたじゃないか、なんか変わったモン売ってたらしいが何売ってたんだ？」

「ああ、じいさん騒がせちまって悪かったね。今日は家で作ったパンを売ってたのさ」

縦よりも横に伸びた感じのズングリとした初老のおじいさんが、薄くなった頭髮とは逆に盛大に延びた顎鬚あごひげに手をやりながらズンズンと近づいてくる。

深い皺が刻まれてはいるが眼光鋭く精悍な顔は老いても逞しく、職人が放つ一種独特の堅牢さを感じさせた。

「パン、パンなんて売りモンになんのかい？」

「ハッハ、ウチのパンは特別でね、他の何処にも無い誰も作れない代物なのさ」

自分もパン作りに参加したためだろうパンを自慢げに語るルビスに思わずクスクスと笑っていると、

「ん？この子は誰だい？」

「あ、はじめましてミユキといいます、ご挨拶が遅くなってますいません」

と声をかけられ慌ててお辞儀をすると、

「ミユキはアタシの妹さ、この子は体が弱くてね日の光にあまり当たれないから今まで街に連れてこれなかったのさ」

「ほう、それでこのローブってことかい、俺はキトンってんだよろしくな」

病弱にされてしまったがローブを脱げない理由を明かすわけにも行かない為その設定で押し通す、その後キトンさんは鍛冶師で今でこそ槌は持たないものの昔は名工として名を馳せたらしいこと、今はルビスの隣で跡目を継いだ息子が打った刃物や金物売り、その刃物や昔自分で打った物の砥ぎをしていると説明を受けた。

「まあ、俺のことはいいさね。ところでその特別なパンとやらはもうねえのかい？よかったら俺にも1つくれねえかい？」

「残念だけでもう全部売れちゃったのさ、今度来るときにはじいさんの分も持ってきてやるよ」

そうかい、と少し残念そうにするのを見てお昼用に持ってきていたサンドイッチに思い当たりキトンさんに勧めて見ると、

「あんたらの昼メシだろう、そりゃあ悪くて流石に貰えねえよ」

「いいんです、私こうやって街に来るの初めてなのでお昼は何処かで食べたいなって思ってたんです。
ね、いいよねルビス？」

「あゝそうだね、それもいいかもしれないねえ。
そうなるやうに弁当が残つちまつて勿体無い、よかつたらじいさん食つてくれないかい」

キトンさんは遠慮しながらも悪いなあと言いつつ私が差し出したパンを受け取る。

丸いパンに横に3分の1ほど切り目を入れてバターをたっぷり塗り、レタスとトマトに良く似た野菜を挟み、猪肉の燻製を薄くスライスしたものと一緒に挟んだ最近のフィールランド家お気に入りサンドイッチを受け取ると、驚きつつもペロリと二人前を平らげルビスと私を驚かせた。

「いや美味かつた、こんなに美味しいモンを食つたのは初めてだ。

これでお礼をしなかつたやあつちや末代までの恥だ、たいした物は無いが何でもいい好きな物を持つていつてくれ」

と半ば強引にキトンさんの露店に連れて行かれ、さあさあどれでもいいぞと勧められ遠慮しているとルビスがとつとアタシはこれと選び出し、なんでえお前もか！いいじゃんかケチ！とやり合つてゐるのを見て呆れていると、ふと四角い箱の様な物に目が止まつた。

「なんでえ嬢ちゃんはその様な物がいいのかい？」

と言われコクコクと頷くと、それは息子が作つた物だが作つた本人も使い道を考えておらず場所塞ぎの邪魔者なのだと言明を受け、逆に貰つてくれるならありがたいと4つあつた全てを手渡された。

食パンの型に丁度いい金型を貰い両者笑顔で分かれてホクホクと馬車に戻つた。

するとルビスが今日は早いけどこのまま露天を閉めて街を見て回り、

その後どこかで昼食にしようと言ってきた。

「いいの？まだお昼まで結構ある時間だよ？」

「ああ、パンを買った客がついでに野菜なんかも買って行ってくれたからね、この時間に閉めてもいつもより売り上げが多いくらいさ」

そういうことならと、手早く露店を片付けキトンさんに声をかけてから二人で街に繰り出した。

広場の露店は移動に向いている野菜や小物類が多いので今回はパスをして、ちゃんと街で店を構えている商店が多くある通りを重点的に見て回ることにした。

そこで瓶詰めにした植物性の油を見つけたので購入することにする。

家にあるのは動物性のラードでずっと作ってたマヨネーズを作ることが出来ず帰ったら早速作ってみようと思いながら次に魚屋に寄ってみた。

「岩から生えてる薄い板状の海藻なんですけど・・・」

と昆布のことを身振り手振りで説明すると、

「あゝ板草のことかな・・・今はないけど必要なら取り寄せてあげるよ。」

でもあんなもの何に使うんだい？」

加工して食べると言うと言われたが板草自体は漁の網に絡まり邪魔なので、定期的に採って駆除するくらいなので代金は輸送費くらいでいいと言われ6日後くらいには仕入れできるからと代金を先に払って店を後にした。

その後いろいろと見て回るもスパイスを取り扱ってる店は無くガツクリと肩を落としていると、

「そうだ、軟膏を買っていかなきゃいけないんだった……。
ミユキちよつと薬屋によるよ」

と連れられ薬屋に行くことになった。

商店街から外れ細い路地を進んでいくと看板すらない民家のような家に辿り着いた。

よくよく見ると横に『薬』とだけ素っ気無くこちらの文字で書かれている扉を開けて中に入っていくと、机に突っ伏して寝ている一人の女性がいた。

「またアンタは寝てんのかい。ほら客が来たんだからさっさと起きな！」

「んひゃう！」

ペシッとルビスが頭を叩くと変な声を出しながらムクリと頭を上げた。

「痛いじゃないですかルビスさん！」

「叩いたんだから痛いのは当たり前だろ、それよりちゃんと仕事しな。」

ほら頼んどいた軟膏受け取りに来たよ」

はいはい、と口を尖らせながら棚をゴソゴソとやりだす。

軟膏を受け取りルビスから妹だと紹介され挨拶をすますと彼女は自分分はチャオ族だと名乗った。

12・街の住人（前編）（後書き）

オチも何もない・・・
しかも前編とか・・・
ホントすいません。

13・街の住人（後編）

チャオ族と名のつた女性は独特な雰囲気を称えたままニコリと微笑んだ。

彼女の服装はインドの僧侶を彷彿とさせるもので、肩からかけた大きな布地が目を引く。白地に朱色で複雑な紋様が描かれており、この街では珍しい茶色の髪を後ろで一つに纏め、腰の辺りまであるその髪を同じ紋様が描かれた布で縛っている。

チャオ族？と私が疑問を口に出すと一瞬おや？と顔をくずし首を傾げるが、すぐに笑顔に戻り

「チャオ族とは皆が呪術師であり医師であり薬師である一族のことです。

チャオの村の外で名前を明かすことは禁じられており、私たちは総じてチャオと呼ばれています」

「名のりが禁じられている？なぜですか、なぜ名のつてはいけないのですか？」

と、つい疑問に思ったことを口にしてしまい何か重要な掟に関わることを不用意に聞いてしまったかと後悔したが、特に気にする風も無くあっさりと説明してくれた。

チャオ族は男女共に呪術、医術、薬草学を幼い頃から学ぶ。

両親を師とし、最初は産まれたチャオの里で学び5歳になると師である親と共に各地にあるチャオの村々を巡る、そしてその道中で野草を摘み集め乾燥させ薬にする術を学び、人々を無料で診察し医術を学び、飢饉や疫病に遭遇すれば呪術を施しその疫を払うのだとい

う。

人々はチャオ族が訪れれば無料で宿を提供し、歓迎の宴を開いて迎え、旅に必要なものを提供する。

その後独り立ちすると女性は街に定着し、男性はそのまま各地を巡り薬草を集めて各地に配りながらチャオ族同士で意中の相手を探して結婚すると里に戻り子を成す。

「私たちが名のらないのはチャオ族の行いを個人の行いにしない為です。

名のつた時点でその行いは個人のものと成ります、いい行いも悪い行いも。

しかしチャオ族として行なった行為はそのまま一族の行いとなるのです、いい行いをすれば一族皆に易になり、悪い行いをすれば一族皆にその責が及びます。

一人一人がチャオの代表であり、一人でも多くの人を救う為に私たちは名を封じ村をでるのです！」

「まあお陰でアタシの中ではチャオ族〃寝ボスケなんだけだな」

「うあー！」

ルビスの一言にチャオ族の、以後チャオは頭を抱えて苦悩する。

「す！すばらしいです！」

そんな二人を無視して私は叫び、それに二人がビクツと一歩引くがそれより早く私がチャオに詰め寄りその両手を捕らえながら一気に捲くし立てた。

「そんな素晴らしい一族が存在するとは！まるで国境無き医師団の

ようです、もうこれは祝福するしかありません！残念ながら今はまだできませんが力を入れた暁には真っ先に行使いたします、ええ！いたしますとも、というかこれにしないで何にするんだって感じですよ！！」

ああん！なんでまだ力がないんだー！と、尚も一人で悶えていると、

「妹さんだいじょうぶ？」

「ああ、時々どっかにぶっ飛んでいくけどすぐ戻ってくるから・・・」

「そう・・・」

と生暖かい目で見守られていたが、気づくのはもう暫く後のことでした。

コホンと小さく咳払いし、

「お騒がせいたしました」

「どういたしまして」

騒いだことで喉が渴き、それを察して入れてくれたお茶を飲みながら会話を仕切りなおした。

「大変感銘いたしました。今後もし私で手伝えることがあつたら協力させていただきます」

「ありがとうございます。チャオの総意として貴方に感謝いたします」

互いにニコリと微笑み合っていると、顎に手をやりうろんと思索していたルビスがそつと私の耳に近づき声を潜めて話しかけてきた。

「ミユキ、チャオにアンタのことを話そうと思っただけど、どうだろう?」

「え!？」

と突然の申し出に驚くと、

「チャオたちは信用できる、私たち家族以外にもアンタの事情を知ってる奴がいたほうがもしもの時にいいと思うんだよ」

もしもの時って・・・?と思いつつもルビスが信用できると断言するなら異論は無いので頷くと、

「チャオ、この子をちよつと見てくれ」

と言ってロープのフードをソツと捲くり、私の顔と髪を晒すと目の前のチャオが!つと息を呑むのが感じ取れた。各地を巡るチャオが息を呑むほどにこの地方以外でも黒髪と白い肌は珍しいのかと、改めて己の異質さにやれやれと思っていると、チャオはスツと手を合わせ瞑目しつゝ頭を垂れた。

「ちょ、ちょっとどうしたんだい？」

驚いたルビスは椅子から立ち上がり、私は事態にに着いていけずポカンとした。

「チャオの伝承にこう有ります。黒髪黒瞳の白い乙女は赤き従者を伴い幸福とともにやってくる……と」

「なんのことだいそりゃあ？」

というルビスの言葉も聞こえないほど、私は心底驚いていた。

黒髪黒瞳で白い肌……うん私だ。赤き従者……パートナーだと渡された水晶は淡く赤く染まっていた。そしてサンタクロースから託された力は『幸福にする力』……。

そっかぁ……パートナー君は従者でもあったんだねえウフフ……とか現実逃避している間に話は進みチャオはポンツと手を叩くと、

「まあ、そういう言い伝えがあるんですよ。

ありがたいので拜んでみました」

その軽い言い回しにルビスの肩がストンと落ち私は椅子からズリつと滑り落ちた。

「あーアンタはー！紛らわしいことするんじゃないよ！」

「んひゃう！」

ルビスがペシつと頭を叩くと聞き覚えのある悲鳴を上げて痛いですよー！と文句を言っているチャオと一瞬目が合つと、フツと真剣な

視線を向けられた・・・ような気がしたが、次の瞬間にはなおも怒りが収まらないルビスから逃げる為にスルリと外された。気のせいかな？と思っていると、あっ！こけた・・・。

床に置いてあった箱に躓きビツタン！と音をさせてチャオは顔からダイブしていた、あれは痛いなぁと思いつつも慌ててルビスと駆け寄ると頭の上にピヨピヨとヒヨコが見えるような半笑いの顔で気持ち良さそうに失神していた。

13 街の住人（後編）（後書き）

重要な人物・・・というか一族がやっと出せました。

14・良薬

べちよっ・・・という音と共にチャオの顔に濡れ布巾が被せられる、顔全体を強打しているためご丁寧に顔全体を覆うようにすっぱりと・・・。

「ちょっとルビスったら、ちゃんと絞らなきゃ水が垂れて床まで濡れちゃうじゃない」

「いや、この方がよく冷えるかと思ってさあ」

口まで覆われている為、当然のごとく呼吸のできないチャオはぷるぷると震えだす、チワワみたいでカワイイ。

「あゝお腹空いたなあ」

「そうだね、チャオが起きたら3人で食べに行こうか」

ぷるぷると震える手がかく様に空を彷徨い、やがて静かにぱたり・・・と地に落ちていった。

「「あ、死んだ?」「」

「ぶふあ!げぼげぼげぼ・・・」

予備動作の無い状態から勢い良くがばつと起き上がると、布巾が落ち自由になった口から貪るように空気を吸い込むチャオに、

「「おはよう」「」

「ぜえぜえ……他に言うことがあるでしょう……」

「「お腹空いた」」

ぴつたりと息の合った二人に力なくパタリと倒れこみながら、も、いいです……とシクシク泣くチャオでした。

果たしてミユキがルビスに感化されたのか、ルビスがミユキに感化されたのか、とても仲の良い二人は外見こそ血の繋がりを感ぜせないが確かに姉妹なのだと思わせる何かを持っており、倒れこんだままのチャオはじゃれ合う二人に微笑ましい気持ちになりながらも伝承のことが脳裏を過ぎり、二人に見えないようにそつと悲しげな表情を浮かべていた。

「んで、どうする？アタシらお昼食へに行くけどアンタも一緒にいくかい？」

「そうですね、この後は予約も入っていませんし一緒にさせていただきます。」

……と、その前に先にテーブルに出しっぱなしの薬草を片付けちゃいますね」

ゴソゴソと無造作に置かれていた薬草を片付ける手元を見ていたミユキは、ふと見覚えのある物を見つけ目を見開き、よくよく見てみれば他にもいくつか自分の知識に触れる物が有ることに気づいた。

「まままままって！それちよつとみせて！」

「きゃ！」

半ばしがみつくようにチャオに抱きつきその動きを止めてテーブルの上の薬草達をみる。

やっぱりこれは月桂樹の葉だ、それにこれは山椒の実っぽい、ああ！この匂いはシナモンだ、と注意深く観察してみれば探していたスパイスが周囲のいたるところに保管されていた。

薬屋にスパイス、この状況でやっと私は自分の過ちに気がついた。私の認識ではスパイスは調味料だったがこちらの世界ではスパイスは現役で薬なのだと。

チャオに他の薬草も見てもいいかと尋ねると、どうぞと笑顔で了承され、ありがとうと言いつつ壁に備え付けられた小さく分類された引き出しを開けて行くと、

「あつた！」

小さいコロコロとした黒い粒、黒胡椒だ。

「ケヒトの実ですね、蜂蜜と混ぜて処方したりしますがそれ単体では粘膜が炎症を起こしたりするので取り扱いが難しい薬です」

いくつかの薬草を売ってくださいと言うと少し考えた後に了承してくれ、黒胡椒の実とシナモンパウダー等数種類、貴重なものも多く今日の売り上げの大半を使い切ってしまった。

さっそく今日の夕ご飯にこれを使って1品作ろうと言うと、ルビスとチャオが料理に使うのかと心底驚いていたので味は食べてのお楽

しみにね　とニツコリ微笑むと、

「ミユキの料理の腕を疑うわけじゃないけど、薬草で作った料理となると……うゝん」

と頂垂れるルビスの肩をポンポンと叩きご愁傷様とニコニコしてるチャオに、今度街に来るときにはちゃんとチャオにも作ってきてあげるよと言うとルビスにポンポンと肩を叩かれ頂垂れるチャオがいた。

二人とも失礼な！今に見てるよ、と思いながらも予定していたカレーから無難なシチューに密かにメニューを変更するミユキであった。ほら、味覚の差とか色々あるし、いきなりスパイスからカレー作りって難易度高いし、最初はやっぱり食べて優しいシチューからだよねっ^{さんしやさんようひき}と心の中で誰かに言い訳をしながら三者三様悲喜こもごもで店を出る三人だった。

チャオの店からまた商店街のほうへと戻り、二人の馴染みの店へと入店し二人はさっさとメニューも見ずに今日のお勧めを注文し、慌てて私も同じものを注文してしまった。

「ゆっくり選んでよかったのに」

「いや、あの流れ的にはそういうわけにはいかないかと……」

「そついつもんかねえ？」

「さあ？私にはちよつとわかりません……」

と、ここでちょっと日本人特有の流され的民族性などを披露しつつ他愛も無い会話で盛り上がりながら楽しく昼食を終えると、

「こう言っちゃなんだけどミユキのパンを食べなれちゃうと、もう以前のパンじゃ味気なく感じるね」

「なんですか？ミユキさんのパンで」

「ああ、ミユキが考案した不思議なパンさ、フワフワで柔らかくていい香りがするんだ、スープに浸さなくなっただっていくらだって食べられるのさ」

「へえ、美味しそうですね、私も食べてみたいなあ」

「そうだね今度来るときにはチャオの分も作ってきてやるよ。ね、ミユキ」

「もちろん、しっかり取ってくれた薬草の代金分、私もしっかりパンで稼がなきゃいけないからチャオにもちゃんと『売りに』いくよ」

「あううう、貴重な薬草もあつたしあれでも結構オマケしたのにいい」

冗談だよと笑い合いつつも、まあと前置きしてポツリと一言。

「パンと一緒に薬草料理も持っていくのは確定なんだけどね」

だからそこで頂垂れるの失礼だから！
ルビスもそこでポンポンと肩叩かないの！

14・良薬（後書き）

良い子は冒頭の行為は危険なので真似はしないでくださいね。

15・心臓に悪い子だよ・・・。(前書き)

誤字修正、内容の変更はありません。

15・心臓に悪い子だよ・・・。

昼食を食べ終え店を出たところでチャオと別れ、さてこれからまた街を見て回るかい？と聞いたが、

「ううん、いろいろ見て回ったらちよつと疲れちゃったかも・・・」

「そうだね、一旦馬車に戻ってからそれからまたどうするか決めようか」

領きあい来た道に戻りつつも、初めての外出に馴れない初仕事も重なりミユキからは疲れを感じ取れる、馬車に戻ったら早めに家に帰ろうとルビスが考えながら歩いていると広場のほうからガヤガヤと声がしてきた。

なにかあったのかと念のためミユキを気持ち背に庇いながら進むと、どうやらアタシ達の馬車の周りに人だかりが出来ているのだと気づいた。

状況が読み込めずミユキと二人で戸惑っていると、目敏くアタシ達を見つけたキトンが駆け寄ってきた。

「おう、やつと戻ってきたか、大変なことになってるぞ」

「あ、ああ、一体何があったってんだい？」

「ん、詳しくはわからねえが、どうやらあそこに集まってるのはさつきパンを買ってった連中らしいぜ」

「え？」

よく見れば見知った常連の顔も見て取れ、そういえばパンを買って
いったなと思い当たった。

「もしかして・・・」

「ん？なんだいミユキ、何か心当たりがあるのかい？」

「心当たりと言うか、もしかしたらだけどさっき売ったパンに何か
不備があってクレームにきたのかも」

クレーム？文句を言いに来たってのか？あのパンにおかしなところ
なんて有るはずがないじゃないか、と呆然として群集を見つめてい
ると、ふいに、ルビスとキトンさんはココにいてねと言いつつスタ
スタとミユキが群集に向かって歩き出していった。

「ちょ、ちょっと待ちなミユキ！どこいくんだい」

「もしクレームだったらちゃんと責任を取らなきゃ、大丈夫そこで
待ってて」

なおもスタスタと歩を進めていくミユキに大丈夫な訳ないじゃない
かと内心で舌打ちしつつも、慌ててその後を追ったが追いついたと
きには群衆の中の一人に見つけられ、ワッと一気に囲まれてしまっ
た。

「おい！あんた！」

「はい、なんでしょうか」

勢い良く駆けてくる人々に怯む様子も無く、最初に詰め寄ってきた男性にも背筋を伸ばし毅然と答えるミユキに驚きつつも、いつても背に庇えるようにズイッと一歩踏み出した。いつの間にかミユキの横にはキトンも来ており眼光鋭く周りを牽制する。

「あのパンまだあるならもっと売ってくれ！」

「ズルイわ！私のほうが先に並んでたのよ、こっちが先よ」

「ワ、ワシが一番最初に買ったんだ、だからまたワシが一番に・・・」

「・・・それは関係ない！！！！」

我先にと言いつつ内容に、どうにかクレームでは無いと理解できたものの、だからといってこれからどう対処したらいいのかわからずオロオロとしていると、

「大変申し訳ございません、独自の製法で作っておりますので数に限りがあり本日の分はお陰様で完売しております、また焼きあがるまでに時間もかかりますので午後からの追加販売もできかねます、ご了承ください」

深々と頭を下げつつも断固無理！というようなその雰囲気気圧され、群集の熱も冷えていった。

「じゃ、じゃあ明日にはまた売りに来るんだよね？またここで売るんだろ？」

「いえ、現状の体制ですと3日に1度、量は・・・もう少し多くは

生産できますが、毎日の販売は不可能です」

「そんな！寝たきりのとうさんがあのパンなら美味いって食べてくれるんだよ」

「うちの子だって、普段は小食なのにあのパンなら美味しい美味しいうっておかわりしてくれるのよ！」

またもや群集の熱が上がりだし騒然となりかけるも、パン！と大きくミユキが両手を打ち鳴らすとピタッと騒ぎが収まる様子にキトンと二人で呆然としていると

「今日が初日の販売にもかかわらずこんなにも多くのご支持を受けたこと深く感謝いたします。しかし現状すぐに量産体制を整えることは難しいのです」

その言葉に皆が落胆の溜息をつくが、

「ですが、2週間後にはある程度の生産量を確保し、1カ月後にはお客様の満足いただける量をご提供できるよう最善を尽くさせていただきます。それまでは出来る限りの量を提供させていただきます」

ミユキが最初に言った今日はもう販売しないこと、3日に1回の販売であることはそのままだが、具体的な日数を提示して今後の体制を伝えた為か渋々ながらも納得して皆、帰っていった。

他の露天商の注目を浴びつつ馬車まで戻ると、ストンッとミユキが尻餅について座り込んだ。

「だ、だいじょうぶかいミユキ！」

「あははは……だいじょうぶじゃないかも……こわかった」

なおもハハハ……と引き攣った笑いを浮かべるミユキを見て、アタシは思わず半ば手加減を忘れてその頭に拳骨げんこつを落とした。
ゴチン！という鈍い音と共に炸裂した拳骨に、

「い！いったーい！！！」

と、頭を抱え、うおおおお……と唸るミユキの肩を掴みグイッと引き寄せて

「なんであんな無茶したんだ！昨日一人で勝手に行動しないって約束しただろ、何かあったらどうするんだ！」

「……だ、だって……」

「だってなんだい？！」

「……だって、もしルビスに何かあったらおかあさん達が悲しむと思って……」

それを聞いたアタシは一瞬力ツと頭に血が上ったが続く消え入りそうな、ごめんなさいという言葉に長い溜息をついて頭を冷ますとギョツとミユキを抱きしめ

「アンタだってそうだろう？アンタにだって何かあったら同じようにかあさん達は悲しむんだよ……」

お願いだから、もうこんな無茶は2度としないでおくれよ」

ごめんなさい、ごめんなさいと繰り返すミユキを抱きしめながら、
実はアタシはとんでもない子を拾ったんじゃないか・・・
と思いながらも、だからといって今更この子を手放す気など毛頭無
く妹ってのは手がかかるもんなんだねえと、優しく頭を撫で続けた。

16・貢物

コトコトコト・・・と、キッチンで煮立つ鍋を木のヘラを使って焦げ付かないようにグリグリグリと無心で掻き混ぜる。

目の前には2つの鍋があり、1つは玉葱と人参、鶏肉を買ってきた植物性油で炒めたあと月桂樹ローリエを加えアクを取りながら煮詰めているもの、2つ目はバターを多めに溶かしそこに小麦粉を加え良くバターと混ぜ合わせたあと少しずつ牛乳を加えて作っているホワイトソース。

玉葱を微塵切りにし飴色になるまでよく炒めたがコンソメスープの元があつたらなあとソースを掻き混ぜながら、ふと脳裏を過ぎつたが横で仁王立ちしているセリスのオーラを感じ取り再び無心！無心！と無我の境地に逃げ込んだ。

広場の騒動の後、少しでも早くパンの問題を進展させる為にルビスに連れて行って欲しい所があると言うと、とても良い笑顔でアイアンクローを決められ万力のような力と共に

「ミユキはとっても疲れてるようだから今日はこのまま家に帰ろうね」

「おおおおおおせのままに！！」

と家に強制連行され、パンが売れたことチャオに私の容姿を話たこと、そして広場での私の武勇伝までこと細かく話していただき、言い付けを守らなかつた私にセリスからの笑顔の制裁が降りくだ一頻り私ひとしきの悲鳴が木霊したのだった。

そして今現在、食べ物でご機嫌を取ろうと・・・いやいや当初の計画通り仕入れたスパイスで料理作成に挑んでいるのですが、後方から仁王立ちでジツと見つめられていると流石に気が滅入ってくるので、

「お、おかあさん・・・ちよっ・・・と気が散るかなあ・・・」

「・・・何か問題でも？」

「どうぞご覧下さい母上様」

ルビス以上の眼力に早々に白旗を揚げ無我の境地に行き着いたのです。

その後、煮込んだスープとホワイトソースを混ぜ合わせ塩と挽いた胡椒で味を調え、空いた鍋を手早く洗い新たに湯を沸かしブロッコリーを塩茹でする。

ブロッコリーは水で冷やし軽く絞って置いておき、もう1品できそうだと林檎を取り出す。

林檎は皮を剥かずに1センチほどの厚さに切り、バターと砂糖とともに軽くソテーしお皿に重ならないように並べ、トルビス秘蔵のお酒をちよつと拝借して振り掛けオーブンで焼く。焼き上がった林檎にシナモンパウダーを振り掛けると独特の香りがキッチンに広がり食欲をそそる。

ブロッコリーを鍋に入れ温めた後お皿に盛り付け、パンを添えて焼き林檎と共に皆がくつろぐテーブルへと運んでいく。

「はい、お待たせしました、噂の薬草料理です」

「薬草だ薬草だつてルビスが脅す割にはいい匂いがして美味しそうじゃないか」

「これは林檎を焼いてるのか?!それに変わった香りがするなあ」

「チャオの所で見た薬草が入ってるとは思えないなあ、ホントに入れたのかい？」

「しっかり入ってるよ、ね！おかあさん」

「ああ、ちゃんと入れてたね」

薬草料理というネーミングから想像してた見た目とは違う料理に安堵しつつも、誰も料理に手を付けようとしない。

へえ、そう、一生懸命作ったのに食べないんだ、あ、そう……

と目で語ると、皆恐る恐るシチュを口に運び出す。

「美味い！」

その後、美味しい美味いとパンの時のように大好評だったが他に表現の仕方もあるだろう・・・と思いながらも、スパイスの独特な風味も受け入れられて小麦粉料理第2弾も成功したことにガッツポーズをする。

ちなみに女性陣には焼き林檎が特に好評で、バターと砂糖の甘さと林檎の酸味にシナモンのアクセントで大いに女性中枢を刺激し、後日冷やして食べようと多めに作った全てを別腹スペースへと格納した。

デザートを食べ満腹になり上機嫌なセリスとルビスを観察し今なら行ける！と確信し、お怒りモードの時に降くだされた『しばらくの間は街への外出禁止令』の解除の交渉を開始した。

「ねえおかあさん、」

「ダメ」

「・・・いや、あのね、」

「絶対ダメ」

「お、おねえさま、」

「無理」

終了した・・・。

16・貢物（後書き）

次話ついに彼の出番が！

・・・くるといいなあ。

てか短かったですね、すいません・・・。

17・武器

知識は力にも成り得る。

こと私にいたっては異世界の知識があることで、この世界においてのアドバンテージは優遇されたものと言ってもいいだろう。

しかし、私には決定的に欠けているものがあつた。それは知識を活かす経験が決定的に不足していることだ。

今回のことは私の欠点が招いた致命的なミスと言える結果で、既に私個人の努力ではどうにもできない所まで深刻化しているといつてもいい程悪化している。

最初のミスは人間の中において食欲が占める強さを甘く見ており、パンを食べた家族の反応に有頂天になり碌^{ろく}な体制を整えないまま販売したこと。

そしてそのミスを引きずりパンの評判がもつとゆつくりと広がると判断していたこと。まあ、しかしいくらなんでも初日にあれだけの騒動になるとは流石に予想外すぎるのだが。

次にその場の混乱を治める為とはいえ具体的な日数を提示して今後の販売計画を示してしまったこと。この期日制限が問題の根幹でもあるのだが・・・。

そして一番のミスが、ルビスとセリスとの約束を破りその怒りを買ってしまったこと。

普段の生活はまったく普通、むしろ気遣いすら感じられる。

が！一度街へ行く許可の提示をするとルビスからはアイアンクロー、セリスからは過酷なお手伝いの刑のお返事が返される。

現在の私が出来ることと言えば、酵母の増産を進めることと大量に

作ったパンをルビスに託し街で売ってもらうこと、家族から街の行政や商人の組織の知識を聞き学ぶことくらい。

やはり直接街に行き交渉して歩かないことには事態は一向に進展せず、イライラと焦りが募るまま早くも5日が過ぎ去っていた。

明日はルビスが街に行く日であり期的にそれを過ぎると手遅れになる、その為昨日の夜に遅くまで打開策を考え今まさにそれを実行に移そうと獅子が獲物を狙うがごとく機会を窺っていた。

おにいちゃん・・・おにいちゃん・・・

「・・・ん？」

おにいちゃん・・・

通路の影に身を隠し小声でチヨイチヨイと手招きをする

「どつしたミユキ？」

しーーーー！と口に指をあてチヨイチヨイチヨイと手招きをして兄を家族から引き離す。

手の届く距離に來た兄をグイッと掴み、更に話し声が聞こえないであろう距離にまで引つ張っていき元の世界の漫画で仕入れた知識の視線は上目使い小首をちよつと傾げ目はウルウルと潤ませ困った顔で両手は胸の前で合わせ、

「おにいちゃんにお願いがあるの・・・おにいちゃんにしか頼めないの・・・」

うぐああ恥ずかしいいいいい死ぬうううと悶絶しつつも表面には出さずこちらでは『可憐な少女』に見えるらしい自分の武器を最大限に發揮してみせた、

「どどどどうしたんだミユキ！ 言ってみろ、俺に出来ることなら何でもしてやるぞ！」

真っ赤になった兄がドモリつつも好反応を示したことにニヤリとなるのを必死に堪えた。

寝ずに考えても大した案は浮かばず、結局は第3者に立ってもらい仲介してもらうことにしたのだ。

最初はトルビスに頼もうと思ったのだが、実はトルビスもちよつと怒ってるらしく反対はせずとも賛成せずという立場らしく、しょうがなく兄に白羽の矢をぶち当てたのだ。

「あのね、おかあさんとおねえちゃんを説得するのを手伝って欲しいの！」

「う……」

くっ！やはり怖気付いたか……。だがしかし、

「もうおにいちゃんしか頼れる人いないの……」

とソツと兄の胸にその身を預けた。

ぶふーん！という音と共に盛大な鼻息が後頭部にかかりゾワゾワと背筋に悪寒が走るが我慢我慢と堪えながら、ダメ？と甘えた声で聞くと

「ま、任せろ、俺が責任を持って説得してやるさ！」

「ありがとうおにいちゃん、だいすき」

その後アハハハとお花畑に行きかけてる兄の後頭部にチョップを打ち込みこちらに戻し、具体的な対策を話し合う。

この前のように私が広場に出て売るのではなくパンの販売はルビスに任せ、その間はチャオの店で待機すること、移動は馬車ではない極力姿を晒さないこと、当然商店街でも買物はいらないこと、そして訪れる施設は1箇所にし、絶対に危険の無い施設でありいい返事が得られないときは大人しく帰ること。

「よし、じゃあ早速説得に行こう」

具体的な対策は既に考えてあったのでさして時間もかからずにましまり、善は急げと私が促すと少し考えた後に兄は交渉は明日の朝1番にしようと言ってきた。

「ええ〜どうして？」

「俺に考えがある、大丈夫任せておけ」

怖気付いたんじゃないかなろうか？と一瞬疑うも、ふっふっふと不敵に笑う兄にそうではなさそうだと考えを改めるもその意図が読めず小首を傾げた。

その夜、頼りないものの具体的に対策を立てられたことで5日ぶりに深い眠りに落ちていった。

だから兄の計画にはその時までまったく気づくことは無かった。

17・武器（後書き）

兄が活躍する予感。

でも名前が出てませんねえ・・・。

そして過大な評価をお一人様から受けてました感謝感激です、そしてお気に入りも8件に！

これを励みに今後もがんばりたいと思います、ありがとうございます。

18・本音

まだ日も昇らない暗いうちから私は動き始める。

それは街に行った日より数日前からの日課になっており、暖炉に火を熾しオーブンと竈かまどに火を入れた後に井戸から水を汲み上げ手洗いの桶に注ぎいれる。桶の冷水で顔を洗いその冷たさに身震いしつつも、ペシンと頬を叩き気合を入れ新たに桶に水を注ぎ足し飲み水用の水も汲み家にとって帰す。

次に少し前から考えていた酵母パンの代わりになる保険のレシピの製作に着手する、酵母を使わずともバター作成の知識と手順さえ公表すれば家庭でも作れそうなパイ生地作成にチャレンジしているのだ。

前回好評だった焼き林檎をあれから新たに作り足し冷やして保存してあるので具材はOK、外で固めておいたバターを回収しつつ家に入り粉をよく篩ふるいにかけてバターを細かく刻みサクリと混ぜ合わせる。混ぜすぎて粘り気を出してしまわないように注意しつつ塩と冷水を入れ更に混ぜ合わせ30分程寝かせておく。

生地を取り出し麺棒で伸ばし数回折り重ねては伸ばすを繰り返す、生地3：1で切り分け大きいほうの生地をバターを塗ったお皿に敷き余分な生地を切り取り、具材を敷き詰め切り分けておいた生地を1センチ幅に切り格子状に上に並べていく。

今まさに作ったアップルパイをオーブンで焼きながらも深い溜息が漏れた。

「ダメだ・・・作り方は簡単でも冷蔵技術がないココでは冬はまだしも夏場はできない・・・」

と最初からわかっていた問題点に行き当たり、ただの逃避行動だねえこれ……と自嘲気味に笑っている

「おはよう、相変わらず早いのね」

「おはよう、おかあさん……なに、どうかした？」

いつもの時間に起きて来たセリスに朝の挨拶を返すも、ジッと顔を見つめる様子に聞き返すと、

「また何か変わったもの作ってるんだね……ホント、ミユキは不思議な子だね」

「不思議……変……かな？」

と困った風に笑うと、いいやと前置きして

「誰も知らない不思議な料理を作ったり、あつという間にアタシらの中に溶け込んできたり……」

本当ならね、アタシらはもつとミユキに警戒心を持ってても良かった筈なのさ。見たこともない外見をして誰も知らないことまで知っていた……でも、何でかねミユキをはじめて見た時何処かに置いて来ちまった大事なもんが戻ってきたような、そんな感じになったのさ」

私も、私も初めてセリス達を見たとき置いて来てしまった家族が、私を追い越し先回りしてここで居場所を作って待っていてくれたように思えた。

「ミユキはアタシらが独占していいような存在じゃないのかもしれないね……でも……でもね、それでもアタシはミユキを手放したくないんだよ」

なんでこんなに怖いのかねえ？と私を抱きしめながらのセリスの言葉に、どれだけ自分の身勝手さがセリスや家族に負担を強いていたかを改めて認識させられるも力いっぱいギョツと抱きしめ返し

「ごめんね、心配ばかりかけちゃってごめんね。でも、これだけは……今回のことだけは最後まで自分でやり遂げたいの、私がここへ来て初めて家族の一員としてやり始めたことだからちゃんと最後まで責任を持ちたいの」

しばらく無言で抱きしめあっていると不意に、そうかい……と呟き体を離すと私の頭を両手で包むようにしオデコとオデコをコツンと合わせて

「ならミユキ、フィールランド家の娘として街に行ってちゃんと落とし前つけてきな！

そして胸を張って戻っておいで！」

「はい！ありがとう、おかあさん」

「まったく、頑固なんだから……誰に似たのかしらねえ」

「おかあさんに似たんじゃないかなあ」

などと言いつつ再び抱き合っていると立ち込める匂いに気づき、慌ててオープンからアップルパイを出すも少し焦げてしまい顔を見合

わせて笑いあっていると、起きて来たルビスが扉のところだなにがあつたの？と呆気に取りられていた。

その後街へ行く許可を貰った事をルビスに話すと

「まあ元々今日から許すって言ってたしねえ」

「はあ?!」

慌ててセリスを振り返ると明後日の方を向いて吹けもしない口笛を吹いていた。

もう!と言いつつポカポカとする私に、少しはお灸も据えないとねえと言うセリスだったが、さっきのは紛れもなく本音なのだろうと心の中で再度謝りつつ怒った振りをしながらアップルパイを切り分け朝食の準備をするのだった。

(何か忘れてる……あ、そうだ!)

少しして起きて来たトルビスがいい匂いだなあと言いつつも

「なあ、セリオスが居ないんだがアイツはどこへいったんだ?」

セリオス？・・・ああ、おにいちゃんか、そういえばどこに行っ
たんだろう？

皆でどこに行っただと悩んでいるとパンツと勢い良く扉が開き泥
だらけでヨレヨレになったセリオスが入ってきた。

「とおさん、かあさん、徹夜で畑の仕事を終わらせてきた！

俺も街に行ってミユキを守る、だから今日ミユキが街に行くのを許
してやって欲しい！」

「ごめん、もう許してもらっちゃった、エヘヘ」

ポリポリと頭をかきながら言う私に皆の視線が集まり、次いでセリ
オスに移される。

「ああ、そうか・・・よかったね」

とセリオスは夢の国に旅立った。

皆様の視線が痛いです。

18・本音（後書き）

ミユキ視点かルビス視点かで悩み更新が遅れてしまい申し訳ありません。

そしてホントは兄のがんばりに折れるセリスの筋書きだったのですがセリスが勝手に動き変わってしまいました・・・。

名前出したから許してねセリオス君。

19・その顔やめなさい……

カタコトカタコトと規則正しく馬車は揺れていく。

家から街への1時間程の道程、決して長い時間では無いはずなのに馬車に乗り合わせる3人にはそれぞれ違う時間の流れが訪れていた。御者台の後ろで寝ているセリオスにはあつという間の時間だろうし、隣で白い灰に成り果てているミュキにはそもそも時間の間隔すら無いのかもしれない。

そしてアタシには何とも長いようなそれでいて短いような複雑な流れが押し寄せていた。

一晩かかって日中の仕事をランタンの明かりを頼りにやり遂げた兄には、家族一同感心するやら呆れるやらだったがミュキを思ってこそその行動に少しミュキとの間に距離があったように見えた兄にホツとしたりもしていた。

そして何故ミュキが灰になっているかと言うと、前日の兄への色仕掛け攻撃が実はバレバレでアタシとかあさんに覗き見されて大笑いされていたと知ったからだ。

兄が寝入ったあとに聞かされたミュキは真っ赤になり、頭を抱え支離滅裂に自問自答や現実逃避を繰り返した挙句に『真っ白に燃え尽きたぜ』と呟いた後この状態になったままである。

そしてアタシはいえ灰になる前のミュキから聞かされた今日の目的地の所為で、この何とも言えない複雑な心境に追い込まれているのだ。

「ミュキ、ミュキ……いい加減に戻っといで」

「ミテタクセ二……」

うわゝ根に持つてるなあと思いつつもどうにか宥め^{なだ}賺^{すか}して機嫌をとり元に戻すと

「ホントにあそこに行くのかい？」

「……わっからないなあゝ、なんでそこまで嫌そうな顔するかなあ？普通に孤児院にいくだけじゃない」

「ううう……」

そう目的地とは孤児院だった、孤児院……。

いや、孤児院自体がどうということではないのだ問題はそこにいるであろうアイツが問題なのだ。

いやいや、アイツ自体が危険とかそういう問題でもなくアイツの前にミユキを連れて行くというのが色々問題というか、バレるか……。

「……ルビスウ、なゝんか顔赤いよねえゝどうしてだろうなあゝ」

「うー！」

そうなのだ、この子は嫌になるくらい勘が鋭いことがあるのだ。

「ホレホレ、おねえさんに話してごらん。さあさあ！」

「アンタ妹だろ！そのニマニマ笑う顔やめなさいよ！」

キヤイキヤイと騒いでいると後ろから、ううん・・・と唸る兄の
声が聞こえ慌てて口を塞ぎ様子を見るも変わらずグウグウと寝
入っていることにホッと胸を撫で下ろし、声を潜めながら話の流れを
変える為に以前から気になっていた事をミュキに尋ねてみた。

「アンタさあ、兄さんと今回のことがあるまでちよつと距離取つて
たろ？」

「どうしてだい？」

「うう、直球で聞いてくるよねルビスって・・・」

んん・・・なんていうかね、接し方が分からなかったって言うの
かな。

おとおさんやおかあさん、おねえちゃんっていうのは知ってたし懐
かしい存在なんだけど、おにいちゃんって未知の存在というのか・
・。

もちろん可愛がってくれてたのは分かるんだけど、私の方からの返
し方がわからなかったんだよねえ」

なるほどねえと返しつつ、でも結構頼りになる存在だよねおにいち
やんって、うんうんと1人納得してるミュキに今後はもう少し打ち
解けて行くだろうと安心し兄を振り返ると、その顔はニヤッと緩み
きっていた。起きて盗み聞いてたのかコイツと思いつつもがんばり
に免じて黙っててやるかと、上手く会話を逸らせた事に満足して馬
車を進めていった。

お得意さん回りをする前にチャオの所にミュキを預けることにし、
店の近くまで行くと大通りまでチャオが出て待っていてくれた。 3

日前にパンを届けるときに事情を話してあったので気を利かせてくれたのだろう。

「じゃあ悪いけど昼頃までよろしく頼むよ」

「ええ、任せといてください」

兄にも残るか聞いてみたが1人で露店とパンを売るのは大変だろうと付いてくる事になった。

パン自体はすぐに売れるのでそんなに時間もかからずミュキの元に戻るだろうと、手を振り見送る2人を後にしお得意様の配達を終え広場へと向かう。

「ミュキに何か頼まれてたみたいけど、何？」

「ああ、帰りに商店街の魚屋で品物を受け取って来てくれたって」

そういえば何か注文してたなと思いながら広場へと差し掛かるとその光景に兄が驚く。

「な、なんだあれ！」

「この前のときもそうだったよ……ああ、でもちよつと増えるっばいね」

広場には人が列になり並んでいる。

目当てはこのパンでありアタシ達の馬車が見えるとザワザワとします。酵母菌とやらが上手く増産できているらしく初日に比べれば遥かに多い量を焼いてきてはいるが、到底足りそうも無いのは一目瞭然で今回もまた買えなかった客の対応を考えると今からウンザリし

てくる。

前回からキトン爺さんの所でもらった型で作った食パンも加わり、それ1つで他のパン数個分の量がある為売る側の負担も少しは減ってはいるが数が多くなっている分大変なことには変わりなかった。

「さあ！勝負の時間だよ、期待してるからね兄さん」

「やっぱり戻っていいか？俺・・・」

「・・・ミユキが頼りになるって言ってたじゃないか」

「そうだった、妹に頼られたらがんばるしかないよな！」

「・・・アタシも妹なんだけどな。」

20・異文化（前書き）

更新が滞り申し訳ございません。

現在風邪の為しばらくの間は更新が不規則になると思います。

文章も熱の為いつも以上に拙い物になっているかもしれませんが（後日修正いれるかもです）

ご迷惑をおかけします。

20・異文化

フィリスの街には城壁のようなものは存在せず、門はあるものの街道と街の境目を表す為だけにあり特に在中する兵なども居なかった。

街の周りには放牧された牛や羊が広大な牧草地で自由気ままに草を食^はんでいる、そして更にその外周には穀倉地帯が広がり有り余る程の豊富な食料を生産している。

農耕民族特有のゆったりとした気質の時間の中に最近、一滴^{つゆ一滴へ}の雫が落とされた。

とても小さく弱い存在であつたが、異文化から投げ込まれたそれは小さな小さな波紋を起こした。

本来であれば小さな波紋は他の波に飲み込まれ瞬く間に掻き消されてしまうが、その波紋は逆に他の波を飲み込み少しずつ大きくなり確実に広がっていきやがてその影響は街の外へと広がっていく・・・のだが、今はまだ全然自覚していない元凶は『ルビスの艶っぽい話に遭遇できるかもしれないあ、うひひ』と上機嫌で歩いていた。

「どうしたんですか、何か良い事でもあつたんですか？」

「ん？あのね、午後から孤児院に行くんだけどそこにどうやらルビスの気になる人が居るようなのですよ！

姉想いの妹としては是非ご協力をしなくてはと色々考えてる次第なのでございます」

「言葉尻にも色々含む所があからさまに感じ取れますし、そもそも表情にまともに協力しようという意志が見受けられませんが・・・」

「そんな、こんなに真剣に考えているのに！」

いかに相手の男性の弱みを握り効果的に突きルビス以外の選択肢を無くさせるかとか、いつそ速攻で既成事実を持ち込ませるかとか、2人でラブラブしてる所を観察して笑ってやろうとか色々考えてるのに！」

「まともな方法で協力してください。それに最後のは協力でもなんでもないですし……。」

そっとしておけばいいんですよ」

「ふうん、チャオは相手のことも知ってるんだね？」

ギクつとなったチャオをジーと見つめるとアワアワとしだす。根掘り葉掘り聞き出してやろうかとも思ったが、本人の居ないところでというのも気が引けるのでやめておく事にしておいた。

話題を変えて話し出すとホツと顔に出し、他愛も無い会話をするうちにさして時間もかからずチャオの家に辿り着いた。

「今お茶入れますからそこに座っててください」

ありがとうと言いながらもキョロキョロと辺りを見回す。今居るスペースは前回の店舗部分ではなく扉を挟んで奥になる居住スペースで、こちらの世界に来てから見てきた雰囲気とは違った様相を呈していた。

壁には金糸で縁取りされた朱色のタペストリーが掛けられ、チャオが身につけている掛け布と似た様な紋様が刺繍されている。テーブルも四角い形に四足が主流のこちらの世界には珍しく、円卓に一本足の物がちょこんと置かれている。

異世界においての更なる異国情緒にドキドキしていると、

「この家は女性のチャオがこの街に住み着くときに提供され代々住んでいる家で、街から離れるときに家具などを置いていく為チャオ族の物が多いんですよ」

私の様子から察したチャオからの説明に、なるほどと頷き部屋の中の気になったものの質問をすると

「ルビスが迎えに来るまでには時間はいっぱいありますから、まずはお食事でもいかがですか？」

「私は家で食べてきたのでいいです。
あ、そうだ！」

食事というキーワードで思い出し、手提げに入れてきた料理を取り出していく。

「約束してた薬草料理持ってきたよ、パンはこの前ルビスが持ってきて食べたんだよね？
だからパンもちよつとだけ手を加えて新しいの持ってきたよ」

これはクナンの葉（月桂樹）と塩とケヒトの実（胡椒）を挽いたもので味付けしたシチューで、こっちは林檎にバターと砂糖で味付けして焼いたものにルールン（シナモン）の粉で香り付けした物、パンには畑の近くになってた胡桃をいれてみたの、どんな薬草が入っているかをちゃんと説明しさあどうぞ食べてみてとズイツと差し出すと

「あゝ……先日のパンはとても美味しかったです。」

今はそんなにお腹は減っていないので、このパンだけいただきますね」

「チャオのために作ってきたの」

満面の笑みを浮かべ更にズズイッと差し出し無言で見つめると、あへびに睨まれたカエルってこんな感じかなあと脳裏を過ぎった。しばし無言で見つめあった後

「はい……ありがとうございます……」

と洪々スプーンを取りシチューを口に運ぶチャオを見やる。

そして部屋に私の勝ち誇る哄笑が高らかに響き渡るのだった。

20・異文化（後書き）

ミユキが段々黒い娘になっていく・・・。

21・波紋（前編）（前書き）

少し復調してきました、今年の風邪は中々にヤバイです・・・長引きます。

皆様、お体にお気をつけください。

まずお前が気をつけろよ！・・・ハイ、御尤もで御座います。

21・波紋（前編）

最初は気にもかけずに通り過ぎていたんです。

でも好奇心旺盛なうちの子が目敏く見つけて少し話しているうちに味見をすることになり、雰囲気は推されてついつい買ってしまっただけです。

買ってはみたもののパンを買うなんてと段々贅沢をしたんじゃないかと、無駄使いだと亭主にも怒られるかと不安にもなったのですが折角買った物を出さない訳にもいかず、お昼ご飯に帰ってきた亭主に料理と一緒に出してみました。最初はやはり不振がっていましたがいざ食べ始めてみると、いつもの料理にも良く合い会話も弾み楽しいひと時を過ごせ亭主も笑顔で仕事に戻っていききました。

そして子供の「また食べたい」の言葉に頷き、私は広場へと足を向けたのです。

騒ぐ子供について好奇心が刺激され何の気なしに覗き見ただけだったんだ。

ロープを目深に被った見るからに怪しげな商人が売っていたことに更に好奇心が刺激され、味見をどうぞと差し出された物を受け取りつつも聞こえた声が女のものに更に興味を引かれた。

渡されたパンを食べてみるとフワフワとした食感にいい香り、それにパン自体にも味が付いており女性が好きそうなとても美味しいものだった。

これなら最近疎遠になりつつある愛娘ともいい話題になるのではと買う意思を示すも、値段を聞いてみれば少し高めであり、買って買えなくは無いが少し渋って焦らしてやると焦れたらしい商人は渋々と値段を下げた、してやったりと思っていると他の奴等も便乗して買い始めた、ワシのお陰で安くなったんだぞ。

その後予想通り娘の反応は上々でまた買ってきてと強請^{ねだり}れたワシは意気揚々と広場へと足を向けたのだ。

俺は疲れていたんだと思う。

父は若い頃から無理をし仕事に励み一代で起業した人で、最近その無理がたたり体を壊し半分寝たきりになっていた。

元々が精力的に動き回る人だっただけに自分の体が思うように動かないことに戸惑い打ちひしがれていたし、そんな父を見て母も心を痛め同時にその介護にも追われ一気に老け込んだような気もする。父の仕事を手伝い働いてはいたがいきなり全てを引き継ぐことになり、仕事に追われ余裕の無かった俺は母の「最近おとうさんが食べ物が美味しくないって全然食べてくれないんだよ」という相談すら頭の片隅に追いやっていた。

そんな時、広場で変わったパンを見つけ母の言葉をふと思い出しコレでいいかと軽い気持ちで買って久しぶりに家に帰ると、痩せて小さくなった父と母に愕然とした。

俺からパンを受け取り嬉しそうに父の元へと行く母に後ろめたさを感じながら、「ああ、美味しいなあ、お前の買ってきてくれたパンは美味しいなあ」、「おとうさんが食べてくれたよ。あんたのお陰だよ、ありがとう、ありがとうね」との言葉に俺は心の底から謝罪した。すまない、すまない2人とも。忘れていたんだ軽い気持ちで買ってきたんだ、今度はちゃんと2人のことを思っ買ってこくるから、だから以前の力強く綺麗な2人に戻ってくれ。

だから俺は広場へと駆け出したんだ。

広場で売られてるパンを私は藁にもすがる思いで買ったんです。私の子供は生まれた時から病弱で、成長しても食が細く同い年の子と比べると痩せて小さい子でした。

何を食べさせても食が進むことはなく、この子の将来を考えると毎日が不安で一杯でした。

そんな時に私はこのパンを見つけ望みを託し家に帰り早速食卓に並べてみました。そつと子供の前に並べるとそのパンの形に驚きその柔らかさに驚き更にその優しい味に驚きながらペロリと自分の分を食べきったのです。

初めてちゃんとした量を食べきったことに感激しているとジッと私の分のパンを見つめているのに気がつき、これも食べる？と聞くとうんと嬉しそうに頷き更に食べ始めました。

生まれて初めての満腹感に幸せそうな笑顔を浮かべる我が子を見て私は決めました、どんなことをしてでもこの子が望む限りこの子にこのパンを与え続けようと。

決意を固め私はパンを買いに走りしました。

本人の知らないところで幾つかの物語が紡がれ、自身が起こした波紋がどんどん大きくなっていることに未だ気づかないミユキが今まさにチャオの家で高笑いをしている時、波紋は次の獲物に狙いを定め襲い掛からんとしていた。

長い列に並びながら彼はなぜ俺はこの列に並んでいるんだろうと、ふと思い返していた。

普段は彼は遠く離れたこの領地の首都ザッカスに住んでいる、その彼がなぜここフィリスに居るかと言うと彼の仕える主が王都に赴くことになり、その間に休暇をもらい馴染みにしている鍛冶屋に剣の手入れを頼みに訪れていたからだだった。そしてなぜ並んでいるかと言うと

「明日には仕上げてやる、朝一で取りに来い。

んで俺の店の隣に行列が出来てるから並んでみろ、面白いもんに出

会えるぜ」

とニヤニヤと笑いながら鍛冶屋の爺さんが言ってきたのだ。

ふゝと溜息をつきながら言われたからといって律儀に並ばなくても良かったんじゃないかと考えつつも、ノロノロと進む列の流れに合わせ足を進めていく。

少し前に若い男女の乗る馬車が現れ、男が馬車から馬を離し何処かへ連れて行き女が露店の準備を進めていった。テキパキとよく動く女で程なくして準備は済み

「ただいまよりパンの販売をいたしまゝす、列を乱さないようゆつくりと進んでください」

と良く通る声で販売開始を告げてきた。

列の目的がパンだと判ったが今度はなぜわざわざパンを買うのかと疑問が浮かんできて、思わず目の前に並ぶ男に声をかけていた

「皆はパンを買うために並んでいるのか？」

「なんだアンタ、何も知らずに並んでたのかい？ご苦勞なこったなあ」

「いや、知人に並んでみるとだけ言われてね」

「ふゝん、まあここまで並んだんだ騙されたと思ってあのパン買ってみな、正直驚くと思うぞ」

またもやニヤニヤとした顔を向けられ何やら謀はかりでも企まれている様なウンザリとした気分にもなったが、実際これだけの人々が並ぶのな

らそれだけの理由があるのだろう。

列が進み馬車が近づくと段々とパンの様子も見えてきた。

四角い箱のようなパンに大きめな丸いパン、小さなパンが2種類だろつか・・・どれも今までに見たことも無い形をしており、まだ少し距離もあるというのにここまでフワリといい香りが漂ってきていた。

21・波紋（前編）（後書き）

また前編とか・・・。

才チないしね・・・。

22・波紋（後編）

長い列を並びきりやつのことで先頭まで辿り着くと露天商の女は思ったよりも若い娘だった。

「いらっしやい、どのパンをご希望で？」

「ふむ、全てのパンを買えるだけ」

予備知識も無く並んだのでどのパンと聞かれても違いも判らず、好奇心に任せて言ってみると露天商の女はスツと目を細め

「・・・悪いけど四角いパン1個、丸いパン5個、バターロール10個、クロワッサン5個までしか1人に売れないんだ」

例え貴族様でもね、と小さく付け足される言葉に自身の言葉に貴族特有のものが含まれていたかと反省するも時既に遅く、手荒く袋を渡され後ろの人の邪魔になるからとさっさと列から外されてしまった。

折角だから領民の普段の様子を見ようと服装にも気を使ったのだが、少しの言葉尻を捕らえて嗅ぎ分けるとはどうやらあの娘、相当に貴族が嫌いだと見える・・・。

やれやれと、袋を抱えながら本来の目的地である隣の露店に入ると

「おう、来たか。」

どうやら本当に並んだようだな、どうだ面白いもんが買えただろう？

「面白くはあるがまだ食べてないんでね、このパンが形以外にどれほどの面白味があるかはまだ判ってなのさ」

「なんだまだ食べてねえのか、気が進めまねえなら俺が食ってやるぞ」

ホレホレと差し出される手を叩き落し

「帰りの馬車の中で食べるさ、それより剣はできてるんだろう？」

換わりに手をホレホレと差し出すと少し残念そうに剣を取り出してきた。

この爺さん上手くいけばパンが手に入るかもと目論んでいたらしい・・・。

「大分手荒く使ったようだな・・・何人斬った？」

爺さんの問いに薄く笑っただけで返しスラリと剣を抜きその状態を確かめる。

刃こぼれ一つ無く新品同様に仕上がっている事に満足するも、柄頭が変わっていることに気づき

「爺さん、ナゼ柄頭を変えた？」

「ふん！気づいたか、お前は剣に頼りすぎる。
だから竜から狼に変えたんだ、その意味を考えてみるがいい」

竜は孤高の生き物だ、その力は絶大で人の力など遠く及ばない。狼も大きいものは優に人の倍近くあるものも居る油断なら無い獣だ、しかしその本質は竜とは真逆に近く群れで行動し仲間意識のとても

強い獣として知られている。

もっと仲間に頼れと言うことが・・・剣より智を使えと言うことかもしれない。

剣を鞘に収めながら肝に銘じておくよと言うと、ふん、どうだかなと軽くあしらわれてしまった。早々人の本質は変わらないと判っているからだろう、それでも忠告をありがたく受け取っておく。

世話になったと店を後にし、待たせていた馬車に乗り込むと御者台に座る従者に用は済んだのでザッカスに戻ると告げ深く椅子に体を沈めた。

門を抜け街を出る頃になると馬車の揺れも落ち着きだし、馬車の中に控えていたメイドがお茶を進めてきたのでパンに合う紅茶を頼んだ。

一瞬紅茶に浸すか迷ったが力も要れず容易く千切り取れたパンに、そのまま口の中に放り込んだ。

サクサクと何層にも分かれているらしい食感に思わず目を見張っていると、香りに釣られたのかメイドがこちらをジッと見つめている、俺の視線にやっと気づいたのか慌てて視線を伏せる。

本来なら貴族の食事を見つめるなど許されることではないが、元々そんなことには気にしない俺は気にしないついでに手に持ったままの千切った半分のパンをポンッとメイドに放り投げた。

「ああああの？」

「食ってみろ」

「え！・・・ですが・・・」

「構わん、食え」

「は、はい・・・」

貴族の前で従者やメイドが食事をするなど有り得ない事だが半ば命令調に言った事にオドオドとしながらも口に運び一口食べると目を見開き、あつという間に全て食べきってしまった。

「どうだ？」

「た、大変美味しゅう御座いました」

どうやら女性の受けも良い様だと確認し、王都から帰ってくる我が主のご機嫌取りに使えそうだと思わずニヤリとすると、目の前のメイドがビクリと震え上がった。

そして、貴族という獲物を獲た波紋は街と言つ垣根を越え加速度的にそのスピードを速め一気に広がっていくのだった。

22・波紋（後編）（後書き）

御貴族様が絡んできました。
ルビスが全開不機嫌です。

本来字数的には前後編に分ける必要はないのですが・・・。
むしろこれ2つで1話くらいで丁度いいくらいなんですが・・・。

あまり長いと読むのに疲れてしまいかと思ひまして・・・。
短くても頻繁に更新か、長い文章で間隔あけての更新か。
どちらがいいのか迷うところですね。

23・権力者（前書き）

以前スパイスの名称を2種類明記してましたが混乱の元と判断したため

この話より統合させていただきました。

23・権力者

大通りから少し奥まった場所にあるチャオの家はとても静かで、普段は1人で薬草の調合や注文を受けた軟膏を作ったりして時間を過ごしている。

ミユキが持参した薬草料理も綺麗にチャオのお腹に収まり、新しく淹れなおしたお茶を啜りながら2人して縁側おばあちゃんモードでまったりと寛いでいる。

「いやあ、味も素晴らしいですが薬草の効能を消す事無く、しかも薬草の独特の風味さえも利用して料理に仕立てるとは………御見それいたしました」

「ん〜、どちらかと言うと薬草の風味を使いたかった部分が多くて、効能とかはよく分かって使ってるわけじゃないんだけどね」

「以前からシナモンの香りは薬以外で使えないかとは思っていたのですが、このバターですか？これとの相性は素晴らしいですね、シナモンの独特の癖のある味とよく合っています」

「でしょう！バターも牛乳の成分を凝固させて作ってる物だから栄養価も高いし、色々な料理に応用が効くから大活躍してるよ」

など取り留めの無い会話をして時間を過ごしていると、表の店舗部分の扉をコンコンとノックする音が微かに聞こえてきた。

お客さんかもしれないので見てきますねと席を立つチャオを見送り、お茶を啜りふへ〜とだらけていると

「ミユキさんミユキさん！早くきてください」

「ど、どうしたの？」

慌てた様子のチャオに呼ばれ急いで店舗部分に顔を出すと、そこには大きな樽のような物を「よっこらしよ！」と床に置くセリオスが居た。

「ななななにこれ、どうしたの？」

「どうしたのって、ミユキが注文した物だろう
魚屋に行ったらこれで間違いないって渡されたぞ？」

「これが？」

セリオスに違うのか？と聞かれ慌てて樽に近づき中身を確認すると、なるほど・・・確かに注文した昆布だった。

ただしデカイ、デカ過ぎる！

私がスッポリと入れそうな樽にグルグルと巻かれた昆布がズドンと1本刺さっている。昆布の幅約1.5メートル長さは巻かれているのでよく分からないがそれでも数メートルはあるだろう、緑を帯びた綺麗な黒光りする昆布が一輪挿しよろしく樽に刺さって屹立する光景はなんとも感慨深く、まさか昆布の雄姿を見て「ああここはやつぱり異世界なのね」と改めて認識するとは思いもしなかった。

「うん・・・これで間違いないよ、ありがとうおにいちちゃん」

「そ、そうか？ならいいんだが・・・」

微妙な空気を孕みつつも、要は乾燥させてダシさえ取れば大きな関係ないよねうんうんと1人納得していると、黙って様子を見守っていたチャオが恐る恐るといった様子で

「あの・・・ミユキさん、つかぬ事をお聞きしますがコレは何に使われるんですか？」

「ん？料理だよ。」

強いて言うなら昆布料理かなあ」

「ああああああ、やつぱりいいいい・・・」

「ちょ、待て待てミユキ！お前コレを俺達に食わせる気か？！」

「別にコレを直接使う訳じゃないんだけどね、醤油があればダシ取った後の昆布も佃煮にできるんだけどココには無いしなあ・・・ああ！しかも醤油がないと昆布ダシとっても活用の仕方がわからない！」

今頃気づいたーどうしょー！と頭を抱えて悩みだしたミユキを他所に、コレを食わされるのか・・・と頂垂れる2人が居た。今回は肩を叩いてくれる人は居なかったんだけどね。

その後、ブツブツと1人考えに耽り出したミユキの横で特に接点も無い2人が気まずげにズズズとお茶を飲んで時間を潰していると、バターンと勢いよく扉が開かれる音と共にズカズカズカと店内を乱

暴に歩いてくる足音が響き渡った。

程なくして皆が居る住居スペースの扉が開かれると見るからに不機嫌そうなルビスが入ってきて空いていた椅子にドツカリと座り込んだ。

「どうしましたルビスさん、なにかありましたか？」

「どうしたもこうしたもあるかい、何だって今日に限って貴族なんかがこの街をうろついてるんだい！」

「貴族がいたんですか？珍しいですねえ」

「ハッ！あんな奴等居なくて結構。いちいち鼻につく態度取りやがつて目障りでしょうがないね」

「お前の貴族嫌いも筋金入りだなあ……」

「……貴族って何？」

「……はい？」

先ほどから話題に出てくる貴族という言葉に私が疑問を口にする、3人が揃ってポカンと口を開いた。

もちろん貴族という存在は私も知っている、特権階級者であり権力者であり世襲制により代々その権力を維持し続ける者達である。

知っていてあえて聞いたのは私の知る「貴族」とこの世界に現在実在する「貴族」との差異を知る為だ。

どうしても私が思う貴族には中世に実在していたあちらの世界の貴族の独裁的で贅沢主義者のイメージが強く、こちらの貴族に対する公平な初期イメージが偏りかねないので知らない振りをして説明し

てもらおうと聞いてみたのだ。

「貴族を知らないんですか？ ミユキさん」

「うん、私の居たところには貴族って居なかったから」

「良い所だねえ・・・一度行ってみたいもんだよ」

「貴族が街に来ているそうですし、少しは知っておいたほうが良いかもしれませんね」

こちらの貴族も世襲制の権力者というのは変わりなく、「公爵」「侯爵」「伯爵」「子爵」「男爵」の各順位がありその下位に一代限りの準貴族として「騎士」の位があるらしい。

貴族の男子も騎士になるが爵位騎士として別格に扱われ、平民兵が功績を挙げて騎士に取り立てられても明確に別けられているが下位の貴族相手なら対等な振る舞いもできる。

そして少なくともこの国の貴族は、無理な重税を取り立てたり国庫を私物化して贅沢三昧をしたりはしてないらしい。

しかし政治に関しては隣国は軍事的にも領土的にもこの大陸最大で、この国は肥沃な大地と有り余る食料と資源で本来なら侵略対象筆頭候補なのだが、国境にあたる巨大山脈で完全に分断されており近くて一番遠い国と揶揄されるほどで貴族達は安心して腑抜けきっているということだ。

「この街を治めるのは伯爵の爵位を持つレバント・フォン・ブルガリー・テ伯になります」

「ということはフィーリスの街はブルガリー・テ領にあるってこと？」

「ええ、その通りです。」

レバント伯はとても思慮深く優しい方ですよ」

「チャオは会った事あるんだね」

チャオですから、と笑顔で返された。なるほど流石は国境無き医師団部族、領主様にも簡単にお目通り叶っちゃうわけか。

「ああああ！もう貴族のことはいいよ、ミユキも大体は分かっただろ」

「そうだね、じゃあ時間も勿体無いしサクッと孤児院に行こうか
ルビスも早く行きたそうだし？」

「うつ・・・」

「なんだお前、そんなに孤児院に行きたかったのか？
ちよつと前まではマイセルが居るからって うぐあ！」

寝ていたため馬車の会話の流れを知らないセリオスが、口を滑らし相手の名前らしきものを吐露すると同時にルビスのボディーブローが深々と突き刺さり悶絶するセリオスに

「ななななに言ってるんだ兄さん！マイセルと顔を合わせるのが恥ずかしいから行きたく無いだなんてあるわけ無いじゃないか！」

真っ赤になって否定するルビスの肩を、生暖かい笑顔の私とチャオでポンポンと叩く。

可愛すぎるよルビスちゃん

24・交渉（前編）

フィリスの街は少し歪な形をしていた。

噴水のある広場を中央にして街全体を見ると南側より北側の方が広く、東側よりも西側に大きく迫り出すように広がっている。

最初はほぼ円形に近い街の外観だったが、この地方には丘が多く緩やかな傾斜が掛かっておりより平らな方へと家を建てていった結果、木々が枝葉を伸ばすように無秩序に発展していった。

質素な生活を望むチャオの家は古くから代々使われて旧市街地に属する発展の少なかった南側に建っており、孤児院も万年財政難から移転はおろか改修すらおざなりに同じく旧市街地の東側にポツンと建っていた。

約束通り馬車の荷台に隠れながら移動する間、隙間から外を観察していると家々の外観は段々と古めかしくなっていき石畳から伝わる振動も大きくなっていった。

チャオの住む南側は旧市街とは呼ばれるもののちゃんと改修工事などが施されているらしく作りは古いが綺麗な印象を受ける、しかし同じ旧市街でも東側に来ると明らかに寂れた印象が拭えなくなっていく。

「ミユキ、孤児院が見えてきたぞ」

兄セリオスの言葉に御者台の方へ移動し2人の間から顔を出して正面を見ると

「うゝわぁ……………」

「ははは…………大分古い建物だし記憶に有る限り改修工事もしてた

ことないし、初めて見るとちょっと引くかもなあ」

段々と近づいてくる建物はお世辞にも綺麗とは言い難かった。

敷地をグルリと囲む塀には所々に大きな穴が開いており防犯の役目は全く見込めなかったし、建物の外壁にも遠目から見てもわかるヒビが所々に走り、蔓系の植物が我が物顔でその上を這い回っていた。もしこの建物が日本の住宅街にあったなら・・・間違いなくお化け屋敷として近所の子供達の噂になっていたに違いない。

長年の風雨に晒されてすっかり寂びれ切った建物は、しかしそれでも今も多くの子供たちを守っているのだろう、近づいていくと子供達の騒ぐ声が段々と聞こえてきた。

楽しそうに騒ぐ子供達の声に寂れてはいても此処は彼等にとって優しい場所なのだろうとホッと胸を撫で下ろし、ならばなお更この計画に加担してもらおうではないかと決意を新たにしている

「ここ数年来てなかったけど相変わらずきつたねえ建物だなあ」

「おにいちゃんはココに来たことあるの？」

「ああ、まだじいさんが生きてた頃はかあさんに付いてきて街に遊びに来ててな、孤児院の奴等とも何回も喧嘩したりしてな、でもそのうち仲良くなつてなあ」

「へえ、そうだったんだあ」

「院長が体を壊してからはココから独立していった数人が戻ってきて代わりに子供達の世話をしててな、その中の1人がマイセルって言って俺達の幼馴染って間柄なんだ」

勝手知つたる様子で建物に入っていく2人に付いて頭を抑えながらミユキも着いていくと奥からパタパタと足音をさせて1人の女性が走ってきた。

「ルビス、それにセリオスさんまで。
今日はどうしたんですか？」

「こんにちはルイ、今日はちょっと院長先生に用が合つてね」

そうですか、と言いつつチラツと私のほうを見る女性に、妹のミユキだよとルビスに紹介され互いに自己紹介をした後、ルイというその女性に促され院長室へと案内されて行った。

院長室の扉をルイがノックするとすぐにどうぞと声が聞こえ、室内に入ると1人の老人が揺り椅子に腰掛けこちらを見つめていた。白いものが多くなつてきている髪を後ろに流し穏やかな目をこちらに向けて微笑む顔は、どこことなく「彼」を思い起こさせた。

「院長先生、ご無沙汰してます」

「おお、セリオス君か立派になつたね、ルビスさんもよく来てくれたね。」

「・・・そちらの方は、はじめてかな？」

「はい、はじめましてフィールランド家の末子でミユキと言います。一身上の都合によりあまり人に顔をお見せすることが出来ず、このような無礼な服装のままご挨拶をすることをお許しく下さい。本日は院長先生にお願いがあつて伺わさせていただきました」

「うん、礼儀正しい子だね。」

フィールランド家の方々には以前からお世話になっています、私達
でできることならお手伝いさせていただきますよ」

ロープで顔を隠したままなのを承諾されホッと胸を撫で下ろすも、
ここからが勝負所だと密かに気合を入れなおす。

「まず最初にコレをご覧ください」

そう前置きしてテーブルの上に持ってきたパンを並べていく

24・交渉（前編）（後書き）

はい、また前編とか言っちゃってます。

続けて後編を書いてますが・・・。
時間かかってしまったらすいません。

25・交渉（後編）（前書き）

やっとストーリーが進展しそうです。

亀の速度で進んでおります、気長に見守っていただけるとありがたいです。

25・交渉（後編）

院長室のテーブルの上に持ってきた布を敷きそこにパンを並べていく。

最初に作った丸いパン、バターロールとクロワッサン、そして偶然手に入れた型で作った四角い食パン。

全てを並べ終え院長の顔を覗き込むと、驚きに目を見張っているのを確認しつつ

「これらのパンのことをご存知ですか？」

「実際に見たのは初めてですが、最近変わったパンが流行っているというのは聞いた事があります。

なんでも大層美味しいそうですね」

「ありがとうございます、実はこのパンは私が考案したものです。そして今現在は家族の協力の下にフィールランド家で作って販売しています」

その説明にこれを貴方がと呟いた後、パンと私を交互に見つめている。

「大変失礼な事をお聞きますが、この孤児院の経営は苦しい状態なのではないでしょうか？

見たところ建物の状態も良くありませんし、子供達の栄養状態も万全とは思えません」

「ちょっと！ミユキ」

ルビスとセリオスが慌てて嗜める^{たしな}が私はジツと院長先生を見つめ続けた、院長先生も目を細め私を見つめ返すがふうつと深い溜息をつく

「仰るとおりこの孤児院は財政難に瀕しています」

「院長先生！そんなことを良く知りもしない人に仰るなど……」

ルイが慌てて嗜めるがスツと手をかざし隠してもしようがないことですしと、それに貧しい事は恥ずべきことではありませんよと優しい笑顔で諭すとハイと返事をしもと居た場所に下がっていった。そして私に向き直ると真剣な表情になり

「そんな事をお聞きになってどうするのでしょうか？」

まさかそのパンを今後私達にお恵み下さる……とても仰るのでしょうか？」

その言葉尻に含まれる微かな怒りに私の背中にツツつと冷や汗が流れる。

孤児院の経営難を指摘されたことに怒りを覚えているのではないだろう。きっと彼の怒りは私の言葉を子供達への蔑みと哀れみと取ったのだろう。

ここからが正念場だ……以前のような判断ミスは許されない。

「いいえ、私は貴方達へパンを提供しにきたものではありません、最初に言った事です。私は貴方達に助力をお願いしに来たのです」

「助力……と言いますと？」

その言葉に私は今までのことを掻い摘んで説明しだした。

この酵母パンを作り出し有頂天になった私は生産体制も整わないまま売りに出し、そして予想より遥かに早くパンに人気が出てその混乱を収めるために販売体制の期日を明言してしまったこと、フィールランド家だけではとても追いつかずこのままでは希望者にパンが行き渡らないこと

「元々この施設の人たちにパンの技術を伝えて生産を任せるつもりで試験的に販売して採算が得られるかを検証するだけのつもりだったのですが、私の判断ミスにより院長先生の承諾を得る前にこちらに頼らざる負えない状況になってしまいました。お願いします、パンの生産を手伝っていただけないでしょうか」

そこまで説明し深々と頭を下げお願いすると

「ちょっと待ってください、私達にこのパンの製法を伝えるというのはですか？」

「はい、もちろんそれによって得られる収入は全てこの施設の運営費に充ててくださって結構ですし、今後施設から巣立っていく子供たちで希望する人は個人でパンの販売をすることも構いません」

私の説明に院長先生だけでなく後ろのルイもポカンと口を開けている。

その後パンの販売で得られる収入の説明をするとその利益率の高さに驚かれ、逆に不審がられてしまった。

「大変興味深いお話ですが・・・お話を聞く限りあまりにも貴方に利益が無さ過ぎる。

私達がそのパンを作りその利益を全て頂けるといふならば、逆に貴方方のパンは今のようには売れなくなります、どう考えてもこの話

は貴方にとって不利益としか思えない」

「元々パンで利益を得ようとは思っていませんでした、ただ私が食べたかったから……家族に食べて貰いたかったから作っただけです。」

ですが、作ってみてこのパンはこの施設にとって有益なのではない至り試験的に販売しただけなので最初から計画的には何ら私に不利益は生じません」

「そこです。なぜそこでこの孤児院の存在が貴方の中で生じたのですか？

貴方にとってこの孤児院の運営に関わる必要はなかったはずですよ」

蔑みや哀れみの感情を無くしては……と目で訴えられ、私は最後のカードを切ることにした。

スツとローブに手を掛けパサリとそのフードを下ろし隠していた顔と髪を曝け出した。

「ミユキ！」

「いいの、ごめんね。でも必要なことだから」

見たことも無い白い肌、黒い髪、その異様とも取れる外見に家族以外の息を呑む雰囲気を感じ取れるが、それら一切を無視し

「ご覧になっていただければ判るとおり、私は家族と血が繋がっておりません。もう2ヶ月近くになるのかなあ、私はルビスにこの街の広場で拾われました。」

もしあの時ルビスに拾われて優しく家族に迎え入れられなかったら、

私はこの施設に来ていたかもしれません。

いいえ、この外見ですからもしかしたら此処まですら辿り着けなかったかもしれませんね」

そこまで話し下ろしていたフードを被りなおす。

「ですから私にとってもこの施設は無視できない存在なんです」

長い沈黙の後、そうですかと呟き

「辛い事を話させてしまいましたね……申し訳ありませんでした」

「いいえ、今は幸せですし血の繋がりを気にする暇もないほど充実してますから」

そうですか、と先ほどとは違い笑顔で納得しわかりました、お手伝いいたしましょうと承諾が得られルビスとやったあ！とはしゃいでいると、ふと思い当たることが浮かび

「院長先生、先ほど私には利益が無いと仰いましたがちゃんと利益はありますよ」

「ほう、どんな利益ですか？」

「パンがみんなに行き渡るようになれば私は街の皆とおかあさんに怒られなくて済みます！」

ニツコリと笑う私になるほど、それは確かに利益ですなと院長先生にも笑顔があふれた。

25・交渉（後編）（後書き）

お気に入りか30件超えちゃってます。

恐悦至極で内心ドキドキしちゃってます。

少なくとも30人の方々が読んでいていると言っ事ですよね。
ありがとうございます、がんばります。

26・試食（前書き）

1週間ほど更新できません。

詳しくは活動報告にて。

26・試食

ギシギシと軋ませながら孤児院の廊下を歩いていく。

板張りで作られた廊下は所々に板で補強がしてあり意識して歩かないと容易く躓つまずいてしまいそうで、それでなくても軋む音に踏み抜いてしまわないかと歩くだけでドキドキしてしまう。

老朽化が激しいとはいえそれなりの人数を収容できる施設なだけあり、相部屋とはいえかなりの部屋数も確保されて窓も大きく全体的に明るいイメージが抱かれる。

院長室での交渉の後、今後の説明のためにルイさんに皆に集まってもらうようにお願いし軽く打ち合わせてから、そろそろ集まったでしようと移動を開始していた。

コツンコツンと杖を突きながら歩く院長先生に

「今更ですが、碌な準備期間も無しに巻き込むような感じで協力させてしまつてすいません・・・」

「はっはっは、先程までの強気な態度が微塵もありませんなあ。どうやら其方そちらが貴方の本当の姿のようですな」

シユンと小さくなつて謝る私を笑い飛ばし多少意地悪気に笑つて見下ろす院長先生に

「だつてちよつと強引な感じで強気で押さないとこんな小娘が持つてくる話に説得力なんて出ないと思つて・・・」

「ふむ・・・確かに最初は子供の力ワイイお願い事くらいにか思つても見ませんでしたね。」

それがいきなり孤児院の経営状況を問いただしてきたり、窮状を打破する解決策を提示してきたり……。

途中から豪胆な商人と交渉をしている気分にならなっていましたよ」

すみません……と更にシユンと小さくなるとガシツと後ろから頭を掴まれ、ヒイツと悲鳴を上げると

「ホントにねえ……変なところで突拍子も無い行動取ってくれちゃうから見てるコツチは毎回ヒヤヒヤさせられちゃうよ」

「ただただってルビス今回ののは特に危険があつたわけじゃイデデ、それにちゃんと上手くいったんだしいイテテ、うわゝゝんごめんなさいいいいいいいたああー！！！」

ギリギリギリギリギリ、ペシペシペシペシとやり合つてる2人を見て呆気に取り残れている院長先生の肩をニコニコとしたセリオスがポンツと叩き

「まあ、いつもの事ですから気にせず行きましょう」

「はぁ……そうですか」

と促して歩いていった。

目的の部屋に着くとザワザワと騒がしくかなりの人数がいることが窺えたが、院長先生が室内に入るとピタリと喧騒が止み静かになっ

た。しかし続けて入ってきた私達の存在に気づくとまた少しザワザワとした空気が持ち上がってきていた。部屋の中には30人以上の人間がおり、大半が幼い子供だったがそれでもかなり手狭な感じになっていた。

「皆、作業の手を止めて集まってもらってすまなかったね、これから今後のこの施設にとって大事な話があるから少しの間静かに話を聞いておくれ」

「今後のことって、もしかしてここを閉鎖するとかって話しじゃないですよー！」

子供達の世話をしている大人たちの1人だろう、施設が資金的に苦しい状態を知ってるが故につい口から出てしまったその言葉にザワザワと不安が広がりついにはその空気を敏感に察した幼い数人の子供が泣き出してしまった。

「落ち着きなさい、ここを閉鎖しない為にその打開策を今から話すと言っているのです。」

皆、落ち着いて静かにしなさい」

院長の説明に打開策があるのかと大人たちは平静を取り戻し静かになるが1度泣き出した子供達は中々泣き止まず、ルイ達数人の大人たちがあやしているのを見て

「ねえ、ルビスはあっちの子達にパンを持って行ってあげて、私はこっちの子達に持っていくから」

そう言っただけを持って歩き出した私の後ろで、意図を察したルビスがわかったと動き出す気配を感じながら泣いている子供の前にし

やがみこむ

「ねえ、このパン見てごらん柔らかくってフワフワしてるんだよ」

グズっていた子とその周囲の小さい子達にも、柔らかいからそつと持つてねと小さなバターロールを渡していくと変わったパンに興味をそそられ鼻をすすりながらも泣き止んだ。

「小さくて可愛いパンでしょ？それにいい匂いもするしとっても美味しいんだよ」

「いいにおい……」

「おいしそう」

「いいよ食べて」

「いいの？」

うんつと笑顔で頷くと小さな口でパクリと噛み付き食べ始めた。

「おいしい！」

「あま〜い」

もつと食べたい？と聞くと全員が頷くのを確認し、じゃあ作り方を教えるから皆で沢山作っていっぱい食べちゃおうね、そして街の人たちにも食べてもらおうと手を挙げると子供たちも「おう〜！」と元気良く両手を挙げて応えてくれた。

餌付け成功。

26・試食（後書き）

ご迷惑をおかけします。

27 不安にさせた罰だよ・・・。(前書き)

急遽帰宅できたのがんばって文章に起こしてみました。
2話で1つのような話なので2話連続投稿です。

27・不安にさせた罰だよ・・・

「えゝ皆様はじめまして、こんにちは」

コホンと咳払いをしてから少し照れた様子ながらもミユキが話し始めると、多少ざわついてはいるが皆ミユキに注目して話に聞き入っている。

その様子を見ながらこの短時間の間によくまあこれだけ皆の気を引いたもんだと、半ば呆れるような感心するような心境で少し離れた横からその動向を見守っていた。

実際ミユキに促され子供達にパンを配ったルビスだったが、渡した途端に泣き止みミユキの作り方を教えるから自分達で沢山作っていい食べちゃおうと言う呼びかけに、ルビスの周りの子供たちも目をキラキラとさせながら好奇心旺盛にウズウズとしている様に、改めてミユキの人の関心を引く力ともいうべき能力に目を見張っていた。

もちろん子供達の興味を引いた大元はパンだが、それをそのまま自身の計画に移行させて引き付けられるか、と問われれば・・・

まあ、アタシには無理だろうね。

しかもそれらの行動にはミユキの特異ともいうべき外見を一切利用してはいないのだ。

院長先生との交渉にはその姿を晒してはいたが、それはフィールランド家との血の繋がりが無いことを明かす為であり自身の外見の特徴を利用する為では無かった。

ミユキはどこまで自分の事を理解しているのだろう……。

絹のように滑らかな白い肌、夜空を切り取ったかのような瞳と髪に宿る星々の輝き、庇護欲を呼び起こすような華奢な容姿、しかし瞳に宿る光は優しくも強い力を感じさせる。

今まで会ってきた貴族達の傲慢で威圧的な雰囲気とは違う、しかしそれよりも遥かに強い力で人々の目を引きつけそしてミユキを見た者は例外なくその姿に魅入ってしまうだろう。

その証拠に既に院長先生とルイの目にはミユキに対するある種、崇拜のような特別なものが宿ってさえいる。

まあ、当の本人はそんな事には気づいておらず自分の事も珍しい外見だから面倒にならないように隠しておこう程度にしか考えてないんだろう……。そういう子だよ、とクツクと思わず1人笑いが込み上げてくるが、ふとこの子はこれから何処へ向かって行くんだろう、何処へ行くこうというんだろう、そしてその先にはアタシは、アタシ達家族は……。

ポンつと肩を叩かれハツと意識を戻すと困ったように笑う兄が居て

「なんて顔してんだよ、だいじょうぶか？」

「え……。あ、ああ、何でもないさ、ちょっと考え事してただけだよ」

「そうか？」

まあ、なんだな……。だいじょうぶさミユキは何処へも行かないさ」

思いもしない兄の言葉に思わず、えっと聞き返すが当の兄は眩しそ

うに目を細めてミユキを見ながら

「ミユキは誰よりも家族を想ってる子だ。

そりゃあ俺達はまだ家族として過ごした時間は短いけれど、それでも想いあつてると断言できる絆があると俺は信じてる。

だからこの先もしあの子が俺達の元を離れることがあつたとしても、きつとあの子は帰ってくる」

だからミユキの前ではそんな顔はするなよ、と優しく頭をクシヤクシヤと撫でられた。

そんな顔をしていたのかと思わず頬に手をあて赤くなった顔を隠しながらも、ミユキの事に兄も同じような不安を抱いていたのかと思いに至り、それでもアタシを気遣ってくれる優しさに照れ

「な、何言ってるんだい、兄さんなんかよりアタシの方がよっぽどミユキと分かり合ってるんだ」

と思わず兄の背中をバシツと叩いてしまうと不意をつかれたようでゲホゲホと咽^{むせ}る兄に、小さくアリガトと言うとちらりとコツチを見た兄にニヤリとされ肩をポンポンと叩かれた。

なんか負けた感じがする、と眉根を寄せていると

「えゝでは大まかな説明も済んだところでえ、これからの皆さんにやっていただく作業分担について話したいと思いまゝす」

とミユキのご機嫌そつな声が聞こえてきた。

取り合えずミユキが戻ってきたらアイアンクローの刑は確定。

八つ当たりだけど、なんか文句ある？

27・不安にさせた罰だよ・・・。(後書き)

短いすね・・・。

28・命名

元々ここは子供達の教室に使われている部屋らしく、小さいテーブルのような教卓がありそこから皆を見渡すと自分に突き刺さる沢山の視線に思わずウツと後ずさりそうになる。

目の前には子供用の小さい机と椅子に座る幼い子が興味深げにこちらを見つめる姿があり、その愛らしい姿に若干緊張を緩めつつもその隙間を埋めるように居並ぶ大人達と大きくなってきた子供達の視線に、コホンと咳払いしつつ

「えー皆様はじめまして、こんにちは。

私はフィールランド家の末子でミユキと申します、今回は院長先生からの依頼で当家が開発しましたパンの説明にまいりました」

此処へ来る前の事前の打ち合わせで今回の計画は私が提案したのではなく、あくまで院長先生が孤児院の窮状を打破するべく親しい間柄のフィールランド家に相談した結果もたらされたことである、ということにしてある。

だってやっぱりこんな小娘が提案してきたことだと知れば不安にもなるだろうし、また1から皆に説明して説得するのは流石に骨が折れるしその過程でまた私の外見を晒すことにも成りかねないので、私から提案し院長先生に承諾してもらったのだ。

貴方の功績を私が全て奪ってしまうような結果になってしまいますが・・・と院長先生は恐縮していたが、私としては元々功績とも思っていないしこれ以上目立つ結果になるのは色々と遠慮願いたい立場でもあるので、どうぞどうぞと院長先生に功績という名の面倒事を押し付けてしまった。

これでこの世界では珍しい私の姿を見せる必要もなくなりホッと一息付けたのだ、だってこの先パン作りの教習の為に何度かは此処を訪れる必要があるしその度に珍獣を見るような目で見られるのも中々面倒なものがある、よかったよかったきつとルビス達もホッとして私を見つめていることだろう。

「えゝでは大まかな説明も済んだところでえ、これからの皆さんにやっていただく作業分担について話したいと思いまゝす」

特に問題も無く順調に進む事に緊張もほぐれ、多少言葉も明るくなってしまう。

ああ、見て見て此処にきてやっ問題も無くスムーズに進展してるよ、きつとこれが済めばルビスとセリオスに頭をナデナデしてもらえることだろうと、チラリと2人の方を見やるとニツコリと笑顔を返されウヘへと顔がほころぶ。

「パンの作業分担を大きく別けますと、『酵母担当』『生地作成、焼成担当』『販売、経理担当』の3つに別けられます。

『生地作成、焼成担当』以後は『作成班』と呼びますが文字通り実際にパンを作る人たちになります。

この作業は大変力の要る作業になりますので男性の方が大部分を占めますが、後々繊細な作業も生じますので何人かは女性の方も参加していただきます。

次に『販売、経理担当』の方達にはパンの販売とその売り上げの管理、そして毎日のパンの作製数の決定をしていただきます。

最初は広場での販売になりますが、追々店舗を構える可能性もありますし今のうちからしっかりとした経営管理の体制を構築しておいた方が後の混乱を防ぐ為にもいいと思います。そして今は作れば売れる状態にあります。人々にパンが行き渡った後はしっかりと計画的に生産数を割り出し、古くなって売れなくなるパンを出さない

必要がありますのでやはり今のうちから記録を付けていく必要があります」

とそこまで話すと皆ポカンとした顔をしている、難しかった・・・かな。

「最後に『酵母担当』ですが、これはこのパンの機密にもなる部分でありとても重要な仕事になりますので・・・」

そこまで話して教卓から離れ目の前の小さな子達の目線に合わせてしゃがみこみ

「だから君達に酵母がちゃんと成長してるか見守ってもらいたいんだけど、いいかな？」

と聞くと自分達は蚊帳の外と思っていたのかキョトンとしていたが、ちゃんと自分達にも『やるべき事』が割り振られていると理解したのか

「うん、やる」

「あたしもやるー」

「ちゃんとみるー」

と目をキラキラさせて答えてくれたので、そっかじゃあ任せちゃうねと言つと

「ちょ、ちょっと待ってください。子供達にそんな重要な仕事を任せるなんて、その酵母という物にもしなにかあつたらどうなるんで

すか！？」

それまで院長先生の横で静かに聞いていたルイが慌てて言ったので

「酵母になにかあったら？」

そうですねえ……パンが作れなくなるかなあ」

と顎に指を当て何気なく答えると、途端に大人達に動揺の波が起こりそんな重要な仕事を子供には任せられない反対だと騒ぎ出したので

「何も全てを子供達に任せるわけではないですよ、日中の間だけ遊びの合間に温度計を見てもらって基準値以外になっていたら大人に知らせてもらうだけですよ」

との私の言葉にも、いいやダメだ大人が全てやるべきだと数人が言い始めた。

なんだよお、そもそもこの計画自体この小娘が立てたやつじゃなかあと思いつつもそれは内緒だしなあとウンザリしながら、次期サントクロース候補としてはやっぱり子供達にも活躍してもらいたいしな……と考えているとあることに閃き思わずほくそ笑みながら

「残念ながら酵母の管理には子供達の協力が必要不可欠なんです」

「な、なぜですか？」

とルイが不安げに聞いてくるので私は神妙な顔つきになり

「実は酵母というのは精霊の1種で、普段は眠っている状態なのですが発酵という技術でその眠りを解き精霊酵母の力を強くしてパン

を作るときに力を貸してもらっているのです、そしてその眠りを解く時に酵母の近くに子供達の気配があると酵母達はそれに安心して安定して目覚めてくれるのです」

精霊という言葉に大人達はざわめき子供達はおおくと目をキラキラさせた。

その後それならしうがないと大人達も納得し無事子供達の活躍の場は用意できた、そして私の行動によって今後このパンは精霊のパンと呼ばれるようになってしまふのだがそれはもうちょっと後の御話し。

まあ今日はこれくらいにしといてやるかと、後日作製班の数人にフイルランド家に来てもらいパン作りの実習をすることを決めルンルンとスキップをしてルビス達の元へ戻っていくと、ニッコリと笑顔で迎えられアハハと上機嫌で抱きつこうとするとガッシと顔を掴まれ……………

「うっぎゃ—————!!」

と私の悲鳴が部屋に木霊した。

なんで……………?

28・命名（後書き）

ミユキの咄嗟の行動でパンが命名されてしまいました。

29・トラウマ

本日は抜けるような快晴也。

孤児院での交渉と説明を終えて意気揚々と家に帰り、セリスに問題も無く無事パンの生産に目処が立ちましたと報告し頭をナデナデされニヤケそうな顔を押し殺し、実はルビスに八つ当たりクローをされて頭が痛いとの報告もし

「アンタはなにやってんだい!!」

「ぎええー!」

とセリスによる制裁クローをルビスにお見舞いしニヤリとした翌日。

家の裏手の広めのスペース、井戸と水桶や洗濯干し場、近くの山から取って来た木々を割って薪にしたりにも使っている場所にトルビス作の昆布干し用の柵が太陽に向かって斜めに立てかけられている。本場では砂利を敷き詰めた上に長いまま干すのだが今回は適度な大きさに切ってから天日干しにしている。本当はあの超巨大昆布のまま干せれば圧巻の光景だったのだが洒落にならないので諦めました。

うんしょ、うんしょと柵に昆布を並べていると後ろからトルビスに呼ばれ

「何?おとうさん」

「……コレ、ホントーに食べるのか?」

「今回はコレ自体は食べないよ、干した後に煮てダシをとるんだよ」
ダシ？と聞き返されスープみたいなもんだよと説明すると遠い目で
昆布を眺めながら

「なあミユキ、何事にも挑戦してみるのは良い事だとは思う。だが
なコレは流石に挑戦するまでもなく結果が見えているんじゃないの
か？」

コレ？と昆布を指差すと、うんソレと頷かれ

「真っ黒い草だぞ？そんな物から取った煮汁なんか真っ黒で使い物
になんかならないだろう。」

悪い事は言わん今からでも遅くないぞ止めとけ、な？」

あゝまたか・・・と半ば諦めたような呆れたような顔でトルビス
を眺める。

実はパンやシチュー、アップルパイの他にも幾つか此方には無い物
を作り出していた。バターもそうだがその他にもマヨネーズとケチ
ヤップそしてワインを利用してワインビネガー、大豆を蒸して藁に
詰めた納豆・・・は納豆菌が違ったのかちよつとモザイクなしに
は見れないモノに仕上がったので闇に葬ったが料理の基本になる調
味料系を自作してきていた。

そしてそれらを順次食卓に並べてみているのだが、そこで私はある
ことに気がついていたので。

初めて食卓に並んだ料理はトルビスは絶対に一番最初には手をつけ
ない！である。

普段は男らしく家族からの信頼も厚く何かあったときの最終的な決

定を持っているトルビスであるが、なぜか私が作り出す『未知なる料理』に対しては酷く臆病な反応を示している。なんかしたっけかな私？

「皆に食べさせる前にちゃんと味見をしてるんだから、酷いものができたら食卓に並べないからだいじょうぶだよ」

「そ、そうか……？
ん～なら、まあ……」

と渋々納得し、じゃあ畑の仕事に戻るからと言い置きそれでもチラチラと此方を振り返りながら去っていくトルビスを眺めているといきなり横から声をかけられ

「あの人のアレも困ったもんだねえ」

「うおわ！」

と飛び退く私を意にも介さず、実はねと前置きしてセリスが説明を始めた。毎回気配無いんですけどおかあさん……。

「あの人のお父さん、まあ死んだ爺様なんだけどね。色々と発明するのが好きな人でねえ、何か発明するたびにあの人を実験台に使っては毎回失敗して何回か死にかけてるから未知なる物に対してトラウマができちゃっててねえ」

10歳位の時には既にあのトラウマができあがってたよ……と呆れたように呟くセリスの言葉に、トルビスにそんな過去が！と同情しつつも新たに得た情報が私の好奇心を強く刺激してきた。

「へえ、10歳位から知り合いだったんだね……幼馴染同士で結婚したんだね。」

とそこまで呟きハツと頭を過ぎる予感に慌てて体を引くと、今の今まで私の頭が在った場所にセリスの手が伸ばされていた。

「なんで避けるの？」

「避けるよ普通！」

「いいから、こっちへきなさい」

と微笑まれた私が逃げたのは当然の行為であり、その後ギャーギャーと騒ぎながら追い駆けつこをしたあと勝手口からキッチンへと逃げ込んだ私を渋々諦め去っていった。
怖かった……。この世界に来て一番怖かったかも……。と思っていたと

「なにやってんのアンタ達は……」

「エ、エへへ……家族のスキンシップ？」

と頭をポリポリしながら微笑むとセリスが諦めて去っていった原因達が呆気にとられて私を凝視していた。

現在ルビスによるパンの生地作製講座真っ最中のキッチンに飛び込んだのだから非難されてもしょうがない訳だが、命の危険を回避する為だったから致し方ないのだと、心の中で言い訳をしておいた。

「そ、それでどう上手くいつてる？」

「ん、ああまあね、みんな力が有り余ってるような奴ばかりだから張り切ってやってるよ」

ルビスにクイッと顎で促され、どれどれと覗き込むと慌てて作業に戻った孤児院から来た受講生達がドッシンドッシンと生地を叩きつけ始めた。

既に最初に作っていた生地は焼成も済みオーブンから出されて横に置かれており、今作っている分で3回目なのだそうだがバテル事無く続けられている事に頼もしい事だと安堵し、焼き上がったパンも私達が作ったパンと遜色ない物に『合格』というと受講生達にもホッとした空気が生まれていた。

そしてここでなぜ私ではなくルビスが講師役をやっているかという、体力的な物もあるが実は既にルビスの方がパン作りの腕は私よりも上なのだ。生地を叩きつける作業が気に入ったらしく進んでやっているうちに才能もあったのだろう、メキメキと腕を上げ明らかに私が捏ねたものより美味しいものができている。

好きは物の上手なれとはこの事かと納得して講師役を譲ったのだ、だって今日来ているメンバーは私が経理主任兼全体責任者に指名したルイに作成班で選抜されたケント、イトマ、ファイネ、そしてマイセルの総勢5名だったのだ。

そうマイセルさんが来てるのですよ、ルビスにいい格好させてやりたいしねえ。

昨日は人が多くて紹介されそになったけど、今日は逃がさないぜ！
ウヘヘ

29・トラウマ（後書き）

ミユキ・・・戻っという。

お気に入りが50件超えてました。

最終的に50件行ったらいいなって目標だったのでびっくりです。
ありがとうございます。

30・策士（前書き）

仕事の日程が予測がつかず更新が不定期になっております。
ご迷惑をおかけしております。

（誰か助けて・・・シクシク）

家の裏庭、昆布が干されているその横に荒い目の御座が敷かれその上に焼き上がったパンと、裏ごしされたカボチャと牛乳を合わせて塩と胡椒で味を調えたセリス特性のスープを添えて昼食を兼ねたパンの試食会が開かれていた。

新食感のパンと更にそれらを自分達で作り上げたという達成感から研修組み5人の顔も晴れやかに次々とそれらをお腹へと収めていった。

「最初はパンを売るって言われても正直パツとしなかったんだが、このパンなら納得できるし現に街で人気なのも頷ける」

「ええ、これなら外に働きに出ているメンバーも呼び戻して孤児院で働いてもらう事もできますね」

「・・・俺達が働きにいつでも他の奴らより安い賃金で使われるし夜遅くまで扱さき使われる、それに文句を言えばあっさりとクビにされる。」

孤児院の中で仕事があればそんな思いもしなくて済むだろうな」

5人の中で一番の年長者のケントの言葉にルイが頷き、一番若いイトマが孤児達の職場での冷遇に悔しそうにしながらも今後への期待に穏やかな表情を浮かべると、他のメンバーもそうだなと頷き合い絶対に成功させようと決意を新たにしていた。

現在の孤児院には22名の子供達が在籍していた。多くは事故や病

により身寄りを失った子供達でフィリスの街だけではなく、近くに点在する農村からも引き取られてきていた。

年長組み11歳から16歳までの子供たちが9人、年中組み5歳から10歳までが7人、年少組み5歳以下の子供達が6人それぞれ兄弟のように上の子が下の子の面倒を見て生活している。

そして子供達に文字や簡単な計算など勉強を教えているのが女性のルイとファイネの2人で、ケント、マイセル、イトマと他に3人が外で働きながら孤児院の細々とした雑事なども手掛けている。

その他にも数人の孤児院出身者が苦しい給金の中から仕送りを送ってきているらしく、それらを寄せ集めてどうにか施設を運営していたらしい。

今現在の即戦力としては大人8人と年長組みから6人の計14人、若干心もとないが今後戻ってくる出戻り組みがそう遠くない次期に合流する予定でいるらしい、年長組みの残り3人は作業中と露店の間小さい子達の面倒を見てもらう為に院に待機してもらう。

しばらくは大人も子供も忙しい時間を過ごす事になるが、生産さえ落ち着けば余裕も生まれるだろうし生活レベルも改善されるだろう。膨らむ期待に盛り上がっている皆にポツンと私とルビスが取り残されていると、ふいにマイセルさんが此方を振り向き

「しかしルビス達との付き合いも長いけど、妹がいるなんて今回のことがあるまで知らなかったよ。

なんで黙ってたんだい？」

「え！あ・・・ああ、ミユキは体が弱くてね日の光に当たらない様にずっと家の中で生活してたのさ、

やっと最近ローブを着れば外に出れるようになったんだよ。

変な噂を立てられても困るからね、あまり外ではミユキのことは言

わないようにしてたのさ」

「そ、そうか・・・変なことを聞いてしまったね。すまなかった」
そう言っただけにペコリと頭を下げるマイセルさんに、いえいえ気にしないでください今はもう元気ですから！とガッツポーズをして答えるとニコリと爽やかに微笑まれ、ちよつとポツと頬を染めちゃったりしている横から漂う冷気にアハハ・・・と引き攣った笑いを浮かべたりしていた。

マイセルさんは他の人達とちよつと違う雰囲気を持っていた。
ケントさんとイトマさんはがっしりとした体格で骨太な感じの体育会系ってやつで、兄のセリオスも着痩せするタイプではあるが畑仕事で鍛えられた体は引き締まって逞しい印象を与えてくる。

しかしマイセルさんはモロに文系であり、くわ鍬やすき鋤よりも本の方がよほど似合うと思われた。

スラリとした体軀に細面な顔立ち柔らかかそうな癖っ毛に少しタレ気味な目が、まるで尻尾を振って此方を見つめるワンコのようにキュンキュンと乙女心を刺激してくる。こつちの世界で見る初のジャニーズ系を思い起こさせる雰囲気私の姉はモロ面食いだつたのねとチラリと横を見れば、その視線に込められた意味を感じ取ったのか気まずげにフィッと視線を逸らしていた。

ちよつと想像していたタイプとは違うけど、ここは1つ姉の恋路を応援しますかと巡らせておいた策を発動させることにした。

「マイセルさんは姉とは小さい頃からのお知り合いなんですよね？」

「そうだね、ちょうど年代も一緒だったからねセリオスとルビス、あとそのファイネと数人でよく遊んでいたよ」

ニツコリと微笑まれ私にそのキュンキュン光線はいりませんからと内心で突っ込みながら、ファイネさんも幼馴染だったのかと視線を送るとコクリと無言で頷かれた。

彼女ファイネさんは・・・何と言いか不思議ちゃんキャラというか最初の挨拶以降は終始無言であるが質問などをすれば頷いたりプルプルと首を振ったりはしてくる、嫌われてるのかとも思ったがルビスからいつもあんな感じだから気にすることないよと言われそういうキャラかと納得したのだが・・・。

なぜだろう、私は彼女にやたらと見つめられている気がする、なんとなく視線を合わせないようにしているのだが・・・まあそれは置いといて

「ならお願いしちゃうかなあ、明後日に街に行った時にねえさんと一緒に鍛冶屋のキトンさんの所へパンの金型を取りに行ってもらえませんか？私は先に孤児院に行って用意しておきたいことがあるので、ねえさん1人だと大変になって心配してたんです」

「ちよちよちよっミミミミユキななにを！」

「明後日か・・・うん、だいじょうぶだよ」

「本当ですか！ありがとうございます、じゃあ待ち合わせ場所とかは本人と決めてくださいね」

とソクサと立ち上がりルビスの横にマイセルさんを促し、後は若いもの同士で的なノリでオタオタとするルビスを残して退散し他の孤児院メンバーの元に行くとファイネを除く皆が生暖かい目でルビスとマイセルを眺めていた、バレバレ過ぎませんかルビスウ・・・と呆れていると、ファイネにギロリつと睨まれてしまった。

その視線にまさかファイネもマイセルの事がと思い至り、また周りをよく見ずに行動してしまったかと逡巡していると

「もうだめ……」

とファイネがポツリと呟きガバツと立ち上がるとそのままスタスタと歩き出してしまった。

うわー修羅場だーどうしよう！と思わず振り返ると、なぜか私の真後ろにファイネが立っておりアレ？っと思っっているうちに背後からギュッと抱きしめられてしまった。

「え？何？どういうこと??」

「あゝやると思った」

「むしろ今までよく我慢したと思いますね」

「ずっと凝視して狙ってたもんなあ」

「あのゝ状況がよく飲み込めないんですが……」

そんなやり取りの間もさっきまでの無表情が嘘の様に恍惚とした表情でローブ越しの私の頬にファイネが頬をスリスリしてくる。

「まあ簡単に言う则可愛い子が好きなんだよ」

「ええ、男女問わず可愛い子が好きですね」

「ローブで顔見えないってのに、それでも見抜くファイネの姉貴凄

いっす！」

いや、そこ感心するところじゃないからイトマ君……。

知ってて黙ってたなルビス！

私も策には嵌めたんだけどさ……。

30・策士（後書き）

痛み別けですね。

何やってるんだかこの姉妹は・・・。

登場人物が増えてくると文章だけで個性を表現する事の難しさを痛感してしまいますね。

力不足感が否めません。

31・動き出した者達（前編）

大きく開かれた窓辺に腰掛けワインで喉を潤しながら1人の男が月を見上げていた。

傍らのテーブルには2日前に戯れに買ったパンで作られたツマミが置かれており、早くも彼のお気に入りのツマミになっていた。パンを料理長に持っていくと大層驚きながらも早速幾つか手を加えて新しい物を作り上げていた。

馴染みの鍛冶屋のキトンに説明も無しに並ばされたが結果的には良い物を教えてもらったと、今度行くときには酒でも買って行つてやるかなどと考えていると外から慌しい気配と共に

「開門！御領主様ご到着、開門せよ！」

門の上で見張りに立っていた兵によるこの城の主の帰城きじょうの知らせに、それまで上機嫌だった男は露骨に顔を顰しかめチツと舌打ちまでしてみせた。

「何もこんな夜更けにわざわざ帰城することもないだろうに……。」

大人しくロンブルク男爵の所にも1泊すればいいものを、またあの我が儘娘ままだまのめに押し切られやがったな」

当人達に聞かれればタダでは済まないだろう文句を言いながら残ったワインを一気に煽り、やれやれとボヤキながらも窓辺から離れ部屋を後にするのだった。

此処はブルガリーテ領の首都ザッカス、そして目の前の豪邸はもはや城としか形容できないほど大きく豪華な館で領主レバント・フォン・ブルガリーテ伯の居城であつた。

本来なら領主といえども城など持てないのだが数代前までは此処は独立した小さな国でその時の王城をそのまま接收して使っている物であるため例外として城を持つ事が許されていた。

ガコンッと大きな音を立てながら門がゆっくりと開いてゆく。

豪華な作りの大きめな馬車が余裕を持って通れる大門が開くにはそれなりの時間を有し、夜の暗い中を進んできた馬車を見つけてからでは到底間に合うはずも無いのだが馬車の中ではイライラと

「遅い！何で開けて待つてないのよ」

「まあそう言うな、この門が遅いのは今に始まつたことでは無いだらう？」

「ううゝそうだけどお」

イライラとする娘を宥めるのは領主レバント・フォン・ブルガリーテ、そしてその言葉に渋い顔で答えるのは年の頃は15ゝ6になる少女、レリレウス・フォン・ブルガリーテ令嬢であつた。

父親に窘められた位では早々黙り込みはしないのだがその横に座る女性と目が合つた途端、ウツと顔を顰めストンと椅子に座つて大人しくなつた。

羽でできた扇で口元を隠し穏やかながらも視線だけで我が儘な娘を黙らせた妻、ユリーシア・フォン・ブルガリーテに女は怖いなと密かに思いながら未だ開ききらない門に苦笑するレバントであつた。

深夜に近い時間であるが城の入り口には多くの侍従やメイドが並び主を出迎えていた。

その居並ぶ姿にホント大変だねえと同情する、もちろんそれには自分も含まれているのだが。

そんな事を考えているうちに馬車が乗り付け真っ先に執事長が労いながら出迎え、それに習って侍従とメイドが一斉に頭を下げる。

しかしそんな中をスタスタと歩き主の横に着くと

「お帰りなさいませ、しかしいくら御領地内とはいえこんな夜更けにたいした護衛も付けずに御帰城なさるのは感心できかねます」

「ん、セテルか・・・そうだったな今回はお前は護衛には付いていなかったんだったな。

ついお前が居るつもりで行動してしまった、次からは気をつけるとしよう」

「御意」

歩みを止める事無く交わされる会話に次からは是非自重してくれ主に俺の安眠の為に、などと内心思いながらこのまま領主に着いて行つちまおうと考えていると後ろからセテル！と呼び止められ内心でチツと舌打ちしつつ

「何でしょう？レリレウス様」

「レリーでいいっていつも言ってるでしょう・・・」

お父様の方はいいから私の方^{ワタクシ}に付いて来なさい」

「ですが……」

「ああ、私の方は構わないよ、レリーに着いて行ってあげなさい」

「……御意」

多分にウンザリとしながら頷くセテルス・トウル・ラウであった。

ブルガリーテ家とラウ家は遠縁の血縁関係にあったが分家筋のラウ家は過去に多大な金銭的な庇護をブルガリーテ家から受けており、それ以来何代にも渡って仕えてきていた。

爵位自体は子爵でありそれなりの位にはいるのだが財政難は今もつて続いており、実質未だに庇護下にある事にセテルは強い反感を思っているのだった。

「レリー様、お疲れでしょう、お早めにお休みになったほうがいいですよ。」

それともお休み前に湯浴みをなさいますか？」

「どっちもいいわ、暇で暇で日中ずっと寝てたから目が冴えちゃってるのよ」

そうですかと応えながらもヤレヤレと内心で溜息をついているとチラチラとレリレウスから流し目を送られ、またか……と更に暗鬱とした気分になっていく。少し前から色気付いたらしく幼いながらに俺に誘いをかけてきていた。

上手く丸め込んでブルガリーテ家に乗っ取るという手も有るのだが、俺の年は29であり15の小娘は守備範囲外である上にレリレウス

嬢の容姿は十人並み・・・いや二十人並みというべきか、お世辞にも美しいとは言えるものではなかった。

せめてもう少しお顔の造りがどうにかなくてくれたら年齢差も跳ね返せて晴れて伯爵の爵位と莫大な財産が手に入ったのにと、そういうばあの街でパンを売っていた女は中々にいい女だったな・・・などと考えながら向けられる視線に気が付かない振りをして

「では少しお食事でもしてみてもどうでしょう？」

お腹に物を入れれば眠気も起きるかもしれないよ、ちょうどフィリスで見つけた面白い物がありますので」

と返事も待たずにさっさと視線を入り口に向けると控えていたメイドがちょうどあの時馬車の中でパンを食べさせたメイドで、俺の視線に畏まりましたとソソクサと厨房へと取りに行った。

「何？面白い物って・・・」

「すぐにわかりますよ、きっと気に入っていただけたと思いますよ」

などといい優しくニコリと微笑むとポツと頬を染めて俯くレリレウス嬢に、しまった・・・失敗した、頼むから本気にはならないでくれよと内心で本日何度目かもわからなくなつた溜息をつくのだった。

31・動き出した者達（前編）（後書き）

本来ならこの話しまで来るのに10話もかからないはずだったので
すが、物語の流れ的にミユキと街の人達のつながりが必要だった為
に30話過ぎてやっとここまで来れました。

予定は未定、良い言葉です・・・。

後編すぐにはUPできません御迷惑をおかけします。

32・動き出した者達（後編）（前書き）

お待たせしました、後編です。

32・動き出した者達（後編）

薄暗い通路に出て背後の扉を閉めてからやっと肩の力を抜きホッと一息をつく。

メイドに命じパンを待っていたが暫くたつても一向に戻ってこない事に業を煮やしレリレウスの相手にもウンザリしていた俺は様子を見てきますと部屋を後にし厨房へと行くと、料理長がレバント達の為に夜食を用意していたらしくレリレウスにもちゃんとした物をとメイドが待たされていた。

ハラハラとした様子で待っていたメイドが俺を見つけると今度はオドオドと説明してきた事に、そんなに俺が怖いかねえと内心で苦笑いを浮かべた。しかし此処へ来てからの所業を顧みればそれも致し方ないかとも思い返す。

俺の役目はブルガリーテ家の護衛、平和ボケした国とはいえかなりの富を蓄えるこの国には他国からの密偵が多数入り込んでいる。従者として紛れ込んでいた密偵を彼らの前で切り殺した俺を恐れるのは至極当然の事かもしれない。

「料理長、今出来ている料理だけで構わない。」

後は俺が買ってきたパンを用意してくれ、小さいほうのいい」

「畏まりました。」

そ、それと他のパンを旦那様と奥様にお出ししても構いませんでしょうか？」

「……ああ、早くしてくれ」

お気に入りのツマミがこれで無くなったかとガツカリもしたが断る理由も思い浮かばず渋々と了承するとホッとしたように調理に戻っていた。

料理をメイドに持たせ厨房を後にする時に目敏く見つけたワインとグラスを掴みさっさと部屋に戻っていくと

「遅い！何をやっていたのこのノロマ、わざわざセテルが様子を見に行く羽目になったじゃなの！」

「ひっ！」

も、申し訳ございません」

1人待たされイライラが頂点に達していたらしいレリレウスが掴みかからんばかりに怒鳴り散らしギャアギャアと騒ぐ声にこちらまでイラっとしてくるが

「まあまあレリー様、どうやら料理長がちゃんとした物をと気を利かせたらしく遅れたようです。」

そのお陰で、いい物も頂戴してきましたよ」

ホラっとワインを持ち上げて見せると

「え！だってワインは社交界に出るまでは飲んではいけないって・・」

「それは建前ですよ、いきなり社交界で初めて飲んでもし醜態を晒してしまってもいけませんからね。」

皆少し前からコッソリと飲んで練習するものですよ」

「あ、あら、そうなの？では少し飲んでみようかしら」

頬を染めながらも興味津々な様子を隠せずメイドからワインへと意識が移った事を確認し、顎でメイドに合図すると察したようでソクサと扉までさがっていった。

「そしてこちらが私が見つけてきましたパンでございます。

中々興味深いパンでレリー様もご存じ無いと思いますよ」

「まあ、これがパン・・・？随分と柔らかいのね」

サクサクと口当たりの良いパンを気に入ったらしく用意した料理と共にワインもハイペースで飲み30分もしないうちにトロンと焦点が合わなくなってきたことにほくそ笑んでとっとと寝室に放り込み、後は任せたとメイドに押し付けサツサと部屋を後にする。

視線を読まれにくくするために少し長めにしている髪を乱暴にかき上げながら薄暗い通路を進んでいく。本当ならこのまま自室に戻り眠ってしまいたいところだが、一応はレバントの所に顔を出さない訳にはいかなかった。

「クソ！なんで俺がこんな所でこんな子守をしてなきゃならねえんだ！」

イライラが募りつい口から出てしまう本音と共に過去の自分が蘇っていく。

セテルース・トゥル・ラウはラウ家の嫡子として産まれるが母親が側室だったために次の年に産まれた正室の子の弟に家督が継がれることになっていた。だがそんなことはセテルにとってはどうでもいいことだった、これ幸いと16の時に剣だけを持って家を飛び出し

名を隠し場末の傭兵団に転がり込んでいた。

剣の腕には自信があつたセテルだったが貴族の剣術など最前線では通用せず初戦にて手酷い怪我を負ってしまったが、見かねた傭兵団長に鍛えてもらいメキメキと腕を上げていった。

数年後には傭兵団一の腕前になっていたが師匠として慕っていた団長が死亡したのを機に団を抜け、隣国に渡り戦場を駆け巡った。大陸一の大国は野心が強く戦争をしていない事がない状態で仕事にも事欠かず功績を挙げ続け、26の時には騎士の称号も得たがその際に身元を調べられ他国の貴族と知られこの国に逃げ戻ってきたのだ。そのまま傭兵として過ごしても良かったのだが、つい魔が差してラウ家に顔を出したのが運の尽きだった。

何処から調べてきたのか他国で騎士の称号まで得た俺を知っており、それをブルガリーテ家に伝え最強の護衛として売り込んだのだ。

・・・そう俺は此処に売られたのだ。

そのまま逃げようかとも思ったのだが歳の離れた妹と母を人質として捕られ、それと知らない妹に懷かれ邂逅に涙する母に泣々と従い此処に来て早いもので2年以上の月日が経っている。

此処の生活にも馴れてきたが、馴れれば馴れるほど両家に対しての憎しみが募っていた。

「いつか見ている・・・この俺への仕打ち・・・絶対に後悔させてやる！」

ギリギリと眉根を寄せたその双眸にはメラメラと憎しみの焰が揺らめいていたが、しかしセテルにはコレといった手が有る訳ではなかった。

そう、今この時まででは。

この後、領主レバントによってもたらされた王都での出来事を聞く
までは・・・。

32・動き出した者達（後編）（後書き）

不穏な空気が出てきました。

キーワードにも設定してありますがこれ以降だんだんと『残酷な描写』が出てきます。

苦手な方はお気をつけください。

33・彼女の物語

王都テレストを頂に6つの領地でなる弱小にして小さな国家フォンブリキア。

巨大山脈に守られ肥沃な大地と豊かな森を有し穀物庫を潤し、連なる山脈から豊富な鉱石を掘り出し優れた鍛冶職人により武器や道具を作り出し豊かな漁場でもある港から船で他国に輸出し国庫を潤している。

ブルガリーテ家の領地は王都テレストに対して南に位置している。しかしフォンブリキアの国土は中心に巨大な『穴』が空いており王都に行くには大きく迂回して行かなければならなかった。

直線距離にすれば2日掛からないのだがこの世界には空を飛ぶ交通手段は存在しておらず、左右どちらかの領地を通らねばならずそうになると素通りする訳にもいかず結局はそこで1日足止めを食い、4日ほどの日程を有するのであった。

これが商人なら1日早い3日強で済むのだがそれでも王都から買出しに出るには割に合わないらしく、食料供給率だけで言えばフォンブリキア1番にもかかわらず国王からのレバント伯への評価はそう高い物ではなかった。

そんなレバント伯が王都より国王直々の書面で召喚されたのが今から15日前、よほどの失敗をしたかその逆か・・・いや、あの現状維持しかできない小心者のレバントがそのどちらもするはずがない。

なにかが起こっているのかとは思ってはいたが、中々面白い事が起こっているようだ。

ここは領主レバント伯の執務室、そこに勝手に入り込み一人テーブ

ルの上に置かれていた機密扱いの書類を読み耽っている男がいた。少し長めの前髪をかき上げながら愉快そうにクツクと笑いセテルはなおも読み進めていく。

ひとしき一頻り怒りをぶちまけ自身を落ち着かせてから執務室を訪れノックの返事を待つことも無く中に入れば、そこにはレバントの姿はなかった。

何処に行った？と考えてみれば先ほど夜食を用意していた事を思い出し食事専用の部屋かと思いつたが、面倒臭せえ此処で待ってればいいだろうと柔らかなソファでくつろぐとすると、ふとテールの上の書類に目が止まり躊躇する事無く手に取って読み始めていた。

それは先読み一族とも黒の一族とも呼ばれる者達が関わっている物だった。

チャオ族が民衆側の者とするならば黒の一族は貴族側の者と呼べるかもしれない、どちらも怪しげな呪術を使うがチャオ族が災厄を払うのに対して黒の一族は国益に関する予言を行なう者達であった。その予言は数日後の事であったり数年後、数百年後の事と一貫性が無いが今回の予言は数百年後しかも数ある予言の中でも最古の物に関するものであり、黒の一族の悲願とされる予言が今まさに成就されようとしているというものだった。

「しかもその場所がブルガリーテ領内だというのか」

そしてそれを裏付けけるかのように相対するチャオ族が数多くこの領内へと移動を始めているとの報告も上がっている、彼の一族にも今回の予言に良く似た伝承という物が伝わっているらしく既に水面下で両陣営の争奪戦が始まっているようだ。

「黒髪の聖守護者現れ その守護を与えし者の望みを叶えん 富を

求めれば巨万の富を 権力を求めれば世界を 力を求めれば竜すら
平伏すだらう……か」

クツクツク馬鹿馬鹿しい、いい大人達がそんな大昔の予言に振り回
されているとは……。

竜すら平伏すだと？馬鹿な、アレをどうにかできる者がこの世に居
る筈が無い。

過去に一度だけ竜を見たことがある、傭兵時代に戦場になった草原
の近くの山に住み着いていたらしい竜が、騒ぐ人間に怒りその戦場
に突如飛来し暴れまわったのだ。

上空で羽ばたくだけの突風で人間が吹き飛び、口から吐き出される
灼熱の息で灰になり果て、振り回される尾に挽肉のようにされる。
あれをどうにかできるとしたら、それはもう神と呼べるのではない
か……。

ノックもされずに突如ガチャリと扉が開けられた。

「う、セ、セテルか……」

「無礼かとも思いましたが、お食事の場にお邪魔するのも無粋なの
でこちらで待たせていただきました」

「ああ、構わんよ」

階段を上がつて来る足音を敏感に察し、悠々と書類を戻し何食わぬ
顔で扉の横に控えてレバントを出迎えたセテルが恭しく出迎えると
書類を盗み見られていたとも知らず、深く椅子に腰掛け大きく溜息
をついた。

「お疲れのようですね、王都でなにかございましたか？」

「いや、わざわざ王に直々に呼ばれる程の件ではなかったよ。
我が領内に遠い国の貴賓者きひんしゃがはぐれて迷い込んだらしくその搜索を
との事だった、中々に珍しい外見らしくてな程無く見つかる事だろ
う」

「ほお珍しい外見とは？」

「うむ、黒い髪をした者だということだ」

「黒い髪・・・それは珍しいですね、我々もその搜索に？」

「いや、王都から数人派遣されてくる手はずになっている、その者
達に一任しようと思っておる」

ふん、小心者の考えそうな事だ。見つからない場合はその者達の所
為、見つかった場合は自分が協力したお陰ということか。

「しかし全く人手を出さないという訳にもいかないのでは？」

「ん、ん・・・」

「よろしければ私がその者達と同伴して搜索に協力いたしましょう」

「お、おお、セテルそう言ってくれるか。」

お前が出てくれるなら安泰だ、任せたぞ」

「御意」

恭しく頭を下げながらセテルの顔には満面の笑みが浮かんでいた。

馬鹿馬鹿しい話だ……。だが、退屈なこの城に居るよりは余程面白そうじゃないか。

それにもしそんな力が有るのだとしたら、俺にこそ相応しい。

そして新たな物語が紡がれ始めた。

33・彼女の物語（後書き）

パンでヒィヒィ言っていた物語がいきなり大きくなっちゃいました。
しかもサブタイトルに彼女とあるのに例の彼女出てないし・・・。
2視点がルビスからセテルに移ってきてしまった・・・ルビス好き
だったのに。

34・望みを叶えるという事

フィールランド家で開かれたパン教室の次の日には、慌しくも大量の小麦粉を孤児院に運び込んでいた。

ウチから納入した分は信用貸しの後払い扱いだが他の農家から仕入れる分はそうもいかず、全財産を使って支払った為もう失敗は許されない所まで彼等も踏み込んでしまっていた。

男手が必要とトルビスとセリオスもこの日ばかりは畑仕事返上で借り出され、馬車で2往復した後には孤児院の暖炉を利用したお手製の酵母保存箱作製に取り掛かっていた。

その後ルビスとセリスと私の3人で作り貯めていた酵母と食パン用の金型を運び込み、フィールランド家の家族総出での孤児院最終スバルタ教育と明日のパンの仕込みを済ませ

「これでできることは全部やったかな？」

「そうだね、後はぶつつけ本番になっちまうね」

「ミユキのパンのお陰でウチも儲けさせてもらったからね、明日はあんた達2人もこつちを手伝っておやり」

と女3人で話し合っているとコツコツと杖の音をさせながら院長先生が近づいてきて

「この度は何から何まで手伝っていただきありがとうございます。これが上手くいけばこの孤児院も持ち直して……いや、今まで以上に良くなっていける事でしょう」

「いえ、こちらこそパン作りを引き継いでいただき助かってますから。
もつとちゃんと準備期間があれば良かったんですが・・・」

「なあに、この爺さんならこれくらいで丁度いいくらいさ・・・ねえ？」

「むう・・・」

横から挟まれたセリスの言葉にルビスと私がキョトンとすると、昔は死んだウチの爺様と鍛冶屋のキトンとこの院長先生とで集まっては酒を飲み、怪しげな発明品を作ってはトルビスを使って実験して笑い転げていたもんさ！とセリスはニヤニヤと人の悪そうな笑みを浮かべつつ説明してくれた。
意外な所で意外な人達が結びつき、さっきからソワソワと院長先生から距離をとってるトルビスに哀愁を感じつつ、では私たちはこれで帰りますね、皆さんも明日に備えてゆっくりと休んでくださいと告げると、遠くのほうで手を上げながらピョンピョンと飛び跳ねつつルイスさんが近づいてきた

「ああー！待って下さい、ひとつミユキさんをお願いしたい事があるんです」

「え、なんですか？」

「えっと、皆で相談した結果ミユキさんに私達のパン屋の名前を付けてもらおうと言う事になったんです。
よかったら考えてもらえませんか？」

「わわわたしがですか？」

コクンと頷かれ周りを見渡せば皆も頷きルビスやセリスにも促され、ううーんと悩み始めるとポンっとうひとつの案が浮かび

「じゃ、じゃあ、サンタクロースのパン屋さんで・・・」

「サンタクロース・・・とは、どういう意味なんですか？」

「え・・・そうですね、幸せを届ける人って感じかなあ」

「幸せを届ける・・・良いじゃないですか！それでいきましょう」

皆も笑顔で納得してくれたようでどうにか大役を務めホッと胸を撫で下ろす。その場の流れとはいえ遂にサンタクロースという言葉がこの世界で発した私は少しずつでもこの言葉が広がってくれるといいなあとは軽く考えていたのだった。

そして翌日、天候は残念ながらどんよりとした曇り空。

なぜかその空を見上げながら無性に不安な気持ちが膨れ上がっていた、どこか私の知らない所で何か取り返しの付かない物が動き始めたような、このまま進むともう引き返せないような漠然とした不安そんな胸が締め付けられるような不安を感じながらも、きっと今日のパン屋の事が気になっているんだと言い聞かせルビスと共に孤児院に赴くとそんな気持ちは一気に吹き飛んでしまった。

そこはすでに戦場だった。

飛び交う怒号、吹き上がる白煙、忙しく走り回る人々。

「違う違う、そうじゃない！　そこ小麦粉撒き散らすな！　手が空いたやつはこっちを手伝ってくれ！」

挨拶を交わす間も無く駆け出され数時間の格闘の末どうにか本日予定数の焼成まで漕ぎ着け、今度は休む間も無く広場のほうへと応援に向かった。

約束の期日通り本日から本格的なパンの販売が始まったと噂が広がったらしく、広場は人で溢れ返りかつて無いほどの賑わいを見せていた。

「おう！嬢ちゃん、すげえもんだなあ。

長い事ここに住んでいるがこんなに此処が賑わったのは祭りの時以外じゃはじめてだぜ」

「キ、キトンさん！すいませんお騒がせしちゃって」

「なあに、こっちも便乗して稼がせてもらってるから気にすんない」

キトンさんに捕まり話していると、ミユキあんたはそこにいな売り場にあんたがいるとまた何か起こしそうだから！とルビスが失礼な事を言っただけだったが、前科持ちとしては否定も仕切れないので大人しく従っているとキトンさんに盛大に笑われてしまった。

「クツクツク、嬢ちゃんは大したもんだなあ。

見なあいつ等の顔を、あいつ等があんな顔して働くななんて今までなかったことだぜ」

その言葉に改めてパンを売っている孤児院メンバーを見ると、全員が汗に塗^{まみ}れているがその顔には笑顔が溢れていた。そしてその笑顔には希望と自信も感じられて……。

杖の音と共に近づいてくる気配に慌てて振り向くと優しい笑顔を伴い院長先生にポンつと肩を叩かれ

「今回の事では貴方には言葉に出来ないほどの感謝を感じています。見てください彼らの顔を、初めてなんですよ彼等が街の人々の前であんなにも自信に溢れた笑顔をするのは……。」
貴方は私たちに孤児院の再建だけでは無く希望と自信も与えてくださったのですね、貴方こそ間違いなくサンタクロースですよ」

その言葉にトクン……と胸の奥で何かが動き出した

「サンタクロース……なんだそりゃ？」

「幸せを届ける人という意味らしいですよ」

「ほお、いい言葉じゃねえか。」

なるほどそりゃあ嬢ちゃんにぴったりの言葉だ」

トクントクンと脈打つ何かはゆっくりと花開いていく

グツと胸を押さえながら嬉しそうな笑顔を浮かべて働く彼らを見やる。

今の今まで私は孤児院の再建とこれからの生活向上が彼らの幸せだと考えていた。しかしそれよりも本当に彼等が望んでいた物は、街の人々と同じ高さに立って共に笑い合える場所。

自分達で作り上げ自分達で売る、それを人々が笑顔で買っていく。たったそれだけの事、それだけの関係が彼等には遠くそして心の奥

底で望んでいた事。

『平等』『公平』『同じ立ち位置』『哀れみ』『蔑み』『見下される場所』彼らの願いは私の考えの遥か上を行っていた。結果だけ見れば私は彼等の望みを叶えたかもしれないが・・・ホント、サントクロースって難しいなあ。

ポロポロとこぼれる私の涙は彼等の幸せに流された物が、それとも変わっていく自分に流された物か

胸を押さえ倒れゆく私を慌ててキトンさんと院長先生が支える中、涙の理由の答えを見つける間も無く私の意識は光に飲まれていった。

そしてその光景を建物の影から目を細め見つめているチャオの視線には、最後まで気が付く事はなかった。

34・望みを叶えるという事（後書き）

何が正しく何が間違っているのか。

誰が正義で誰が悪なのか。

立ち位置が変わればそれらも変わる物です。

登場人物が多くなるという事は物事の価値観が増えていくという事。

ここからが正念場です、ミユキにとっても作者にとっても。

35・交錯する意思（前編）（前書き）

悩んだ末、力の説明の件を編集くだりいたしました。
以前とは本質が変わっております。

35・交錯する意思（前編）

チャオ族が身に付ける物の多くには呪術の触媒になる物が含まれている。そのもつとも顕著な物がチャオ族の印ともなっている肩から掛けられている朱色の紋様が描かれている布である。

そして今、倒れ行くミュキを見つめていたチャオがその布に触れながら呪術を行使しはじめた。

監視対象 覚醒確認 意識消失中

遠話と呼ばれる術式を行使し付近に待機している同族達に思念を飛ばしていく。遠話とは言っても短い単語を数回に別けて送るモース信号に近いものだったが、その分通話距離は広く街ひとつ分は軽くカバーでき訓練されているチャオにはそれで十分であった。

黒一族未確認 監視続行

返される遠話に了解と返し意識をミュキに戻す。

「やっぱり貴方は目覚めてしまったんですね、できればそのままで……」

一瞬だけ窺^{うかが}えた表情と共に溢^{こぼ}された言葉だったが、最後まで紡がれる事なく次の瞬間にはその顔からは表情は消されていた。

途切れる事のない客を相手に声を張り上げているとキトンが駆け寄ってきてミュキが倒れたと聞かされ、慌てて御座の上に寝かされて

いるミュキの元へ行くと頬を濡らし蒼い顔で意識を失っているその顔を見て心臓が止まりそうになった。

さっきまであんなに元気そうにしていたのに・・・いや違う、本当は気付いていた。

今日のミュキは朝からどこか元気が無かった、それでも明るく振舞い孤児院に行つてからは「あちよー」だの「うによー」だのいつもの変わった掛け声をあげながらパンを捏ねる姿に安心して、マイセルを伴つてキトンの跡目を継いだ息子の所へと金型を取りに行ったのだ。

マイセルと2人だけの時間に朝から緊張していたのだらう、ミュキの異変に気付きながらも舞い上がっていたアタシはそれを見逃した、その結果がこれだ。

「ミュキ、ミュキ。しっかりおし、ミュキ」

ただ名前を呼び濡れた頬を拭つてやる事しかできない自分が情けない、こんな時でさえローブのフードを取つてやる事すらできない自分は酷く無力だった。

ここはこの国の頂、王都テレスト。

その王城の一室に設けられた明り取りの窓も無い部屋、明かりも消され真の暗闇に閉ざされた部屋の中心に瞑想する者がいた。

微動だにする事無く瞑想は続けられていたが、やがて静かに俯いていた顔を上げると

「聖守護者様、無事覚醒されました。

これより始祖マツシタ様の予言に従い、これ以降は先読みの一族の名を返上し正式に黒の一族として行動を開始します」

「畏まりました」

声と共にひとつ小さな明かりが灯される。ユラユラと揺れる頼りない小さな蠟燭の明かりだったが、暗闇に馴れた目にはそれでも目を顰めるほどでパタンと閉まる扉の音を瞑目したまま見送りながら

「ふふ、俺の代で聖守護者様が降臨してくれるとは正しく天啓也。
必ずやチャオ共より先に我らがこの地にお迎えしましょうぞ」

グツと拳を握り締めながら語る男はようやく馴れた目をゆつくりと開いていく。蠟燭の明かりを宿すその瞳はこの世界には存在しない漆黒の夜の色をしていた。

微かな浮遊感と共に光に溶け込んでいた意識もその輪郭をハッキリとしたモノへと変えてゆく。

ここは何も無い空間

ゆつくりと目を開けてゆく

ただ白い景色が広がるだけの場所

そして目の前に居るであろう『彼』に合わせて視線を上げてゆく

「久しぶりですね、新しき紡ぎ手よ」

「色々と言いたい事もありますが・・・そうですね、まずはお久しぶりです」

ペコリと頭を下げお辞儀をした後『家族』譲りのニッコリとした良い笑顔を浮かべつつ、まずは貴方の言い分をお聞きしましょう、さあどうぞ　と促すと

「ず、随分と遅くなりましたね。まあ元々あの状態で3年以上も自我を維持した精神力を見込んで頼んだのですから、この結果も当然の事なのかもしれませんね。
では、あの時語らなかった事を語る事にしましょう」

そんな遣り取りを交わした後、静かに『彼』は語り始めた。

「私が貴方に託した力は『幸福にする力』ですがその本質は『運命に介入する力』でもあります。

世界に満ちる運を左右できる存在として私達はあり、この力の本質は望む望まずに係わらずに対象に大きな影響を与えてしまえます、ですから力を使うに値するかはその世界自信が決めるのです。貴方はあの世界に認められたのですよ」

「でも最初に『幸福にする力』は単体では意味を成さないって、『幸福になるうとする意思』と合わさり始めて『幸福』になると私は聞かされました、でも今の話では運命を操ってしまえば相手の意思に関係なく幸福を与える事だって・・・」

「そうですね、しかし望まぬ幸福が果たして本当に幸福と呼べる物なのでしょうか？

望まぬ者に大金を授けてもそれは幸福とは呼べません、どんな理由であろうがその意思を示した者に授けてこそ初めてそれは幸福と成

り得るのです」

でも・・・と尚も納得しきれない私に『彼』は優しく微笑みながら、
いずれ貴方にも判る時がきますよ、それは運命の輪から外された私
達に残されたたったひとつの『運命』なのですから・・・と。

35・交錯する意思（前編）（後書き）

後書きを後日自分で読んでて情けなくなる言い分けっぷりでした。猛省しています。

少しでもいい作品になるように今後も少しずつ改稿します。

36・交錯する意思（後編）

私のあの世界での行動は何だったんだろう……。

嬉しかったのに……

私は生まれたときから家族を傷つけてきた、大切にしてもらったのにそれに報いる事すらできなかった。

だからそんな私が誰かを幸せにできるかもしれないと知ったとき本当に、本当に嬉しかったのに。

なのに……なのに……！

「いらない……そんな力なんていらない、幸福にする力だって言っただじゃない。

最初から運命を操る力だって聞いていたら私はあの世界で何もなかった！

そんな力なんか無いほうがいいに決まってる！」

眉根に力を込め『彼』を睨んだ、私は初めて本気で人に憎しみを抱いたかもしれない。

事故で音以外の全てを失ったときも相手が誰だったか、それこそ男だったのか女だったのか若者なのか老人なのか一切わからなかったのもあるだろうが、私が抱いた感情は家族への謝罪だった。あんなに大切にしてくれていたのに私は家族を傷つけた、家族の心に消えない傷を負わせた事がただ悲しかった。

怒りに握り締められた両手はブルブルと震え、黒く濁った怒りが体からあふれ出し白い風景を黒く染めていく。染められた世界と白い世界の境界線に亀裂が走りその亀裂に沿って更に広がり世界が崩れていく。

「だめです！その感情は危険すぎる。落ち着きなさいミュキさん！」

この空間は貴方の心の中なのですよという『彼』の言葉も既に私には届く事は無かった。

自分の中にこんなにも濁った感情があったのかと、今までそのことに気付く事無く生きてきた自分は何て幸福だったことか、カチカチと歯を鳴らして自分が抱いたその感情に恐怖しこんな感情は知らないこんな強い憎しみなんか私のモノじゃ無いと自身が生み出した感情を否定した。

すると『彼』に向けられていた黒い感情は向きを変え私自身を押し潰そうと襲いかかり、抵抗する事も出来ずに私は飲み込まれ恐慌をきたす意識を手放そうと

『ミュキ、ミュキ。しっかりおし、ミュキ』

ルビス・・・そうだルビスの声だ。

聞こえてきた声に押し潰されていた意識が動き出す。そうだこんな所で倒れる訳には行かない、だって約束したもののフィールランド家の娘として胸を張って帰るって。

両手を伸ばし体からあふれ出す黒く濁った感情を抱きしめる、ゴメンね追い出してしまつてこの感情も私なのにね、大丈夫もう否定しないから・・・だから戻っておいで。

体からあふれ出していた感情は止まり辺りを染め上げていた濁りもスツと消え失せたが、生じた亀裂は消える事無く残されたままだった。

「やはり貴方は強い人だ。私はその感情を受け入れられずにもう一人の私を生み出してしまったのに・・・」

しかし、それでも心は傷ついてしまいましたね。どうやら貴方を選んだ世界に私は敵対視されてしまったようです、もう此処に来る事は出来ないでしょう」

輪郭がボヤケ霞んでいく『彼』の姿は青年の物になっていた。はにかんだ様に笑うその顔は少し寂しげで、それでも瞳に宿る優しさにこれが『彼』の本当の姿なのだと思わせた、憎しみや怒りを抱いた事でやっと心のフィルターを通すことなく本来の姿を見ることが出来るようになったのかもしれない。

「貴方はこの力を否定しますがこれは世界が必要だと求めた力。世界を流れる運命を偏る事無く淀む事無く最適化する力。貴方は貴方の物語を紡ぎなさい。そうすればこの力が何の為に有るのかきつと答えが見つかるはずです」

消えゆく存在を見つめこれで本当にもう会う事は無いんだろうと直感的に悟った私は、最後に微笑みながら

「サンタクロースさん、本当は若い姿なんですね。カッコイイですよ」

「ミユキさん……ええ、そうですね？実はカッコいいんですよ」

クスクスと笑い合いながら彼の姿は光に溶けて行き、そして私は瞳を閉じた。

「・・・・・・・・ん」

「ミユキ？気が付いたのかいミユキ」

薄っすらと目を開けると視界いっぱい心配そうなルビスの顔が広がっていた。

心も体も疲弊しきっていたけど、笑ってただいまと告げるとルビスの瞳からはボロボロと涙が溢れ出し

「ごめんよ、朝から様子が変だって気づいていたのに・・・・・・・・アタシは何もしてやらなかった。

ずっと守っているつもりだったのにアタシは何も出来なかった、守ってやれなかった」

「ううん、ルビスはずっと私を守っていてくれたよ。だって声が聞こえたもの、だから私は私のまま此処に戻ってこられた」

だから泣かないでと涙で濡れる頬を優しく撫でると、ルビスの目からは更に涙が溢れ出してくるが

「とりあえず意識が戻っただけでも安心だけどやっぱりちゃんと医者に診てもらわないと！

チャオの所へ行くよ！」

ガバツと私を抱き上げたルビスはそういうと脱兎とばかりに走り出し、あつという間に広場を抜けチャオの家が続く道へと走りこんだ。曲がり角に誰か居たらしくルビスに跳ね飛ばされ「んひゃう！」と何処かで聞いたような悲鳴を上げて倒れこむ人に、ごめんなさああああ・・・・・・・・いと謝りながらもスピードを緩める事無く走り抜けた。

ハアハアと肩で息をするルビスに抱えられながらチャオの家に入ると、店舗部分のスペースには見慣れない人達が居て入ってきた私達を見て固まっていた。

その人達は全てチャオ独特の衣装を身に纏っていてそれを見た私たちも固まっていると後ろからゼエゼエと荒い息遣いが聞こえ慌てて振り向く、するとそこには何故かボロボロになってヘロヘロのクタクタの顔馴染みのチャオが扉に寄りかかりながらもズルズルと床にへたり込んでいく姿があつた。

「どうしたの？」

「………いえ、御気になさらず」

何とも言えない空気がその場に満ちるのであつた。

36・交錯する意思（後編）（後書き）

望んでいた力ではありませんがミユキはそれを手に入れました。
後はミユキがどういう選択をするかですね。

37・同郷者（前書き）

35話の力の説明部分を大きく改変しました。

イメージ以上の大きな力として読んで頂いてる方に伝わってしまうと判断し書き直しました。

年度末で多忙だったため更新が遅れた事と合わせて謝罪させていただきます。

37・同郷者

沢山の薬草を保管しているチャオの部屋は一種独特な香りが染み付いている。

決して不快な香りではないがミュキにとってはどうしても向こうの世界での病院を思い出してしまう香りであり、今まさに診察を受けている状況と相まって少し緊張してしまう。

あの後事情を話し私をチャオ達に預けると心配しながらも渋々とルビスは広場に戻っていき、此処には私とチャオ4人だけになっている。

馴染みの見知ったチャオの他に3人の見慣れないチャオ族の人達がいることも緊張の度合いを高めている要因だろう。

「んゝちよつと脈拍が多いですが、他には別段異常は無さそうですね」

「アハハ・・・この状況に緊張してるせいじゃないかと・・・」

ポリポリと頬を掻きながら答えるとミュキさんの事情は既に説明してありますので大丈夫ですよと笑顔で言われたが、こちらを見つめてニコニコと微笑んでいる3人を見るとつい緊張してしまうのは致し方ないと思うミュキであった。

3人のうち2人はまあいいんですよ、男性の方と女性の方で両名とも茶色の髪をしていてチャオ族の衣装に身を包んでいる40代位の方達で、馴染みのチャオより偉い方達だろうとしても普通の方達だろうと窺えるのだが、問題は残りの1人にあつたのだ。

かなりの高齢の方で杖をついている姿も堂々としていて若干腰が曲

がつてきてはいるが向けられる眼差しにはまだまだ強い力が宿っている。それ以外は唯^{ただ}一点を除いて衣装も他のチャオと同じなのだが、その一点だけでミユキを困らせるには十分であった。

リーダー

LEADERって書いてあるんだよねえ……。

そうなのだ、杖にLEADERと刻印されているのだ。しかもその文字はあちらの世界の文字であり、こちらの世界には存在しない文字であった。

そのままの意味で取れば指導者あたりに訳していいんだろうが、これはスルーするべきなのかそれとも突っ込んでおくべきなのか。そもそもなぜこの文字が此処に存在しているのか、以前に聞いたチャオの伝承と先ほど邂逅した『彼』の言葉で1つ仮説がたてられるのだが……。

「どうしました？気分でも悪くなりましたか？」

うーんと考え込む私の姿にチャオが心配そうに聞いてくるのに違う違うと返事を返しながら、悩んでいても答えは出ないんだしと意を決して

「あの、その杖に書いてあるのはLEADER……指導者って意味ですよね？」

貴方がチャオ族の指導者の方なのでしょうか？」

私の言葉に笑顔は消え去り目を見開いて4人のチャオに見つめられる。

シーンと静まり返り重苦しい空気に支配される場にもしかして地雷踏んだ？と後悔するも出した言葉は取り消せないのはどこの世界で

も共通する事で、どうせ地雷踏んだんなら駆け抜けちゃえと開き直ったミュキは一気に仮説に対しても聞いてみることにした。

「貴方達チャオは……いえ、チャオの祖先の方かな……もしかして私と同じ『場所』から来たんじゃないかもしれませんか？」

『彼』は世界に認められなければ力は使えないと言っていた、なら私の前にこの世界に来ていた人達がいたのかもしれない。そして何らかの方法で後任の私が来る事を知り伝承として伝えてきたと言うのが私の立てた仮説なのだが、いきなり祖先は異世界人ですかとは聞けないのでばかして聞いてみたんだけど、ありありと浮かぶ驚愕の表情にもしかして直球ストライクですかぁ？と固まっていると

「ななななにを言うんですかミュキさん、ねえ？」

「そそそそうですよそんなことあるわけじゃないじゃないですか、ねえ？」

「あああああたりまえじゃないですか、ねえ？」

「よくぞ見抜きましたなミュキ殿」

「……あつさり認めないでください長老！！」「」「」

なんだろう、チャオ族ってみんなこんな感じなんだろうkachyottoイメージ狂うぞとか思いながらも私を見つめ返す真摯な長老の瞳に気を引き締めなおす

「チャオ族のどこからその答えに辿り着いたのですかな？」

「1つは私にぴったりと当てはまる伝承をそのチャオから聞いていた事と2つ目はその杖に書かれている文字です、それは私の居た『場所』の言葉で此処には存在しない文字です。3つ目は……これが一番の決めてなんですが、スイマセン秘密です」

そうですかと呟き暫しの瞑目のあと、ゆっくりと長老は語り始めた
チャオ族は2番目にこの世界に遣わされた者の末裔であること。
しかし授けられた力を行使する資格は得られず初代チャオはその換わりとして癒しの力を望み、その対価として3番目の者を導き守護する役目を担ったという。

「彼は資格こそ得られませんでした、その後の人生を費やし癒しの旅に出たのです。その時自身の名を名乗らず人々にチャオと名乗りそしてチャオと残し去っていったと言います、その血と力を継いだ我々もその意思を継ぎ名を封じチャオとして生きているのです」

そんな素晴らしい人が得られなかった資格を私が何故……と思いながらも1つ思い当たることがありポロツと口にしてしまった。

「えっと、チャオって言葉は私の居た世界のある地域では挨拶の言葉なんです、出会った時には「こんにちは」の意味で使い、別れる時には「さようなら」の意味になるんですけど……」

その人も挨拶で使っていたんでは？と聞くと4人が「え……」と呟いた後、壁際に集まりヒソヒソと相談し出した。

なにそれじゃチャオって挨拶してただけ？我々の勘違い？意思を継ぐとか関係無い感じ？なに、我々のしてきたことって無駄？

どーっーっーん！と背景に文字が見えそうなほど暗く沈む空気と漏れ伝わってくる内容に言わないほうが良かったかもと、今日一番の地雷を踏んだことに今更ながらに気がついたミユキであった。

37・同郷者（後書き）

チャオ族の名の由来が出ました。
大方の予想道理ですいません・・・。

38・ミユキの在り方（前書き）

立ってられない地震というものを初めて体験しました。

棚から物が崩れ落ちていくのを初めて見ました。

コンビニから食料品が消え、道には交通手段を奪われた人があふれていました。

それでもこうして家で拙い文章を書ける自分は全然マシな方なのでしよう。

1人でも多くの方が家族の元に無事に戻れる事をお祈りします。

38・ミュキの在り方

夕闇が近づいてきた草原には草を食む^はことを止め帰路に着く羊や牛達の影が長く伸び、山裾に隠れつつある太陽が空を赤に染め上げていた。

雲の端々が一日の終わりを惜しむように金色に輝くのをガタゴトと揺れる馬車の御者台で見上げながら、ミュキはチャオとの話しを思い返していた。

チャオに促されパートナーとして手渡された水晶を取り出してみるとその姿には大きな変化が現れていた、毎朝起きたときに見るのが日課になっており今朝も見た水晶には変化は無かったのだが、託された力に目覚めた為か3センチ程の大きさの透明な水晶に赤い色が淡く色付いていたその姿は一回りほど大きくなり燃える焔を内包するかのよう^にに真紅に染まっていた。

「おお、それぞまさしく世界に認められ力を得た証。
今この時より、我らチャオはミュキ殿を守護聖人として御身^{おんみ}を守り、その歩みが健やかなるようお仕えいたします」

チャオの長老はそう言う^とミュキの前に平伏し、それに習い他の3人も平伏の礼を取ってミュキの前に臣下の誓いを立てていった。

「な、なにやってるんですか！やめてください、皆さん頭を上げて下さい」

「いえ、貴方様は世界に認められし守護聖人としてこの世界に降臨なさったお方、我らが伏して接するは当然の事」

「守護聖人ってなんですか！私はサンタクロースの代役で来ただけです」

「サンタクロースとは本来、世界の均衡を調節し正しき者には幸福を、悪しき者には罰を与える存在。」

その言葉は世界の意味にも等しいお方です」

「そんな・・・」

確かに元の世界でも日本ではクリスマスにプレゼントを配るイメージが強いが、世界各地にはそれと同時に悪しき者に罰を与えて回る伝承が多く伝わっている。幸福と罰を与える存在を別々の存在として双子という伝承もあったはずだ、そういえば私が感情を爆発させたとき、『彼』はもう1人の自分を生み出したと言っていなかったか？もしかしたらそのもう1人が双子という伝承になっているのかもしれない。

しかしそれはさて置きますはこの状態をどうにかしないと、どんな理由があろうと断じて私は人に平伏をされる立場では無い、敬われるとか以前に私自身を見てくれないようでは我慢が出来ない。

「今すぐ平伏するのをやめてください！でないと私、チャオ族から逃亡しますよ。」

それはもう力の限り、全力でもって逃げ回ります」

私の言葉にポカンと口を開けて長老を含む3人が呆気に取られていると、馴染みのチャオが長老達にミユキさんならホントにやりますよ、コチラが想像もしない方法で逃げ切りますよと

「本来ならこういう態度は許されないのですが、他ならぬ本人が拒

絶してるのですから無理強いするのは逆に失礼に当たってしまいますよ」

そついうとスックと立ち上がりいつもと変わらぬ笑顔を浮かべながら

「そついうわけで、改めてよろしく願いしますねミュキさん」

「はい、こちらこそお世話になります。

長老さん、私はチャオの皆さんを尊敬してるんですよ。貴方達の生き方はそれだけで私のお手本になります、どうか対等な立場で私に接してください」

守護聖人がどういうものか今はまだわからないがそれでも平伏などしないで欲しい。

だって平等な立場を望み見上げるでもなく見下すでもない同じ場所に立って共に笑い合える、その事を切に願う思いを叶えたからこそ私は認められたんだと思う。

世界に認められた自覚もないしそれがどういうことかもわからないけど、身近な人たちに認められたという思いが今の私を私らしくこうして立たせているんだと思うから……

「私を認めてくださるなら、どうかミュキとい1人の存在として扱ってください」

ペコリと頭を下げお願いすると少しの沈黙の後、クスクスと忍び笑いが聞こえてきたと思ったら堪えきれなくなったのかチャオの全員が大笑いし出した事に今度はミュキが呆気にとられ、そんなに変な事言ったかしら……とポカンとしていると

「いや失礼……この者の報告通りの人で安心しました。

なるほど、そういう考えのミュキ殿だからこそその守護聖人なのでしような。平等を願い自身すらもその枠の内に留まろうとする、強き力を得ても同じ高さで在ろうとする貴方の本質が選ばれた理由なのかもしれませんな」

「はぁ・・・ありがとうございます?」

多分褒められてはいるんだろう、しかし未だにクスクスと漏れる笑いにどうしても素直に喜べないミュキなのであった。

ある種リズムカルに揺れる馬車の上から物思いに耽りながらボンヤリと空を見上げていると

「大丈夫かいミュキ? 具合が悪いようなら一旦休憩するよ」

「え? あぁ・・・違う違う、ちょっと考え事してただけだから。それにチャオも言ってたでしょ、倒れたのだって寝不足の所にパン作りでがんばった所為で貧血起こしたただけだって」

「そうだけど・・・」

尚も心配そうに表情を曇らせるルビスに、心配させてしまって申し訳ないと思いつつもその優しさにチャオの別れ際の言葉が重く心に押し掛かってくる。

『ミュキ殿が覚醒したことは黒の一族も既に感付いているはずで、出来るだけ早くに我々の里に来ていただきたい。

彼らからミュキ殿を守る為でもあります。初代チャオが残したサンタクロースの書も保管されております、これは守護聖人……いやサンタクロースとしてこの世界に降臨した者以外は読むことは禁じられている書物ですので内容は存じ上げませんが、恐らくミュキ殿の今後に係わる物でしょう』

「大丈夫だつて、パンもこれで一段落したし今日からはぐっすり眠れるから寝不足も解消されるって。

後はご飯食べてお風呂に入って寝るだけだから……そうだ、ルビス一緒に風呂入るっか？」

背中流してあげるよ」と言うとは何故か真っ赤になって

「いいいいや、疲れてるんだから一人でゆっくりお入りよ」

「照れなくなつていいのに……」

変なのとクスクス笑うとバツが悪そうにしながらも、それだけ言えるなら大丈夫そうだねと少し安心したように微笑みながら馬車を走らせていった。

嘘ついてごめんねルビス、本当は新しい悩みを抱えてしまっているの……。

私を狙うという黒の一族、彼らは貴族に強い影響力を持っているらしく私の身を確保するためにその貴族達の権力を利用する可能性が高いこと、そしてその時にルビス達フィールランド家が抵抗した場

合は家族の身にも危険が生じる可能性が高いこと。

そして……私の家族は私を守るためにきつと抵抗してしまう。

他愛も無い会話を交わしクスクスと笑い合いながら馬車は進み家に辿り着いた、暖かい家族と暖かいご飯、温かいお風呂と暖かいベツトに包まれこの世界の一番大事な場所で私は幸せだった。

だから泣いてはいけない。

別れの刻が近づいていたとしても。

39・バナナ味がお気に入り・・・。

肥沃な大地と温厚な気候、豊富な資源とが揃えば自然と人口は増えていく。

レバント伯が居城する首都ザッカスは治める領内の豊富な物資に支えられ、その城下に列なる街には沢山の人々が住み着き王都に迫る民を要していた。

そんな中から特徴的な外見をしているとはいえ人一人を見つけ出すのはそれなりの時間を有し、結果この街には居ないという結論に達するまでに4日を費やしていた。

セテルが領主レバントの報告書を盗み見てから2日後に王都からの搜索隊が到着し、翌日より城下の搜索に入り既に無駄に6日が過ぎていた。

「やれやれ、やっとこの街の外に出られるな」

コキコキと首を左右に傾けながら街から戻ってきた搜索隊を見ながらセテルが貴族らしからぬ剣を鞘に納めていった。

普通の貴族は軽くて扱い易い片刃の細剣が刺突に特化したレイピアを使うが、傭兵として戦場を駆けたセテルは彼等が好んで使う甲冑の上からでも打撃を与える肉厚の刃を持つブロードソードに似た、しかしそれより更に20センチ程長いバトルソードと呼ばれる剣を腰に帯びていた。

力無き者なら逆に剣に振り回される程の重量のソレを軽々と片手で振り回すその姿だけで、搜索隊の面々からも一目置かれ外部協力者という立場からも自由に行動することが出来ていた。

今もその立場を利用しセテルはザッカスの街の搜索には加わらず日課の鍛錬に励んでいた、何故なら彼はこの街に目当ての黒髪の聖守護者なる者が居ない事を知っていたからだ。

「この人数ならもう少し早くに居ないと結論付けると思ったんだが、こんな事なら最初に言うか先に1人で出発しちまえばよかったな・
・」

領主レバントが10人にも満たないと思い込んでいた搜索隊は、到着してみればその数は50人を超える大部隊で大いにレバントを慌てさせたものだ。

わざわざ自分が王都にまで召還された懸案だというのに、それでも事を軽く見積もっていたレバントがその大部隊の宿舎等の手配に追われている様を内心で嘲笑いながら、その時には既にこのザッカスには探し人は居ないと結論付けていたセテルは他の領内の街の何処に居るかと思案していた。

50人の人間が4日をかけて探し集めた情報より多くの情報を、搜索隊が到着するまでの2日間でセテルはかき集めていた。

城下ザッカスだけではなく領内の街には子飼いの情報屋を多く困っている。その多くはチンピラであったり娼婦であったりだが、裏の世情に詳しい彼等の情報は金を払ってでも仕入れる価値がある。

どんなに剣の腕が立つともそれだけでは良い様に利用されて使い捨てにされるだけだという事をセテルは良く知っていた、それが師匠として尊敬していた傭兵団の団長のその命を支払った最後の教えでもあったのだから。

「それにしてもこんな短期間のうちにまたあの街に行く事になるとはな、折角だからついでにまたパンも仕入れてくるとしよう」

そして4日の内に集めた他の街の情報から彼は既に自身の行き先を決めていた。

同じ頃、噴水のある広場で露店を広げながら道行く人々を呆れたように眺める1人の女性がいた。

いつもならその端正な顔立ちに愛想のいい営業スマイルを浮かべ売込みをしているルビスだったが、今は道行く人々の姿に呆れるやら未恐ろしいやら複雑な心境を抱いていた。

この世界の人々には歩きながら物を食べるという習慣、というかそもそもその発想自体無かったのだが今通り過ぎる若者たちの手には『ふぁーすとふーど』と銘打った物が持たれ、嬉しそうな恥ずかしそうな表情を浮かべつつキャツキャと騒ぎつつ歩いていく。

噴水の周りには初々しい恋人同士が集い、日当たりの良い場所では荷物を降ろした商人同士が集まり、皆その『ふぁーすとふーど』を食べながら過ごしている。

そんなルビスの隣ではミユキが穏やかな笑顔でその光景を見つめている。

孤児院によるパンの販売は成功を収め、毎日販売されるようになった今では需要も追いつき安定した収入を孤児院にもたらしていたが、それと同時にもう1つの問題が発生していた。

それはパンの販売により街の食堂の売り上げが落ち込んだことであつた。

倒れた翌日こそ何か思い悩むように安静にしていたミユキであったが、その次の日からは街に繰り出し孤児院だけではなく他の食堂にも顔を出し始めていた。

各食堂を回り話を聞いたミユキは食堂で提供されている以前のまのパンに客が不満を持っていることを知り、孤児院から仕入れることを提案しその交渉の橋渡しをしつつ更に自身で考案した『薬草料理』のレシピも伝授して回っていった。

ある店にはシチューをその隣にはアップルパイをと、その後も考案して増えていった料理のレシピを惜し気もなく無料で教えて回るミユキの存在はあつという間に知れ渡り、目深に被ったローブで顔を隠しているのにその界限でミユキを知らない者はいないと言っほどの知名度になっていた。

「まったく・・・あつという間に有名になっちまって、どうすんだいこれから」

「エへへ・・・」

とポリポリと恥ずかしそうに頬を掻くミユキの頭を褒めてないからとコツンと叩くと、

「大丈夫だよ、食堂の人達にはサンタクロース商会の者ですって名乗ってるから私の名前自体を知ってる人は殆どいないよ」

「だからってねえ、アンタのその姿は余りにも此処らじゃ有名になり過ぎてるよ」

いつの間に仕入れてきたのか真っ赤な生地を使って新たにローブを作り上げていた。

かあさんと一緒に何かしてると思っていたけど、何もこんな真っ赤

なローブを作らなくても少し呆れるルビスであった。

フードの淵と前の合わせの淵を白い布地で飾り、手首の裾からは防寒の為に2重にしてある下の白地の布が数センチわざと覗くようになつており、腰から少し下の辺りから上の赤い布地を何回か斜めにカットして同じく下地の白い布を覗かせ可愛い仕上げになっている。更に胸の辺りから肩にかけてケープを付けたような仕上げをしてあり背中に垂れ下がる部分を三角にカットし、その先に白いボンボンがチョコンと付けられていて赤と白で構成された配色は白い肌と黒い髪のみゆきの魅力を十二分に引き出していた、が素顔を隠している状態では変わった格好の派手な人でしかなかった。

「ん、でも私のパンの所為で売り上げが落ちちゃった訳だし協力しない訳にはいかないじゃない？」

それに食堂関係の組合と孤児院で揉めても困るし、ちゃんとした関係を築ければ孤児院も更に安定するしパン以外にも利点を提供すれば食堂の組合にも受けがいいしねえ」

それに街の食堂の料理も美味しいほうがルビスもいいでしょ？と聞かれ、そりゃまあそうだけどねと答えつつ

「だからってこりゃあ少しやりすぎなんじゃないのかい……」

「あ……あははは……」

みゆきもここまで大事になるとは思っていなかったのだろう、広場の入り口を見ながら乾いた笑いを浮かべていた。

広場に差し掛かる通りには大きな2本の柱が立てられその間には大きく『びーきゆうグルメの街フィーリスによろこそ』と書かれていた。

『ビーきゅうグルメ』の意味をミユキに聞いたところ、庶民的な親しみやすい……そういう料理？という曖昧な答えが返ってきたのだが、ミユキからの提案を聞いていた組合長がその響きを気に入ったらしくそのまま使われることになったらしい。

そしてミユキの提案とは、他の街には無いフィリスだけの名物料理で穀物や物資目当てで訪れる商人だけではなく、その料理を目当てに訪れる観光客を増やしフィリスの街を活気付けるというものだった。

立地的に交易が盛んでも王都からの評価が低いブルガリーテ領主のレバントに、各領内の街長達は事有る事に更なる街の発展を促されていた為、組合長からその話を聞かされたたん飛びつく様にあつという間に事を進めていった。

そして街にはミユキが考案した料理が各食堂で飛ぶように売れ、下がった売り上げを挽回するどころかそれ以上の売り上げに店主の顔を綻ばせ、パンに野菜と肉を挟みマヨネーズと胡椒で味付けした『はんばーがー』と小麦粉を溶いた物を薄く焼き上げそれに牛乳から作ったという『くりーむ』と卵を使った『かすたーど』と果物を挟んだ『くれーぷ』を手にした人達が溢れかえっている。

今はまだ観光客自体は来ていないがフィリス住民と買出しに来ている商人だけでこの盛り上がり方だ、そんなに時間も経たないうちに自分の街に戻った商人達が自慢げに噂をばら撒いてくれるだろう。

世情に疎いと自覚しているルビスでさえ、この光景を見るとこれらの街の発展に期待を持ってしまう程である、さつき通った街長がスキップ気味に上機嫌だったのかもしれない事だろう。

「まあ、こうなっちまったもんはしょうがないさね。」

でもかあさんも言ってたけど、くれぐれもミユキは表立って行動するんじゃないよ、これ以上目立つちまうとミユキの事に必要以上に興味を持つ奴がでてきちまうかもしれないからね」

「はぁい」

ちよつと拗ねた様なミユキの返事に苦笑しつつ、今度はイチゴ味のクレープを頬張りつつルビスは至極満面の笑みを浮かべていた。

バナナとキウイに続きイチゴのクレープを食べ出したルビスに呆れながら、そんなに何個も食べると太るよ？1個だけだって結構カロリー高いのに・・・と窘めるが、フニャフニャと笑みを浮かべるルビスには既に聞こえていないのでした。

40・歩き出す先（前書き）

諸事情により長く更新が滞ったことをお詫びいたします。
更にまだ以前のような更新は出来ない状態にあります。
出来る限り更新していきたいと思っています、申し訳ありません。

40・歩き出す先

各種様々な薬草の匂いが立ち込める部屋で円卓を囲んだ4人のチャオ達が、それぞれ眉間に皺をよせ何度も繰り返し半ばうんざりしながらも、それでもやはり話し合わなければいけない話題を進めていた。

「一体いつになったらあの方は我等と共に街を出られるのだ！
今こうしている時でも黒達が攻めて来るかもしれないのだぞ！」

「王都から派遣された搜索隊は未だザッカスの街に留まり搜索活動をしているとのことです。

今すぐに……ということとはまず無いでしょう」

「それにしても……時間が無い事はお伝えしたはずでしょう？
なのに準備をするどころか、街を歩き回りパン騒動に続いてまた街中を巻き込んで何やら始めたそうではないですか」

「そうだ、俺達があればどこぞ忠告したのにまたあんなに目立つ行動をお取りになって……。

奴等に此処に居ますと伝えてるようなものだ！」

「それは……しかし、ミュキさんは聡明なお方です。ちゃんとあの方也の考えがあつての行動だと私は信じています」

むうううと3者が唸っていると、それまで黙っていた4人目が1つ息をついた後、

「報告書を見る限りミュキ殿とフィールランド家の繋がり是我等が

当初思っていたよりも遥かに強い絆になっているのだろう、そのことがミュキ殿の判断を鈍らせているように思うのだが・・・」

「はい、そうかもしれません。しかし逆にだからこそ家族を貴族達から守る為にこの街を出る事に頷かれたのでしょうか」

「ご降臨なさってまだ2月も経っておられないだろうに、それだけの期間でそこまでの関係を築けるものなのか？」

「その点は私も驚いていましたが、ミュキさんとルビスさんの間柄はまるで昔から一緒にいた者のようで、本当の姉妹のようでした」

他のご家族との関係も押して然るべきでしょう・・・と彼等の不思議な、それでいて羨ましいような絆を思い自然と笑みを浮かべていると、皆も何か感じ入る所があるのか眉間の皺を緩めていた。

それを見てこの街に住み着き一族の中で一番長く彼女を見てきたチャオは、ふとある事に気がついた。

確かに彼女は聖守護者サンタクロースとしてこの世界に降臨し、その力で世界に流れる運命を操り『幸運』を導くだろう。しかし、彼女はまだ『力』に目覚めたばかりで恐らく1度としてその『力』を行使してはいないのだろう。

だが既に、彼女の周りは幸せにあふれている。

フィールランド家に保護されたことはミュキにとっての幸運であるが、ミュキを迎えたことでフィールランド家には幸せが満ちている。ミュキが考案した料理やパンがもたらす利益という財政的な物だけではなく、元々欠けていた場所に力チリと収まるように自然とミュキは溶け込みそれだけで家族の中に温かい幸せが生まれてきている。

そしてミユキが街に来たことで騒動もあつたが、住民には酵母パンという新しい物が普及しそれに携わったことで孤児院と住民との距離が縮まり、孤児院にいたっては廃院の危機まで乗り越えてしまっている。

そして今も自分の足で歩き回り多くの人達と語り合つて知識を分け与え助言をし、より多くの存在に変化をもたらしている。

ああ、そうか・・・私が、ルビス達がこんなにも彼女に惹かれるのはそういうことかと、1人納得しクスクスと笑っていると他のチャオ達が訝しげに眺めていた。

モヤモヤと長く頭に張り付いていた疑問が晴れたことで上機嫌なチャオはそんな視線も気にせず、円卓の上の皿に残る自分の分のクレープに手を伸ばしパクリと食いついた。

3種類のクレープを人数分買つて来ていたが既に各々残り1個になつており、それを見た他のチャオ達も無くなつては大変と慌てて手に取つて食べ始めていた。

そして彼等は気づいていなかった、ここ数日ミユキの考案料理の試食をし更に食堂でもそれらの料理を食べ歩いてた自分達が、未知なる味覚の欲望に負け暴飲暴食の果てにプツクリとしてきていることを。

「さてと、それじゃ私はチャオ達の所へ行つてくるよ」

そう言いつつ長く座っていた事で固まった体を伸ばしながらミュキは立ち上がった。

このままルビスとの取り留めの無い会話を続けてもいたかったが、広場の入り口から此方へ歩いてくる見知った人影に気付いたので区切りを付けて出歩く事にしたのだ。

「ん、じゃあアタシも一緒に行こうか？」

「何度も通った道なんだし1人で大丈夫だって、それに毎回早くに露店を閉めてたら馴染みのお客さん来なくなっちゃうよ？」

「うつ・・・、それもそうだね。わかった一人で行ってきな、ただし気をつけて行くんだよ！」

過保護なんだからと呆れつつも、ちょうど背後に聞こえてきた足音に

「はあゝい、じゃあそういうことで、後のことは頼みますねマイセルさん」

「ん？どういふことかはわからないけどルビスの事は任されるよ」

さり気無くルビスの視界から歩いて来るマイセルさんを隠して立っていたミュキの影から、ヒョッコリと顔を出して自然に会話に加わってくる。

クリクリとした柔らかかそうな癖っ毛に少し下がり気味な目が合わさり、ジャニーズ系な顔立ちが笑顔を浮かべればルビスの顔は一気に真っ赤になりそれを見たマイセルさんはクスクスと更に笑顔を強くする。

この2人、この前のプチデートの時に何か進展があったらしくパンに託^{かこ}けて孤児院に会いに行ったり、こうしてマイセルさんの方が露店まで会いに来たりしていた。

ルビスに何があったか尋ねてみてもシドロモドロと誤魔化されるので、孤児院に行った際マイセルさんが1人の時に捕まえて問いただすと、

「ルビスは体ばかり大きくなっちゃってねえ、男女間の事はからつきしだったからゆっくり待とうと思っていたんだけど、君が背中を押してくれたことで近づいて来てくれたからね……」

どうやら臆病なルビスが距離を作り、それをマイセルさんが両手を広げて待ち構えている所を私が後ろからルビスをズドンと押したらしい。

見事両想いだったらしいが若干策士的なマイセルさんの様子に、早まったか？と思っているとポンつと頭に手を置かれ

「心配しなくても大丈夫、僕は一途だからね」

何しろ10年待ったんだから、とニツコリ笑ってきた。

待ちすぎだろう！と心の中で突っ込みを入れつつも想いは本物とわかったので、ミユキはよろしくお願いしますと頭を下げたのだった。

「んじゃ邪魔者は退散いたしますね、帰る時間までには戻ってくるよ」

アワアワとするルビスとニコニコとするマイセルに手を振り、ミユキはチャオの家のある方へと歩き出していった。

その先に新たな出会いが待っていることをミユキはまだ気付いていなかった。

41・届く声

なだらかな傾斜と荒い石畳の道の上を昼間近な強い光が濃い影を作り出し、そのコントラストの境目を越える度に馴れてきたはずの街道が何処か知らない場所へと続く道のような錯覚すら覚えさせる。

スタスタと、しかし他者から見ればトコトコといった歩みでミュキが赤いローブを纏いチャオの店を目指して進んでいく。

本人は自覚すらしていないが、先天的な境遇から長く自分の足で歩く事のできなかったミュキの歩き方はどこかぎこちなく、そんな所も周りからの庇護欲を増長させる原因になっているのだが物思いに耽^{ふけ}りながら歩くミュキは当然そんなことには思いも至らないのだった。

家族の安全の為にチャオと共にこの街を離れる決心をしたもののどう切り出したらいいか、どうやって説明すればいいかが判らず未だに言い出せないままズルズルと時間だけが過ぎていた。

そんなアンニユイな心境が昼の日差しの明暗に妙な錯覚を与えているのだが、人間本当にやらなければ成らない事が在る時ほど他の事が気になって仕方なくなったりする時がある。

人はそれを現実逃避と言ったりする。

そして現在、逃避真っ只中なミュキが考えていることとはこの世界の文化についてであった。

しかし文化とはいっても知っていることはこの街周辺くらいであり、政治や風習といったものはまだまだ知らないことの方が多いのだが、

そんな中でも衣・食・住という事柄についてある結論に達していた。それは衣と住に対して食の部分が大きく遅れているという事であった。

この辺りは農業と酪農地帯である為か多くの人が木綿で出来た服や毛皮を用いた服を着ている、夏場は麻素材の服もあるらしい、そして王都やその周辺の領地から来る商人達の服は更に洗練され羊毛の防寒着に身を包み亜麻素材の布地はきめ細かくもはやリンネルと呼べる程であった。

そして貴族達はシルク素材の服を好み刺繍やフリルをふんだんに使ったドレスを纏った貴婦人方が、新作のドレスの自慢合戦を繰り広げているそうだ。

そして目の前に建ち並ぶ石造りの家々。もちろん近代的な耐震、免震構造という発想は無いものの、基礎となる土台と外壁にはそれぞれ違う材質の石を用いたり、一見すると見過ごしてしまうようなさり気無い飾り彫りが随所に施されていたりもする。

街から外れた農場やフィールランド家のような農家の家は木造が多いが、ログハウスのような丸太を組んだものから日本家屋のような精密なものまで多岐にわたっており、そのどれもが丁寧なそしてどこかお洒落な造りになっている。話しには出てはいないが多分貴族の家には大理石なども使われているのだろう。

商魂逞しい商人や、職人氣質の大工達の手によってそれらの文化は広く普及し発展していったのだろう。

では衣と住に比べて劣っている食のプロ、料理人は商人や大工より気概が無いのか・・・という決してそんな事は無く、私が提供したスパイスの利用法や発酵調味料の存在、昆布や動物の骨などから取れるスープなどに目をキラキラとさせて食い入るように学び取

り数日後には独自の考えで新たな料理すら作りだしてみせていた。

そう、私のもたらした『異世界の食文化』の知識を得て、開拓者となった料理人達の手により新たな食文化は広く普及し発展していくのだらう。

人間の生活の基礎となる衣食住、その中で何故か発展の遅れていた食の部分、異世界より訪れし3人目のサンタクロース、もたらされた知識、世界を最適化する存在、運命を捻じ曲げる力……。

幸福になろうとする意思に幸福を授ける力、それは即ち欲望を叶える力。

知り得た情報はまるでパズルのピースのように複雑な形で絡み合い沢山のピースを憶測の元に組み立てるが、けれども重要なピースは未だ手元には無く決して組み立つ事は無い。

サンタクロースの言葉に踊らされ幻想を抱いてこの世界にやってきた私のなんと愚かな事か……。

与えられた力は決して思っていたような綺麗なものではないのだらう、『彼』は既に私は運命の輪から外れていると言っていたが外れているからこそ運命の輪に踊らされる存在なのだらう。

道化だね私って……。

自分の世界に入り込み自嘲気味に笑いかけたとき、モフっという柔らかな感触と共に視界が真っ暗になった。

「んな！」

と変な叫びをあげて飛び退くと目の前には1人の女性が優しくな笑みを浮かべて私をみつめていて

「あらあら、ちゃんと前を見て歩かないと危ないですよ」

と、ぶつかっただであろう私を責める訳でもなくニコニコと話しかけてきていたが、その時には既に私は彼女の顔から目が離せなくなっていた。

それ自体が光を発しているのではと思わせるほどの、きめ細かなシルク素材のような純白のドレスを着込み、その美しい体の線が栄えるAラインのドレスから伸びる肢体、薄く金色がかったシルバールンドの長い髪、薄い色彩の中で一際映える深い蒼い瞳。

現実離れしたその色彩よりも私の意識を驚掴みにしたのはその顔の造形であつた。

「お・・・ねえちゃん・・・?」

懐かしくよく見知った顔、しかし二度と会える事は叶わず記憶の奥に沈みかけていた顔。

この世界で姉と慕うルビスではなく、死に別れた実の姉『好葉』^{このは}の顔にそっくりな目の前の女性に美雪は知らず震える手を伸ばしてゆく。

「貴方が手を差し伸べるべきは私ではありませんよ」

優しいながらもキツパリとした声に我に返り、慌てて手を引き戻したミュキは改めて目の前の女性の顔を見つめた。

間違いようもなく好葉と同じ顔をしているが、自分と同じ純和風な色合いの彼女とはかけ離れた色合いの女性にやっと冷静さを取り戻したミュキは、同時に目の前の女性から自分に良く似たある種の『

異質差』を感じ取っていた。

元々この世界ではない異世界からやってきたミユキは物事の考え方、捉え方にどこか異質な物を抱え込んでいたが『力』に目覚めた今ではそれはより本質的な所にまで及んでいた。

まるでその存在自体が異質に思えてしまう自分から見ても目の前の女性は異質であり、コチラ側の存在であるとほぼ確信していた。

・・・コチラ側？

一瞬浮かんだ自分の思考に疑問が持ち上がるが、

「あちらを・・・」

スツと伸ばされた腕と共に促す声に現実へと引き戻され、目の前の女性に指し示された方角を見ればそこには街の外へと向かう細い路地裏へと向かう道が続いていた。

「よく目を凝らし、耳を澄まして彼の方角から届く想いを見つけてください」

姉の顔立ちをしているからか、それとも自分と同じものを感じたからか疑問を抱くこともなく促されるまま路地裏へと意識を集中していく。

しばらく意識を路地裏へと向けていたが特に変わったこともなくその集中を解こうとしたとき、スツと体温が下がるような感覚と共に強い感情が唸りを上げて一気にミユキへと流れ込んできた。

サムイ・・・サムイ・・・

タスケテ・・・コノコヲタスケテ・・・

襲い来る様な強い感情に胸の奥が締め付けられるようでまともに息をすることもできずに喘いでいると、

「流れ込む感情に飲まれてはいけません、貴方なら受け止められるはずです。」

しかし、受け止めた想いをどうするかは……貴方次第です」
受け止めるって言ったってどうしろって言うのさ！

人が苦しさに喘いでいるというのに目の前の女性は変わらず優しげな笑みを浮かべて佇んでいる。

次第にその笑みが小憎らしくなってきたミユキはキツと女性を睨んだ後、路地裏の奥へと視線を移し

「助けるってどうすればいいのさ！この子って誰のことだよ！一方的に言われたってわかんないんだよ！」

ヤケクソ気味に叫ぶと脱兎の如く、しかし実際にはトテトテと路地裏に駆け込んで行ったのだった。

路地裏に消えゆくミユキの後姿を見送りながら好葉という存在に似た女性はクスクスと、心底可笑しそうに笑っていた。その表情は先ほどまでの優しげな笑みではなく、悪戯が成功した子供のような無邪気な笑みであった。

「どうやって受け止めるんだって言ったって、ちゃんと受け止めて

行動しちゃってるじゃない」

想いを受けたからってそのまま抱え込むか捨て去ってしまふかは自由なのにねえ、と小さく呟きながらミュキが走り去った路地裏へとゆっくりと歩き出していった。

そしてその姿はクスクスと流れる声と共に風景の中へと溶けていったのだった。

41・届く声（後書き）

やっと身边が落ち着いてきました。

もう忘れ去られてる可能性がありますが、更新を再開したいと思います。

42・選択

路地裏を進んで行くと唐突に石畳は終わり腰ほどまで伸びた草原が広がり、申し訳程度の木柵が立てられているだけで街と外とを隔てる明確な区分けはなされていなかった。

少しばかり草を刈って家庭菜園のような畑が作ってあったりもするが、数歩進めば草を掻き分けて進むことになり走ったことで息があがった体から更に体力を奪い去ってゆく。

しかし、ゼエゼエと息をしながらも休む事無くミュキは少し先に暗い口を開ける森を目指して進んでゆく、路地裏を駆けているときには痛いくらいに響いていた想いが近づくにつれて段々と弱まってい

くことに焦りを感じ始めていたからだ。

「ちょっと・・・声が届いてこないよ。
これじゃどっちに行けばいいかわからないよ・・・」

森に入るときに一瞬躊躇したものの入ってしまえば開き直りズンズンと進み始めたミュキだったが、まだ入ってきた入り口が見えるほどの距離で助けを求める声は聞こえなくなってしまった。

この森の中で間違いないのに、あともう少しという所でぶつりと途絶えてしまった声にイライラとした感情が沸きあがってくる、知っているのだ先ほどまで自分に届いていた想いを。

あれは元の世界で自分に向けられていた家族からの、そして届けることができずにいた自分の想いにそっくりなものだった。目の前の大事な人を守りたい助けてあげたいという切なる願いと、同時に叶わないことがわかつている者の悲痛な葛藤。

それがわかつていながら、助けられるかもしれない『力』を持って
いながら此処まで来て場所がわかりませんという状況に陥っている
自分自身に、奥歯を噛み締めるほどの苛立ちを抱きミユキは力の限
り叫んでいた。

「助けたいんでしょう！助けに来たよ！もう此処まで来てるのに・・・

お願いだから、あと1回でいいから私に声を届けて！」

.....!

タスケ・・・ヲ・・・コノコ・・・ニ、タスケヲ・・・

イトシゴラ・・・タスケテ！

奥歯を噛み締め弱々しくも何よりも重みを持つた想いを全身で受け止める、目を見開き想いが通つてきた路を睨みすえる。

薄つすらと蝶の鱗粉が舞う様な光の路がミユキの目に映り、その軌跡を辿りながら奥へ奥へと森の中をひた走って行つた。顔や身体に

小枝が当たり頬に一筋の傷が付いたことも意に介さずに進むその姿を、森の中で息吹き始めた者達がジツと見据えていた事をミユキは気が付いてはいなかった。

どれくらい走ったのだろう、数分のような気もするし酷く長い時間だった気もする。

激しく肩を揺すり咽返りむせかえながら息をするミユキの前には、此処まで呼び寄せたであろう者が静かに横たわっていた。

ガツクリと膝を折り地面に座り込んだミユキは、目の前で既にその目に光を宿すことの無くなった1匹の獣の姿を見つめていた、それは酷く傷ついた姿をした狼であった。

人間の仕掛けた罠にかかったのだろう左前足は逃げる為に中程から引きちぎられ、体中に傷があり背には数本の折れた矢が刺さっている、その体毛は血と泥で染まり元がどんな色かすらもわからなくなっている。

そして母親であろうその狼の前には2匹の狼の子供が横たわっていた、啞えて逃げる間に傷付けてしまったのだろう傷が首にあるがそれ以外は殆ど怪我もしていないが、どれだけの間逃げたのか酷く衰弱してしまっているようであった。

このまま母親狼を放置していくことに罪悪感を抱いたが子供達の様子からして一刻を争う気がし、あとで弔いに来るからねと言いつき子供達を抱きかかえて医者であるチャオ達の元へと走り出そうとする。

「ダメですよ」

唐突に背後から声をかけられ、んなあ！と叫びながら慌てて振り向

くと先ほどの不思議女性コノハ（仮）が変わらぬ笑顔でミユキを見つめていた。

「なな、なんでここに！」

「なんでって、心配してこうやってついて来てあげたんじゃないですか」

「ついてきたって・・・い、いや、そんなことより、急いでこの子達を医者に連れて行かないとだから、じゃ！」

シユタツと手を上げ走り出そうとするミユキの襟首を後ろからクイッと摘みながら、その華奢な身体つきからは想像できない膂力でもってその場にミユキを縫い付け、

「ですから、ダメだと申しておりますでしょう？」

ニツコリと、しかし有無を言わせない迫力を伴って向けられる視線に好葉の面影が重なり条件反射で従いそうになるも、腕の中にある二つの命の重みに我に返り

「ダ、ダメってどうしてだめなのよ？」

早くしないとこの子たち死んじゃうかもしれないのに」

「そうですね、そのままにしておけば半日も持たず命の火は消えてしまつでしょう」

「だったら！」

「殺されますよ？」

突然飛び出してきた物騒な言葉に啞然としていると

「貴方が思うよりも人と狼とは相容れぬ存在同士なのですよ。

狼は人によつて狩場である森や草原を荒らされ、こうして罾を掛けられ命を落とし、人は狼によつて家畜を狩られ、時にはその命も奪われる。

そうやって抱きかかえて行く間に見つかれば大人達の手によつてその子達は殺されてしまうでしょうし、運良く医者のもとに行けたとしても素直に治療をしてもらえるとは思えません」

その言葉に愕然と腕に抱いた存在に目を向ける。

今は痩せすぎてしまっているがコロッと太ったらきつと凄く可愛いだろう、弱々しく震える身体も暖かくしてご飯を食べさせれば無邪気にじゃれ付いてくるかもしれない、色褪せた毛並みも元気になつてブラッシングしてあげればフワフワで艶々になつてくれるだろう。こんなにも愛しい子達を見殺しにすることも、ましてや殺させることも絶対にできない。

「じゃあどうしろつて言うのよ、助けられないと知つてて私を此処に差し向けたつて言うの?!」

「まさか、貴方なら助けられると『知っていたから』此処へと連れて来たのですよ」

その言葉を聞いてミユキは目の前で優しく微笑む存在が、とても恐ろしい者のように思えてきた。

最初から私のことを知っている風ではあったが、助けられると思つたではなく助けられると知っていると断言するということは、私がある種の『力』を持っているだけではなくその『力』の本質まで知

っている可能性が強い。

実はチャオ達ですらミュキが授かったサンタクロースの力の本質である『運命を操る力』の存在を知らないのだ。

あくまで幸運と不運を操りその力で人々の善行と悪行に正しくそれらを分け与え、それによって世界の均衡を保つ存在と思っっているらしい。

しかしこの場合、幸運を与えた位で死という本来逃れられない運命から助けられるとは考えにくい。

そう、知っているのだ。私がその『力』をもってこの子達に訪れる死という運命すら変えられるということを……。

「ええ、知っていますよ。」

でも安心してください、私は貴方を狙う黒の一族でもありませんし、それどころか貴方に仕えるというチャオ達よりも余程近い存在なのですから……

「……ですから、余り睨まないでいただけます？」

ガルルルルウと睨みすえるミュキに困ったような笑顔を向ける女性に

「ちょっと！私の心の中を読まないでよ！」

「心の中なんて読めませんよ、全部顔に出ていますよ」

「うっ！」

「さあ、こんな事をしている時間はありませんよ。

早く貴方の力をもってその子達を助けてあげてください、貴方にはそれ以外には選択肢は無いはずですよ」

その言葉にハツとして腕の中の子狼達に意識を戻す。

弱々しく震える2つの命、消えゆくそれすらも助ける力が自分にはあるかもしれない。

しかし、本当にそれは選んでも良い道なのか？

力の強さとその力が及ぶ範囲は反比例の関係にある、即ちこの場合、目の前のこの子達に力を集中する事で最大限に近い効力を持って発揮されるだろう。

その選択をすればこの子達は助かるだろうが、その時点で力の方向性は決まり私の知っているサンタクロースの、世界中に幸せを届ける物とは大きく違っていつてしまうことになる。

自分の目の前の人達だけに多くの幸せを与えるか、小さくてもより多くの人達に幸せを分け与えるのか。

どちらを選んでも何かが違う気がしてならない……。

それに本来逃れられない死というものに対して、こんなに軽々しく力を使つていいものなのだろうか？

そうだ、私はまだ何もしていない、私に出来得る事をまだ考えてすらいらない。

じつと黙ったまま俯いてしまったミュキをいぶかしみ、好葉に良く似た女性は追い込みすぎたか？と不安になり、声をかけようと一歩踏み出すと

「考える・・・考える・・・この子達が見つかったら殺されてしまう・・・ならどうすれば見つからない？」

チャオ達に見せても診察をしてくれないかもしれない、ならどうすれば診察させられる・・・？」

考える、考えると、呪文のように小さく繰り返し呟くミュキに気が付き呆然とその姿を見つめるしかできなくなっていた。

「決めた！」

そう叫び、迷い無く街へと走り出すミュキを呆然としたまま見送る女性の周りには、いつの間にか数人の男女が姿を現していた。その誰もが深い新緑の髪色や流れる水のような衣を纏っていたり、凡そ一目で人では在りえない姿形を成していたが、不思議とその姿には恐怖や不気味さといったものは無くどこか神秘的なものさえ感じさせる者達であった。

「結局、あの方の力の方向性を正す事はできなかったな」

「ええ、我々がこうして実体化してしまったことがその証拠ですね」

「この選択をするサンタクロース殿は滅多に現れないのだがなあ、いやはや、この世界は大きく変わってしまうなあ」

「自身がこの選択を選びつつあることに気付いていないというのが、また何と言つか……」

各々が勝手に話している中心でミユキの後姿が見えなくなった後も呆然と固まったままの女性であったが、やがてプルプルと肩を震わせると

「あはははは！あっはっはっはっは、いや面白い！

まさかこの期に及んでまだ力を使わない選択を取るなんて、しかもそんな行動に出るとは私の想像の斜め上ですよお母様！

いいでしょう、いいですよ、お望み通り貴方の望む存在になりましたよう！

たった今をもって私は宣言します、我こそは命を育み豊穡はくへくはくを与える者。

酵母の精霊にして豊穡を司る者、名はコノハ。

運命を操る力を分け与えられし者也」

その日、小さな小さな森の奥で人知れず精霊達が己の存在を明言し後の世に姿を現していくことになっていくが、同じ日に近くの街で数人のものが長い黒髪をなびかせながら走る1人の少女を見たという。

見たことも無い漆黒の髪に透き通るような白い肌の少女は美しく、多くのものがその姿に魅入られたという。

え？その少女が何かを抱えていなかったか？

・・・・・少女の顔にばかり気が行っちゃって覚えてないなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9528p/>

イヴから始まる物語

2011年5月25日05時42分発行